

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Social Relations and Face to Face Interactions between Visitor and Resident among the Central Kalahari San : Observations on Visiting Activity in !Koi !kom Community

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅原, 和孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004335

セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と
居住者の社会関係と対面相互行為

—!Koi!kom 定住地での訪問活動の観察より—

菅 原 和 孝*

Social Relations and Face-to-Face Interactions between Visitor and
Resident among the Central Kalahari San: Observations on
Visiting Activity in !Koi!kom Community

Kazuyoshi SUGAWARA

This paper analyzes the visiting activity of the Central Kalahari San in the sedentary community at !Koi!kom, focusing on three different aspects, *i.e.*, social relationship, social and economic transaction, and face-to-face interaction.

1) SOCIAL RELATIONSHIP: Adolescent males far more frequently visit the subject camp, composed of G/wi-speaking people, than do adolescent females. Adult females visit as often as do adult males, but their sphere of social intercourse is mostly restricted within the same linguistic group, whereas male social relationships range beyond the boundary of the linguistic group. The subject camp has especially close relationships with three different camps, the first and the second of which are connected with it by close consanguineous and affinal ties. The third camp, composed of G//ana-speaking people, has recently developed a symbiotic relationship with the subject camp. The correlation of visiting frequency with kinship distance is examined. It is significant that both males and females belonging to the category of non-kinsmen visit the subject camp only infrequently. Female consanguines for the resident females visit the subject camp quite often, whereas those for resident males rarely visit it. Longitudinal analysis of the composition of visitors reveals that more than thirty percent of the San people living in other camps have never visited the subject group, both during the first

* 北海道大学, 国立民族学博物館共同研究員

(1982/83) and the second (1984/85) research periods.

2) **SOCIAL AND ECONOMIC TRANSACTION:** Such economic transaction as giving-and-receiving-goods and serving-and-consuming-food occur frequently during visiting. The San men sometimes visit the camps of the Kgalagadi people, expecting some reward for their labor. However, various kinds of social transaction, such as round smoking, grooming, and joking physical contact, have as much significance as economic transaction in maintaining and reinforcing the affinitive bond between members of different camps.

3) **FACE-TO-FACE INTERACTION:** The camp can be characterized as a multi-layered micro-territory occupied by the residents. Greeting interaction is the specific way in which the intruder into a micro-territory establishes focused interaction with the occupants. Most greeting episodes occur between adult males in order to recognize each other as a mature man as well as to confirm the social distance above a certain degree between them. Two parties recognizing each other as close enough tend to omit greetings. The most important criteria for the closeness are consanguinity and co-residence. Sequential analysis of greeting reveals two important features: (i) The visitor is treated as if he were invisible until the greeting begins; and (ii) the right to initiate greeting is preferentially allocated to the residents. There are variable behavioral options open to the interactants; (a) a superfluous greeting addressed inappropriately causes a joking interaction accompanied by physical contact, and (b) episodes of delay, that is, postponing greeting in an ongoing interaction, confirm the ground rule to which the San men adhere that greeting must be finished in each dyad. Various kinds of 'small behavior', such as hesitating to enter a scene, seeking contact with children, and inspecting goods or matters which have been referred to in the ongoing conversation, can be analyzed in terms of strategy by a visitor aimed at having his presence acknowledged.

The primary purpose of visiting is to beg something. But visiting is also the social occasion which brings about pleasure for its own sake. The latter aspect of visiting is most evidently realized in the casual visiting by women, whereas goal-oriented visiting typically occurs when the San men visit the Kgalagadi camps. The social and economic relationship between the San and the Kgalagadi is open to the possibility of negative reciprocity. The discontinuity found in the networks of visiting relations

among the sedentary community leads to a reconsideration and redefinition of the concept of 'band'. The conventional program of greeting reveals two main themes that are contradictory to each other; the openness of the camp and the distinction between residents and non-residents. The camp as a micro-territory is open, in that the residents have no means by which to refuse access by non-residents to it. But residents are also situationally dominant to the visitor, in that they enjoy the right to introduce the latter into focused interaction by initiating greetings.

I. 序	(6) トピックの明瞭な会話
II. 対象集団と方法	2. Camp P からの他キャンプへの訪問の事例 (Sortie sample)
III. 訪問活動にみられる性差と社会関係	V. 対面相互行為
1. 訪問者の構成	1. 訪問者の proxemic 行動の特徴
(1) 青年の訪問者	2. 挨拶行動
(2) 訪問者の属する言語集団	(1) 挨拶の基本的パターン
2. 訪問頻度からみた他キャンプとの関係	(2) 性・年齢・訪問頻度との関わり
(1) Camp S	(3) 社会的距離との関連
(2) Camp Kj	(4) 挨拶の継起的構造
(3) Camp Ts	(5) 行動選択肢の多様性
(4) 疎遠なキャンプ	(6) 儀礼としての挨拶
3. 訪問活動と親族関係	3. 訪問者と居住者の戦略
4. 訪問活動の長期的変遷	VI. 討 論
IV. 経済的・社会的 transaction	1. なぜ訪問するのか —transaction のレベル—
1. Camp P への訪問の事例 (Visitor sample)	2. 誰を訪問するのか —社会関係のレベル—
(1) タバコのまわしのみ	3. いかにもふるまうべきか—対面相互行為のレベル—
(2) 物品の授受	
(3) 食物をふるまう	
(4) 労働の手伝い	
(5) 親和的な身体接触行動	

I. 序

ボツワナ共和国中央部の中央カラハリ動物保護区に居住するセントラル・カラハリ・サン (G//anakwe と G//wikwe) は著しく乾燥した環境に適応した狩猟採集民であり、その生態と社会については、田中二郎, George B. Silberbauer によって詳細に

研究されてきた [田中 1971, 1978; TANAKA 1976, 1980; SILBERBAUER 1972, 1981]。セントラル・カラハリ・サンは、ボツワナ政府の遠隔地開発計画により、1979年より !Koi!kom の井戸の周囲に定住を始め、政府から支給される救援物資、集団騎馬猟によって得られる肉、そして道路工事や民芸品製作から得られる現金収入に生計を依存させるようになってきた [田中 1986: 318-325; OSAKI 1984]。1982年には !Koi!kom 定住地の人口は530名を越えた [田中 1986: 326]。

本論文は、!Koi!kom 定住地におけるセントラル・カラハリ・サン（以下、単にサンと略記する）の日常の訪問活動の様態、および訪問者と居住者の間に交される対面相互行為の構造を記述し、分析するものである。本論文の目的は以下の3点である。第一は、訪問活動によって維持され、あるいは発展してゆく社会関係の動態を描き出すことを通じて、定住化がサンの伝統的な社会構造にいかなる影響を与えたかを明らかにすることである。第二は、挨拶行動をはじめとする居住者と訪問者の対面相互行為の特質を明らかにすることによって、サンの社会生活を司っている「行動上の基本原則」(ground rules) [GOFFMAN 1971: x-xiii] あるいは「慣習的プログラム」[菅原 1986a: 127-128] の一側面を把握することである。最後に、以上の2つのアプローチを統合し、サンをその典型とする、著しく流動的な狩猟採集民の社会において、個々人は集団をどのように認知し、集団に対していかなる帰属意識をもっているのかを明らかにしたい。

このような方法論を選択するにあたって注意を払わねばならない、いくつかの論点がある。まず、著しく高密度の人口を有する定住コミュニティの中での生活は、伝統的な狩猟採集生活とは対極をなすものである。このような特異な社会的環境の中で交されるサンの日常的な相互行為を観察することは、狩猟採集民にとってもっとも本質的な行動プログラムを明らかにするうえで、果たして有効なであろうか。Edwin Wilmsen は、過去1000年にわたってバンツー農牧民との複雑な接触を経てきているサンの生態学的研究から、狩猟採集民の“primitive”な適応機序を復元しようとする方法論を厳しく批判している [WILMSEN 1983: 17]。しかし、あらゆる文化にとって、人が他者の面前でどのようにふるまい、またお互いをどのように「処遇しあう」か [GOFFMAN 1971: x-xiii] は、もっとも根源的な領域であり、民族性の核をなすものである。むしろ、定住化という壮大な「実験」の中でこそ、サンにとってもっとも根源的な、他者に対する行動特質がかえってはっきりと現われる可能性は十分にある。サンの社会生活の根底にある暗黙の規則を明らかにすることは、生態学的パラメーターの限界を超えたより包括的な視野から“band society”の本質的特徴を明らか

にすることに寄与するであろう [GUENTHER 1985: 20-24]。

狩猟採集民の集団への帰属性を論じるにあたってもっとも関連の深い問題は、territoriality に関するものである。サンの territoriality に関しては今までさまざまな研究者が論じてきたが、それらのほとんどは生態学的観点から、有効かつ適正な資源への接近とその利用という問題を立論の中心としてきた [HEINZ 1972; WILMSEN 1973: 3-4; BARNARD 1979; SILBERBAUER 1981: 191-194; CASHDAN 1983]。Nicolas Peterson は、従来の「文化生態学的研究」はイデオロギーの重要性を軽視し、territorial organization の本質を曖昧にしてきたと批判している [PETERSON 1979: 125]。一方、対面的状況に関心を向ける研究者は、人間の身体が空間を占有するものであるかぎり、人間は常に自己の身体の周囲にある種の territory, すなわち “micro-territory” を形成していると論じている [GOFFMAN 1971: 29-32; SCHEFLEN 1975: 159]。このような視点は、イデオロギーに対する関心と同様に、従来のサンに関する territory 研究からは欠落していたものである。サンの territoriality に関する議論を真に行動的な基盤に据えるためには、それを性急に生得的な攻撃性に結びつける ([EIBLE-EIBESFELDT 1974] 批判としては [GUENTHER 1981: 111-115]) 前に、個々人が日常の相互行為の中で空間をどのように認知し、分節化しているかを探求することが不可欠であろう。

本論文で使用する、日常行動を司る ground rule という概念は、アメリカ中産階級に関する Erving Goffman の観察によって発展させられてきたものである [ゴッフマン 1974, 1980, 1985; GOFFMAN 1971]。Goffman の研究対象である高度文明社会とアフリカの狩猟採集社会とは、考えるかぎりもっともかけ離れた社会である。しかし私は、彼の提唱する “interaction ethology” の方法 [GOFFMAN 1971: x] は、原理的にはあらゆる民族集団に適用可能なものであると考える。少なくとも、人が他者の面前で行うことこそが、どのような社会においてであれ、社会秩序の根幹をなすという Goffman の主張が高い普遍性をもつことは確かであろう。狩猟採集社会に限って言うならば、日常行動の自然誌的記載の中から、それらの行動の底に潜むロジックを明らかにするという研究戦略こそが、「平等主義」と呼ばれる根源的な社会秩序を理解するうえでもっとも有力なアプローチなのである [KITAMURA 1986]。

もちろんサンの社会行動の ground rule を明らかにするという目標へ至る道は遠い。本論文は居住集団内での近接と身体接触を扱った別稿 [SUGAWARA 1984a; 菅原 1984b] と相補的なものであり、同時に、日常会話の構造に関する今後の探求へ向けての一ステップでもある。

Ⅱ. 対象集団と方法

本論文のもとになるデータは、1984年8月から1985年1月までのおよそ半年間、ボツワナ共和国の中央カラハリ動物保護区中央部の ≠Kade 地区内 !Koi!kom において収集したものである。ただし、訪問活動の長期的な変遷を明らかにするために、1982年から1983年にかけて収集したデータも参照した。

以下では、明確な空間的まとまりをもった個々の居住集団を“キャンプ”(//aeza)と呼ぶ。1984年には、!Koi!kom には18個のサンのキャンプと、Gyom, Metse-a-Manong, Menoatse などの周辺地域から移住してきたカラハリ族の7つのキャンプとが散在していた(図1)。ただし、定住地の北西には、およそ10軒の‘hut’(nglu:)が带状に分布する場所があり、ここでは明瞭な輪郭をもったキャンプを区別することはできなかった(図1の‘Belt’と記した場所)。

図2は、1982年と1984年の乾期(8月)に行ったセンサスを比較し、この2年間に起こったキャンプの構成の変化を模式的にまとめたものである。1982年度に記録された13のサンのキャンプのうち、1984年度まで構成が変化しなかったものは一つしかない。一般的に、定住地のキャンプは、年を経るにしたがってより小さいものへと分裂

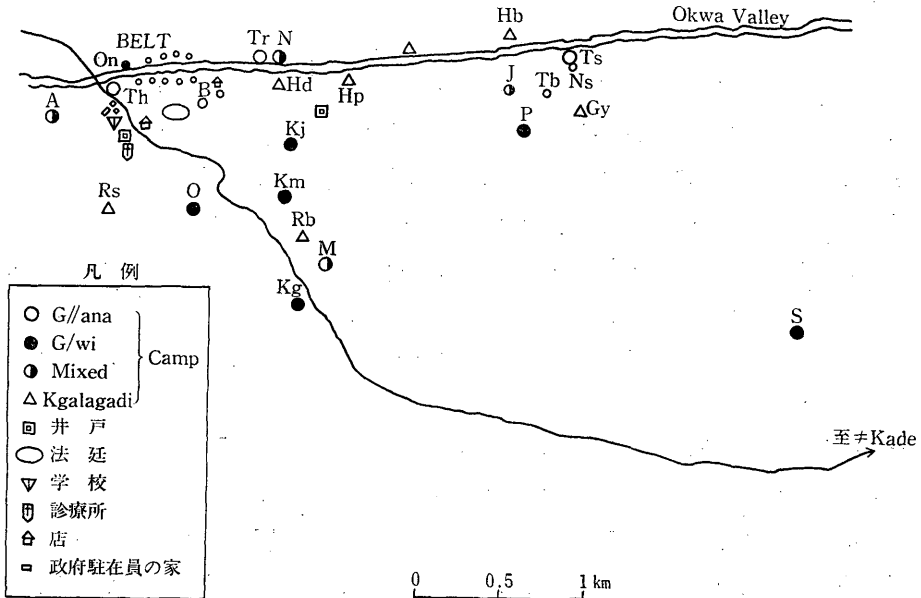


図1 !Koi!kom 定住地の概略的な地図

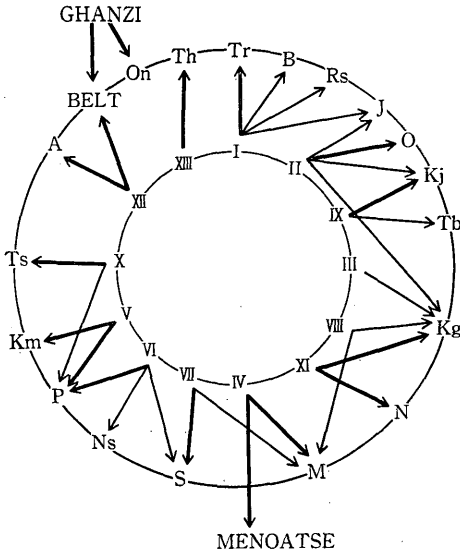


図2 1982-84年にかけての !Koi!kom 定住地におけるキャンプの構成の変化。内側の円周上のローマ数字 (I-XIII) が1982年度のキャンプ。外側の円周上のアルファベットが1984年度のキャンプを表わす。いずれも8月に確定された構成を示す。太い矢印は“cluster of families”の動き、細い矢印は一家族だけの動きを示す。

し、同時にキャンプ相互間の距離もより大きくなる傾向が認められる。

このような分散化を促す一つの原因は樹木資源の枯渇である。年を追うごとに過重なものになってゆく薪採集の労力を少しでも軽減するために、人々は、より周辺の場所を居住場所として選択するようになってきている。しかし逆に、定住地の中心から遠く離れて住むことは、日々欠かすことのできない水汲みの労力を増大させることを意味する。現在のキャンプの位置どりは、薪取りと水汲みという2種の拮抗しあう生業上の効率の間の妥協点を表わしているように思われる。

分散化を促すもう一つの、おそらくより重要な原因は社会的なものである。すなわち、人口密度の著しく高い定住地の中で増大の一途を辿る社会的緊張や葛藤を回避するために、人々はより小さく、より遠い集団の中にひきこもろうとしているようにみえる。

このような分散化・周辺化の傾向は、私が観察対象としてきた G/wi の集団において、もっとも典型的にみられる (図3)。1982年度には、対象集団は3個の隣接するキャンプ (V, VI, VII) より成り、居住者の総数は約70名であった。1984年度には、この集団は、基本的には3個のそれぞれ遠く離れたキャンプ (P, S, Km) に分裂していた。また老夫婦と幼児より成る一家族は単独で小キャンプ Ns を構え、もう一組の老夫婦は Camp M に合流した。これらのキャンプの中でも、とくに Camp S は定住地のもっともはずれにあり、井戸からは約4 km も離れていた。

私が1984年度の対象集団として選んだのは Camp P である。Camp P の居住者の

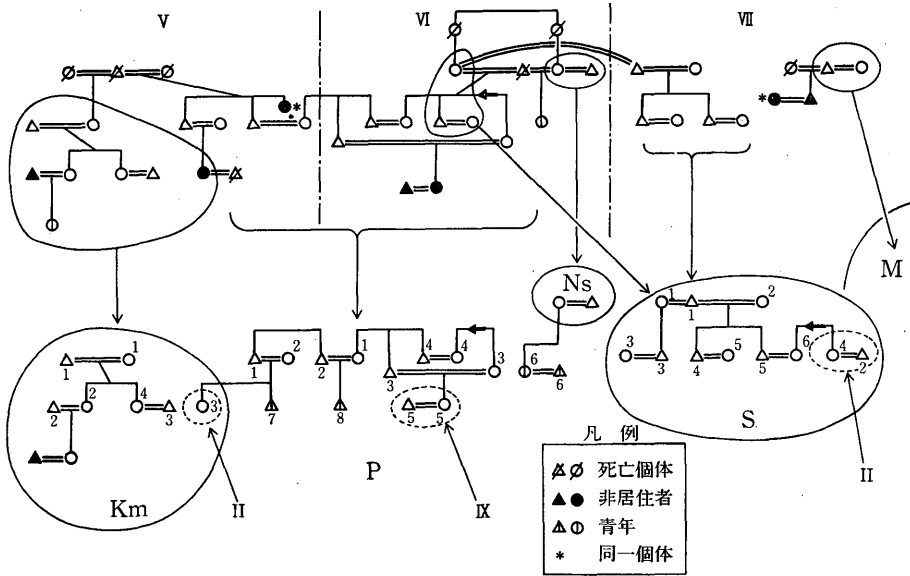


図3 対象集団の家系図と構成の変化

上が1982年度、下が1984年度のキャンプの構成を示す。sibling は原則的に年長順に左から右へ配列しているが、太い矢印を付したところのみこの配列が逆になっている。アラビア数字は1984年度の各キャンプ内での男女それぞれの年齢順位を示す。

総数は約30名であり、図3に示すように、その核となっているのは2組の兄弟の紐帯と1組の姉妹の紐帯とであった。以下で記述する事例の理解を助けるために、青年期以上の居住者の名前を表1に掲げる。また Camp S, Km, Ns の主要なメンバーの名前もあわせて示す。なお Camp P の成員は、1982年度の Camp IX から移り住んできた1人の男性 (Gyûbe:) を除けば、すべて G/wi 言語集団に属する。

Camp P の内部においては、早朝 (およそ午前7時) から日没後しばらくまで (およそ午後7時) の間に、このキャンプを訪問してきた青年期以上の個体を、私の目に把えうるかぎり、すべて記録した。このような “Visitor diary” は108日間にわたってつけることができた。訪問者と居住者の対面相互行為の詳細、とくに挨拶行動、proxemic 行動、物品の授受、パイプタバコのまわしのみといった行動項目を継続的に記載した。とくに1人の訪問者について比較的長時間 (30分~190分) 連続的に記録できた事例を “Visitor sample” と呼ぶ。また、Camp P から他キャンプへの成人男性の訪問に適宜、同行し、これらの男性が訪問先で参与した相互行為を記述した。これらの事例を “Sortie sample” と呼ぶ¹⁾。

なお本文中に G/wi 語、または G//ana 語を挿入する際の表記は原則として田中の編んだ辞書に従ったが、クリックの用法を若干修正した [TANAKA 1978b]。

表1 対象集団の主要なメンバー

Camp	男 性			女 性		
	番 号	個 体 名	年 齢 層	番 号	個 体 名	年 齢 層
P	1	Piri	老年	1	kielko	壮年
	2	N≠uekukjue	壮年	2	kloeg//ae	//
	3	Chu:≠uma	//	3	g//aekwe	//
	4	Kena:masi	//	4	n//ôba	//
	5	Gyûbe:	//	5	kxom	//
	6	//Kawashieho	青年	6	n//arekieho	青年
	7	Kire:ho	//			
	8	Tabu:ka	//			
Km	1	K//amak!ao	老年	1	bi:	老年
	2	D≠ena	壮年	2	k//aek//are	壮年
	3	/Eyamakwe	//	3	k!a:kama	//
				4	haba	//
Ns	—	N//ôsju:	老年	—	k!aoba	壮年
S	1	K!aek//ae	老年	1	g/oyashi	老年
	2	Kare:	壮年	2	k//aogi	//
	3	G//ure	//	3	k!o:kwa	壮年
	4	Shie:ho	//	4	tsaosie	//
	5	Hxara:	//	5	d/aoko	//
				6	kana:ma	//

番号とは、各キャンプ内における相対的年齢順位を表わしており、図3の家系図内に付したアラビア数字と対応している。男性の頭文字は大文字、女性は小文字で表記する。

Ⅲ. 訪問活動にみられる性差と社会関係

この章では、Camp P への他キャンプからの訪問者の構成と訪問頻度を分析する。この分析の目的は、1) 訪問活動にみられる男女の差を明らかにする、2) 訪問活動がいかなる社会関係に基づいて起こっているかを明らかにする、という2点である。

サンはあるキャンプを“訪問する”(gira) 途上で、短時間、別のキャンプに立ち寄ることがしばしばある。これを、かれらは“通過する”(n!ae:, G//ana 語では nge:) と表現する。Camp P はもっとも遠方の Camp S へ到る途上の格好の中継点となっているので、n!ae: する人々がしばしば見られたが、以下の分析では、Camp P の

- 1) 「対象集団から他のキャンプへ出向く」というニュアンスをはっきりさせるために「出撃」を意味する 'sortie' という英語をあてた。一見、奇異な用法であるが、人間の子供のエソロジカルな研究の中では、母親のそばから幼児が離れてゆく行動を指すのに使用されている例がある [ANDERSON 1972: 201]。

中に立ち入った人はすべて訪問者として扱う。滞在時間の相対的な短さ以外には、*n!ae*: を *gira* から区別する客観的な基準はないからである。もしも、訪問者が途上のキャンプに対して何ら関心を抱いていないか、あるいはその住人と出会うことが不都合であるような何らかの理由がある場合には、かれらは、キャンプからずっと離れた所を、傍目もふらずに文字通り「通り過ぎ」てゆく。それゆえわざわざキャンプの内部を *n!ae*: する人は、たとえ短時間であれ、そのキャンプの住人と進んで対面的な関わりをもつ用意があると考えられる。

1. 訪問者の構成

(1) 青年の訪問者

表2は108日間にわたって観察された Camp P への訪問者の総数と訪問頻度とを示す。男性は、訪問頻度、訪問個体数ともに、女性よりも約1.4倍も高い値を示している。しかし、未婚の青年による訪問の事例を除外すれば、男女の差はほとんどなくなる。すなわち、サン青年男性は、同世代の青年女性よりもずっと活発に他キャンプへの訪問を行っているのである。

このような、とくに青年期に顕著な訪問活動の男女差には、「未婚青年」という年齢カテゴリーに該当するポピュレーションの寡多が影響を与えていることは否定できない。一般にサンにおいては、男性の初婚年齢は女性のそれよりずっと高い [TANAKA 1980: 106] ので、「未婚青年」というカテゴリーには、つねに女性よりもはるかに多数の男性が含まれるのである。だが、青年期における訪問頻度の性差は、単に男女の人数の差のみ起因するわけではない。青年男性はしばしば徒党を組み、ロバを連ね

表2 Camp P への訪問事例数と訪問者の構成

項目	観察例	男性訪問者(%)	女性訪問者(%)	
事例数	青年の訪問	87 (27.8)	17 (7.5)	
	成人の訪問	226 (72.2)	209 (92.5)	
	計	313 (100.0)	226 (100.0)	
個体数	青年訪問者	17 (24.3)	1 (2.0)	
	成人訪問者	53 (75.7)	48 (98.0)	
	計	70 (100.0)	49 (100.0)	
	言語集団	{G/wi	34 (48.6)	30 (61.2)
		{G//ana	21 (30.0)	12 (24.5)
{Kgalagadi		15 (21.4)	7 (14.3)	

てキャンプからキャンプへと徘徊する。これに対して、未婚の青年女性がこのように一団となって歩き回ることにはほとんどない。Camp P にしばしば訪問してくる青年女性は、Camp S の居住者ただ1名にかぎられているが、彼女の訪問のほとんどは、!Koi!kom の中心の井戸へ水汲みに行くその行き帰りに立ち寄るものであった。このように、訪問活動にみられる性差は、青年期男女の社会的なありかたの差異を如実に反映していると考えられるのである。

(2) 訪問者の属する言語集団

表2から、男性訪問者においては、女性訪問者に比べて、Camp P の住人たちは異なる言語集団である G//anakwe やカラハリ族に属する人々が高い割合を占めていることがわかる。この点をより詳細に検討するために、各訪問者の属する言語集団と各個体の訪問頻度との関係を図4に示す。男女を問わず、カラハリ族の訪問者はすべて、訪問頻度4回以下という非常に「まれな」訪問者にしかすぎないことがわかる。このことから、カラハリ族の訪問者は、このキャンプの住人たちとなんら安定した社会関係を有していないと予想できる。いっぽう、訪問頻度9回以上の、いわば「常連」的な訪問者を比較すると顕著な男女差がうかびあがってくる。すなわち、女性では「常連」8名はすべて G/wi 言語集団に属しているのに対して、男性の「常連」13

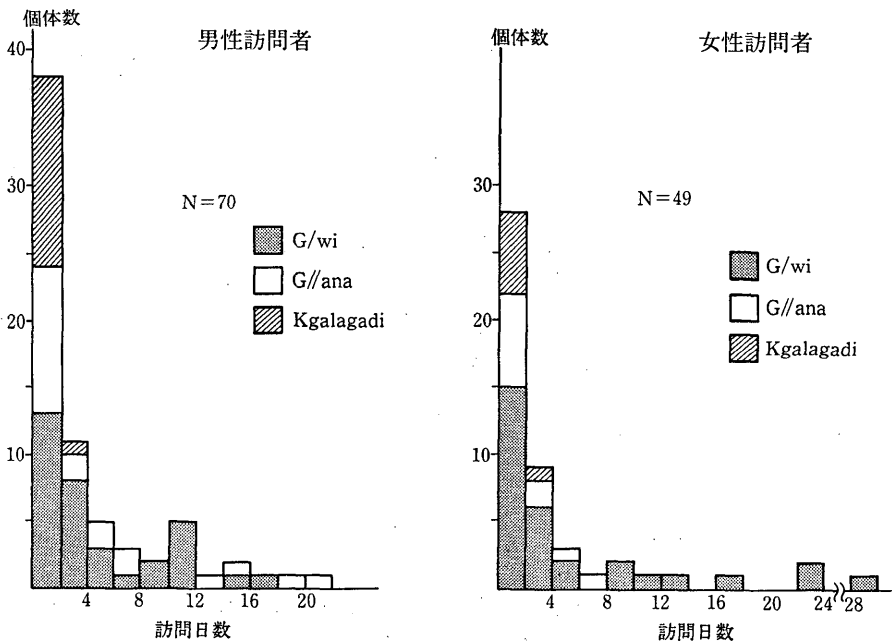


図4 対象キャンプへの訪問者の属する言語集団と訪問頻度との関係

名の中には4名の G//anakwe が含まれているのである。このことは、訪問を通じて維持されている女性の「社交」範囲はほぼ居住者と同じ言語集団内に限定されるのに対して、男性の「社交」範囲は言語集団を超えた広がりをもっていることを示唆している。

2. 訪問頻度からみた他キャンプとの関係

Camp P を訪れる人々が他のどのキャンプからやって来るのかを検討することによって、P と他のキャンプとの結びつきの強さを知ることができる(図5)。訪問者をもっとも頻繁に訪れてくるのは、S, Kj, Ts という3つのキャンプからである。さらに Sortie sample を用いて、Camp P の男性居住者が他キャンプを訪れたコースをトレースすると、やはりこれら3つのキャンプを非常に頻繁に訪れていることがわかった(次章の表7参照)。すなわち、これら3つのキャンプと Camp P との間の緊密な関係は、相互的な訪問活動によって支えられているのである。これらのキャンプとの社会関係には、それぞれ注目すべき特徴があるので以下に順次述べよう。

(1) Camp S

このキャンプからの訪問頻度は、男性によるものが女性のそれをやや上回っている。

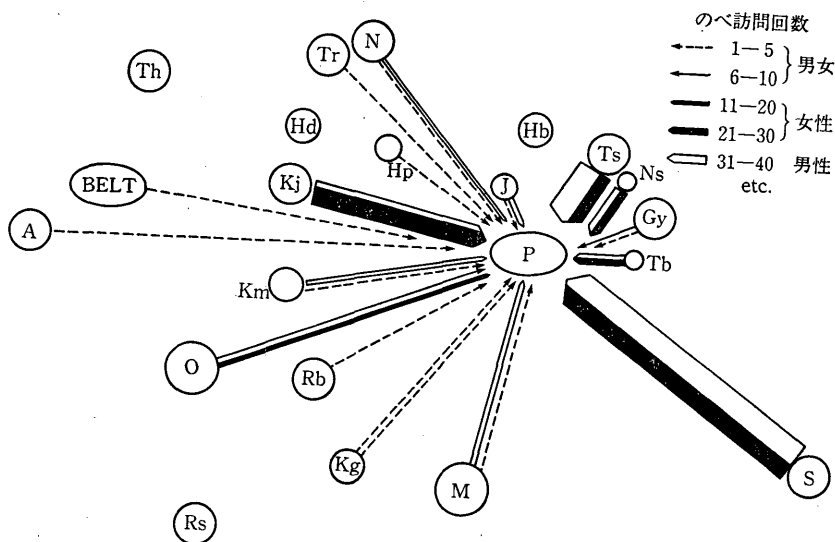


図5 訪問頻度からみた Camp P と他のキャンプとの関係。矢印の太さが他キャンプからののべ訪問回数(人×日)に対応している。円の配置はおおよそキャンプ間の距離と方向に対応している。

前の章で述べたように、このキャンプの構成員のほとんどは、2年前には Camp P の成員たちと同一の集団を形成していた(図3参照)。この2つのキャンプは強い一次親族結合によって結びつけられている。すなわち Camp P の一組の姉妹 (g//aekwe と n//ôba) の母 (g//oyashi) およびその男きょうだい (G//ure) が、Camp S には居住しているのである(図6)。P と S の成員たちは、ともに !Koi!kom から南へ 50 km 以上も離れた Kxaochwe を故地とする人々であり [田中 1978: 32-38; 田中私信]、この人々の間には長期にわたる連帯的な関係が維持されてきたと推測される。

しかし経済的にみると P と S との関係はけっして対等なものではない。S の核である、両親と既婚の2人の息子を含む大家族は、数10頭のヤギ、10頭近くのロバ、および2頭のウマを所有している。またこの2人の息子 (Shie:ho と Hxara:) は有能な騎馬ハンターであり、しばしば大型獵獣を仕留める。これに対して、P の人々が所有する家畜は、ごく最近まで、5頭内外のロバと他人に管理を委託している少数のヤギだけであった。Chu:≠uma と Kena:masi の兄弟は、現在でも精力的に弓矢獵を行う数少ない男たちであるが、その狩獵効率は騎馬獵には遠く及ばない²⁾。このような経済的不均衡は、後に訪問の事例を具体的に分析するとき考慮すべき、社会的文脈の重要な背景をなしている。

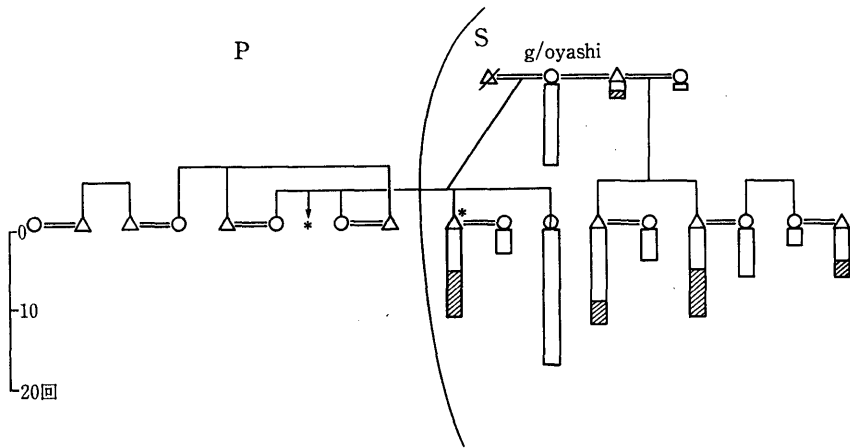


図6 Camp P と S との系譜関係と S の居住者の訪問回数。各個体の下に付したバーが訪問回数を表す。斜線を付した部分はその個体が登場したときに挨拶が起こった事例を示す。*印を付した個体の sibling 間での実際の年齢的位置は矢印で示す通り。図3の凡例と説明も参照せよ。

2) 1983年に Chu:≠uma は南アフリカ共和国の写真家に雇用されて数 100 pula (1 pula はおよそ160円) を稼ぎ、その金でウマを購入した。しかし、Chu:≠uma 自身はウマには乗れない。

(2) Camp Kj

Camp Kj からの訪問者は、女性が男性をはるかにうまわっている。この両者をつなぐ親族結合は女性 sibling を介したものである。まず第一に、Camp P の姉妹にとっての女性きょうだい (giuka) が、多数のヤギの所有者である初老の男性 (Kje:ma) の第3夫人として、Camp Kj に婚入している。第二に、Camp P の最高齢者である男性 (Piri) の妻の姉 (n//aen//aekwe) は、Kje:ma の遠い血縁親族である男性 (Sho:ho:to) の妻として Camp Kj に婚入している(図7)。giuka と n//aen//aekwe は非常に頻繁に P に訪問してきており、また採集に行くときも、P の女性居住者たちと同行することが多い。また Camp Kj は、丁度、Camp P から !Koi!kom の井戸へ至る道の中継点にあっているので、P の女性たちは水汲みに際してはほとんど必ず Kj に立ち寄り、小休止をとるのである。このように、Camp P と Kj との緊密な関係はもっぱら女性によって担われていることが特徴的である。

(3) Camp Ts

Camp Kj とは対照的に、Camp Ts から P への高い訪問頻度に寄与しているのはもっぱら男性である。Camp Ts の成員のほとんどは、純粋な G//anakwe と、かれらの故地である Gyom から移住してきたカラハリ族とである。また Camp P への常連訪問者に含まれている4人の G//anakwe の男性のうち3人までは、Ts の住人である。Camp Ts の中心的な人物である Tsomako は、!Koi!kom における最大のヤギ所有者である。また、彼の腹ちがいの弟 Gyube は天才的な騎馬猟の名手であり、!Koi!kom 全体で獲得される肉の量の中に彼の獲物が占める割合は膨大なものである [OSAKI 1984: 54]。このように、Camp Ts は、!Koi!kom においてもっとも豊かな

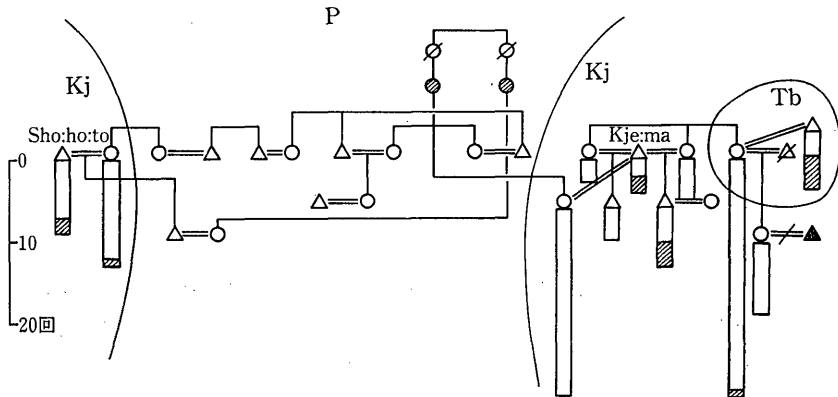


図7 Camp P と Kj との系譜関係と Kj の居住者の訪問回数。Kj とつながりの深い Camp Tb もあわせて示した。図6の説明を参照せよ。

キャンプであるといっても過言ではなからう。

Tsomako の娘は、先に述べた Camp S の男性 (Shie:ho) と結婚しているので、Camp P の人々も、この姻戚関係を媒介にして、古くから Ts の人々と交流をもっていたと推測される。しかし、この両キャンプの関係がかくも緊密になったのはごく最近のことであろう。この関係の発展にあずかっているのは、なによりもまず、両キャンプの空間的な近さである。もっとも豊かなキャンプである Ts と、おそらく、もっとも「貧しい」キャンプのひとつである P とが、共通して周縁的な位置への志向性を見せているのは興味深い。おそらく、周縁的な位置は、Camp Ts のヤギ放牧にとっても、また Camp P の人々が現在なお強く依存している採集と狩猟にとっても有利なものなのである。

このようにまったく対照的な経済的条件下にある2つのキャンプの間には、現在、一種の共生的関係がみられている。P の青年たちはほとんど毎日のように Ts に行き、ヤギの見張りや畑の垣根造りなどの“労働” (k̄e:) を行っている。かれらには、Tsomako から衣類やタバコなどの物品が給付されることもあるが、私は、青年たちが「Tsomako は何も支払ってくれなかった」と不平をこぼすのをしばしば耳にした。これよりも頻度は少ないが、P の既婚男性たちは、Ts で屠られたヤギの皮なめしを引き受けることがある。

さらにもっとも優秀な騎馬ハンターである Gyube ともっとも有能な弓矢ハンターである Chu:≠uma とは、時々、協同で狩を行うことがある。

Camp P と Ts との間にもみられる緊密な関係は、定住後の社会的・経済的環境の変化に対する適合のひとつの型をよく示している。しかもこのような共生関係は、性関係の中にも思わぬ副産物をもたらしている。Camp Ts の中年の夫人は、Camp P の青年と婚外の“愛人関係” (za:ku) [田中 1978: 188] に陥っており、彼女とその夫、あるいは青年と夫との間に確執を生じさせている。このような性関係の発展が、逆に両キャンプの経済的共生関係に影響を及ぼしてゆくことも十分に予想される。

(4) 疎遠なキャンプ

訪問活動によって Camp P と緊密な関係を保持しているキャンプ群とはまったく逆に、ほとんどその成員の誰一人として P に訪問してこないキャンプも一方では存在する。すなわち、Tr, Th, A, Rs, そして 'Belt' に住む人々は Camp P にめったに現われることがない (図5参照)。Camp P が定住地の他のキャンプと取り結んでいる社会関係のネットワークには著しい濃淡があるのである。社会関係のネットワークを定住コミュニティ全体の広がりの中でとらえるためには、異なるキャンプどうし

かどのような親族関係で結ばれているかを検討する必要がある。

3. 訪問活動と親族関係

私は1984年度に Camp P 以外のキャンプの居住者として、既婚男性82名、既婚女性102名の系譜関係を確定した³⁾。これらの人々は !Koi!kom に1984年度に現存していたサンのすべての成人の90パーセント以上に達すると推定される。この他にも、ごく最近 Ghanzi の町などから流入してきたサンが少数存在するが、これらの人々は本節での分析からは除外する。また、1984年度には、カラハリ族の成人男性21名、成人女性11名を同定したが、かれらの系譜関係は不明である。

Camp P 以外のキャンプに住む成人のサンを、Camp P の成人男女それぞれの視点から、血縁親族、一次姻族、二次姻族、非親族の4つのカテゴリーに分類した。これらの親族カテゴリーの定義については、別稿を参照されたい [SUGAWARA 1984: 26]。ただしこの分類に際しては、G//ana 言語集団に属する Gyûbe: と、まだ若い //Kawashieho という2人の男性居住者の視点は採用しない⁴⁾。

以上の手続きで明らかにされた各々の非居住者の属する親族カテゴリーの中から、男性居住者および女性居住者のそれぞれの視点からみてもっとも近いものを選び出し、これによってその非居住者と Camp P との親族距離を表わす(表3)。

Camp P を中心にした社会関係の広がりや親族距離との関連を検討すると、まず第一に、男女に共通した顕著な特徴として言えることは、非親族の訪問は非常に少ないということである。前節でも指摘したが、!Koi!kom の中心部近くのキャンプ群(A, Th, Belt) および Rs の成員が Camp P に現われることはめったにない。つま

3) 系譜関係は、次のような手続きによって確定された。まず1982年の8月から9月にかけて、Nharon の通訳の助けを借りて !Koi!kom に居住する大部分のサンの家系を、現存する最上位世代のひとつ上にまで遡って記載した。この概略的な家系図を、田中がすでに出版している #Kade 地域のサンの家系図と比較することによって修正した。1982年度に未同定であった人々については、1984年度に補足的な資料を追加した。田中が20年近くにわたって調査してきた人々、とくに G//anakwe の家系は、私自身が確定した Kxaochwe を故地とする G/wikwe のそれより、上位世代の関係がより詳しくわかっている。それゆえ、精度が等質でないこの家系図に依拠すると、G/wikwe の血縁集団の大きさは G//anakwe のそれより過小に評価される危険がある。しかし、現存する G/wikwe の内部で親族関係の遠近を推測したり、男女間で訪問と親族関係の相関を比較したりするためには、この家系図は十分有効であろう。

4) この2人の男性を除外する理由は以下の3点である。i) かれらは Camp P の成人たちのひとつ下の世代の女性と結婚しており、またいずれもごく最近になって Camp P に移り住んできた者たちであるので、Camp P を代表する男性メンバーとは考えにくい。ii) とくに //Kawashieho は非常に年若く、結婚して間もないので、むしろ「青年」と呼んだほうが適当である。iii) Gyûbe: は G//ana 言語集団に属しているので、彼の視点を採用すると、親族カテゴリーの類別は他の居住者たちのそれとはかけ離れたものになってしまい、典型的な G/wikwe のキャンプと他のキャンプとの社会関係を描き出すという目的には不適当である。

表3 Camp P への訪問頻度と非居住者の親族距離との相関

非居住者の親族距離		男性居住者の視点				女性居住者の視点			
		個体数	訪問頻度	χ^2 量	有意水準	個体数	訪問頻度	χ^2 量	有意水準
男 性	血縁親族	0	—	—	—	1 [1.2]	11 (2.6)	27.65	+++
	一次姻族	32 [39.0]	93 (82.3)	1.38	ns	26 [31.7]	81 (66.9)	2.97	ns
	二次姻族	18 [22.0]	90 (46.3)	41.19	+++	20 [24.4]	85 (51.5)	21.86	+++
	非親族	32 [39.0]	28 (82.3)	35.86	---	35 [42.7]	34 (90.1)	34.50	---
	計	82 [100.0]	211	78.43	0.001	82 [100.0]	211	86.98	0.001
女 性	血縁親族	10 [9.8]	9 (19.5)	5.65	—	6 [5.9]	73 (11.7)	321.17	+++
	一次姻族	34 [33.3]	143 (66.3)	88.73	+++	34 [33.3]	36 (66.3)	13.85	---
	二次姻族	21 [20.6]	36 (41.0)	0.61	ns	25 [24.5]	85 (48.8)	26.85	+++
	非親族	37 [36.3]	11 (72.2)	51.88	---	37 [36.3]	5 (72.2)	62.55	---
	計	102 [100.0]	199	146.87	0.001	102 [100.0]	199	424.42	0.001

1984年度に !Koi!kom に居住していたサンの成人のうち、系譜関係を同定しえた者を Camp P の主要な居住者の視点から4箇の親族カテゴリーに分類した。

[] 内は各親族距離に該当する個体数の百分率。() 内はこの個体数の分布に従って算出した期待値を示す。+および-の符号は観察値が期待値より有意に多いまたは少ないことを示す。(χ^2 検定, $df=1$)。符号1つ: $p<0.02$, 符号3つ: $p<0.001$ 。

りこれらのキャンプに居住する成人は、同定した男性の39パーセント (32/82)、女性の33パーセント (34/102) を占めるが、かれらの訪問は成人男性の全訪問例数の1.9パーセント (4/211)、女性の訪問の0.5パーセント (1/199) にしかすぎない。そして、これらのキャンプの住人のうち、男性の71.9パーセント (23/32)、女性の70.6パーセント (24/34) は、Camp P の男女いずれにとっても「非親族」のカテゴリーに属するのである。

以上のことから、!Koi!kom に住むサンの成人の約30~40パーセントは、Camp P の居住者と非常に疎遠な社会関係しかもっておらず、親族距離も非常に遠い人々によって占められていると結論できる。以下では、これらの人々を「疎遠な他者」と呼ぶことにしよう。

訪問頻度は、男女を問わず、親族距離と強い相関をもっている。しかし χ^2 統計量は次の順に大きくなっている。1) 男性居住者からみた男性訪問者、2) 女性居住者

からみた男性訪問者, 3) 男性居住者からみた女性訪問者, 4) 女性居住者からみた女性訪問者。このことから, 女性の訪問活動は親族関係, とくに女性どうしの親族関係にもっとも強い影響を受けているのに対し, 男性の訪問活動は親族関係とそれほど強い結びつきをもっていないと推測される。

とくに女性居住者にとっての女性血縁親族は, 極端に頻繁に Camp P を訪問しており, 女性の訪問活動のもっとも中心的な部分が女性どうしの血縁関係に基づいていることをはっきり示している。残念なことに Camp P の男性たちは, 前述した Gyúbe: を除けば, キャンプ外に男性の血縁親族をもっていないので, 血縁関係が男性の訪問活動に及ぼす影響を直接評価することはできない。

女性の訪問にみられるもうひとつの顕著な特徴は, 男性居住者と血縁関係をもつ女性の訪問が極端に少ないということである。すなわち, サンの女性にとって, 他キャンプに居住している男性の血縁親族は, けっして訪問するうえで魅力のある対象ではないと考えられるのである。

4. 訪問活動の長期的変遷

定住地のキャンプ間の関係は, 急速な経済的・社会的変容に伴って大きく変化していると予想される。この節では, 1984年度のデータと1982年度のデータを比較することによって, 訪問活動の長期的変遷を分析しよう。なお以下の分析では, カラハリ族の訪問は除外する。

1982年度には乾期に定住地の Camp V, VI, VII において61日間にわたって Visitor Diary をつけることができた。この間に40人の成人男性がのべ129回, 37人の成人女性がのべ96回訪れた。これに対して1984年度には108日間に成人男性40人がのべ189回, 成人女性41人がのべ191回 Camp P を訪れた⁵⁾。1982年度には1日あたりの平均訪問者数は男性2.1人, 女性1.6人であったのに対して, 1984年度では, 男女とも1.8人であった。

1982年度においては Camp V, VI, VII は非常に近接していたので, この3つのキャンプのどれかに訪れた訪問者は, ほとんど必ず他のキャンプにも立ち寄った。それゆえ1982年度の訪問者が1984年の Camp P の成員たちと出会った可能性は非常に高い。つまり, 2つの年度の間で訪問者の構成を比較することは, Camp P の現成員が日常出会う機会の多い他者の範囲の通時的変遷を知るうえでは有効であると考え

5) 1982年度の成人女性訪問者37名のうち1名は, 1984年までに死亡した。また, 2名は, 当時の所属キャンプがはっきりしなかった。1984年度の成人女性訪問者41名のうち1名は, 1982年度にはまだ青年であった。以上の個体はすべて次ページの表4から除外する。

られる。

1982年と1984年の少なくともどちらかに !Koi!kom に居住していたサンとして、男性88人、女性104人を同定した。ただし両方の年度において一貫して対象集団の成員であったものは除外する。これらの人々を、各年度における対象集団への訪問頻度に従って、「常連」(FREQUENT)、「時々訪れる」(OCCASIONAL)、「まれに訪れる」(RARE)、「訪れない」(NEVER) の4段階にランクづける。これに加えて、その年度において対象集団の居住者であった者 (RESIDENT)、および !Koi!kom に居住していなかった者 (ABSENT) という2つのグレードを設ける。なお1982年度に !Koi!kom に現存していた人々のうち女性2名が1984年度までに死亡したが、そのうち1名は対象集団の成員であった。

各個体がそれぞれの年次に属していた段階の変化を検討することによって Camp P に対する他者の関わりの変化の概略を知ることができる (表4)。第一に注目すべき

表4 対象集団への訪問頻度の変遷 (1982—1984)

(a) 男性個体数

1982 \ 1984	RES.	FREQ.	OCC.	RARE	NEVER	ABS.	計
RESIDENT	—	5	1	(1)	(1)	(0)	8
FREQUENT	1	1	(4)	(1)	(1)	(1)	9
OCCASIONAL	0	[0]	1	(7)	(7)	(3)	18
RARE	0	[0]	[2]	4	(4)	(3)	13
NEVER	0	[1]	[4]	[6]	24	0	35
ABSENT	0	[0]	[1]	[1]	3	—	5
計	1	7	13	20	40	7	88

(b) 女性個体数

1982 \ 1984	RES.	FREQ.	OCC.	RARE	NEVER	ABS.	計
RESIDENT	—	2	3	(2)	(4)	(0)	11
FREQUENT	1	1	(0)	(0)	(1)	(0)	3
OCCASIONAL	0	[2]	6	(3)	(5)	(1)	17
RARE	0	[0]	[1]	3	(9)	(1)	14
NEVER	0	[1]	[3]	[13]	41	0	58
ABSENT	0	[0]	[0]	[0]	1	—	1
計	1	6	13	21	61	2	104

() 内は対象集団との関係が弱まりつつあると想定される個体の数。[] 内は逆に強まりつつあると想定される個体の数を示している。訪問頻度の grade は次のようにして分けた。FREQUENT: 1984, 10回以上, 1982, 6回以上; OCCASIONAL: 1984 3~9回, 1982, 2~5回; RARE: 1984, 1~2回, 1982, 1回。1982年当時青年であった者は除外した。

ことは、非常に多くの人々が一貫して対象集団を訪れていないということである。すなわち、1982年度と1984年度の双方で !Koi!kom に居住していた人のうち、男性の31.6パーセント (24/76)、女性の40.6パーセント (41/101) が、一貫して対象集団を訪れていない。つまり前節で言及した「疎遠な他者」とは、たまたま1984年度に Camp P を訪れなかったわけではなく、かなり長期にわたって一貫して P に対して疎遠な関係を保持しつづけているのである。

第二に、1982年度に同一の集団に属していた人々は1984年度においては、もっとも頻繁な訪問者となる傾向が強い。しかし、かつての co-member の中には、著しく訪問頻度が少なくなったり、あるいはまったく訪ねてこなくなる者もまた一方では存在する。とくにこの傾向は女性で甚しく、1982年度の co-member 11人のうち、半数以上の6人は1984年度には、Camp P をほとんど訪れていないのである。このようにかつての co-member が急速に疎遠になってしまうことの背後には、何らかの社会的葛藤が潜んでいる可能性もある。

そして第三に、1982年度から1984年度にかけて、訪問頻度の段階を上昇する個体よりも、それを下降する個体の方がずっと多いのである。これは、定住コミュニティにおける各キャンプの孤立化の傾向を示している。すなわち、社会的緊張に満ちた密集状況の中で、人々は余分な社会関係を断ち切り、気心の知れあった者たちの間だけの交流の中に閉じこもろうとしているのかもしれない。

1982年度から1984年度にかけての訪問頻度の変化に基づいて、Camp P の現成員たちが他者とり結んでいる社会関係の類型を以下の3種に区別できる(表5)。

(1) 安定した関係：これは次の2つの亜類型に分けられる。

(a) かつての co-member との安定した関係が現在も続いているもの。Camp P と S との緊密な関係は、その代表的なものである。

(b) 両年度を通じてしばしば対象集団を訪れる者たち。この類型に該当する男性6人は5つの異なるキャンプに分布しているが、女性8人中6人までは Camp Kj に集中している。また Camp Ts の Gyube を除いては、P の近隣のキャンプの住人はおらず、かれらが P の居住者と結んでいる関係は、キャンプ間の空間的距離にかかわりなく、長期間安定していると推測される。

(2) 発展しつつある関係

1982年度にはほとんど対象集団を訪れなかった(または !Koi!kom にいなかった)にもかかわらず、1984年にはしばしば訪れる者たち。これに該当する男性6人中4人、女性6人中5人までが Camp P の近隣のキャンプの住人である。したがって、この

表5 Camp P に対する他のキャンプの居住者の社会関係の類型

社会関係の類型	男 性				女 性			
	名 前	変 化 の 型	キ ャ ンプ	言 語 集 団	名 前	変 化 の 型	キ ャ ンプ	言 語 集 団
安定した関係 (a) かつての Co-member	G//ure	RES.-FREQ.	S	G/wi	(a) g/oyashi	RES.-FREQ.	S	G/wi
	Hxara:	//	//	//	klaoba	//	Ns	//
	Shic:ho	//	//	//	(b) giuka	FREQ.-FREQ.	Kj	G/wi
	K//amak!ao	//	Km	//	k/ara:	OCC.-OCC.	//	//
	N//òsju:	//	Ns	G//ana	n//acn//aekwe	OCC.-FREQ.	//	//
					t≠eya:	OCC.-OCC.	//	//
(b) 他のキャンプ	Gyube	FREQ.-FREQ.	Ts	G//ana	≠ono:	//	//	//
	Kare:	FREQ.-OCC.	S	G/wi	kxare:se	//	//	//
	Tsebe: ka	//	Kj	//	g/ari	//	O	//
	T≠a:	//	O	//	gjòkjue	//	O	//
	Tseu/ori	//	M	G//ana				
	Kje:ma	OCC.-OCC.	Kj	G/wi				
発展しつつある関係	Tse:ko	NEV.-FREQ.	M	G/wi	hxaiga	NEV.-OCC.	O	G/wi
	Sho:ho:to	NEV.-OCC.	Kj	//	kui	//	J	G//ana
	H/ua:ko	//	J	G//ana	k//anc	//	Ts	//
	Tsomako	//	Ts	//	k//aopuri	NEV.-FREQ.	//	//
	K≠a:	//	//	//	zai	RARE-OCC.	//	G/wi
	Tsabi:	ABS.-OCC.	Tb	//	tsene:	OCC.-FREQ.	Tb	//
弱まりつつある関係	/Eyamakwe*	RES.-NEV.	Km	G//ana	bi:	RES.-NEV.	Km	G/wi
	/Ó:≠tebe*	FREQ.-NEV.	O	G/wi	hxaba*	//	//	//
	Hxaurikwe	OCC.-NEV.	Kg	G//ana	k//aek//are	//	//	//
	Tse:ho	//	Th	//	t//òchira	//	M	//
	Muratoe	//	//	//	hxo:	OCC.-NEV.	//	//
	Kxoikene	//	BELT	//	ne:ne	//	Kg	//
	Chun//owa	//	Rs	//	hakibobòne	//	//	//
	Horarigjo*	//	M	G/wi	kjuemakwa	//	Rs	G//ana
					≠an	FREQ.-NEV.	O	G/wi

「変化の型」の欄の左側が1982年度、右側が1984年度の訪問頻度の grade をさす。表4参照のこと。*を付した個体には Camp P の男性は訪問先で出会っている。病気のため出歩けない個体は、「弱まりつつある関係」から除外した。

社会関係を発展させている大きな要因は、現に空間的距離の近い場所に居住しているという、そのことであろう。また、次章で述べるように、商取引、愛人関係、新たな婚姻関係の成立といった個別的な至近要因も、これらの人々の頻繁な訪問を促している。

(3) 弱まりつつある関係

1982年度には Co-member であったか、あるいはしばしば Camp P を訪れていたのにもかかわらず、1984年度にはめったに現われなくなった者たち。これらの人々の一部とは、Camp P の住人の方が他キャンプを訪問したときに出会っていることが観察されたので、両者の関係が完全に消失したと断定することはできない。しかし、一方では、これらの人々のある者と Camp P の住人との間に、はっきりした社会的対立のあることが推測される場合もある。とくに ≠Kade 以外の地域から最近流入してきた G//anakwe の男性たちと Camp P の居住者との間には、はっきりした反目のあることがわかっている⁶⁾。

Camp P と他集団との社会関係の通時的変化の特徴をまとめると、長期にわたって変化しない側面と、急激に変化する側面とが織りなされ合っているとと言える。ネガティブな意味で、変化しない側面とは、かなり多くの人々が一貫して対象集団と「疎遠な」関係にあるということである。ポジティブな意味では、安定した社会関係をもつ男女各5、6人の人々が他のキャンプに存在する。しかし、このような安定したパートナーと呼ぶ人々が男性の場合には複数のキャンプに点在しているのに対して、女性の場合にはたったひとつのキャンプに集中しているという事実は、またもや男女の社交範囲の広がりや差を如実に示しているのである。

変化している側面としては、古い関係が新しい関係にとって代わられるという過程が重要である。新しい関係の成立には、現時点での空間的近隣関係をはじめとするさまざまな個別的・偶発的な至近要因が関与している。逆に、古い関係が捨てられてゆくことの背後には、さまざまな社会的葛藤が潜在していると推測される。

6) たとえばかつての co-member であった /Eyamakwe は、1979年以降 Ghanzi から流入してきた G//anakwe である。1982年度の調査期間には、対象集団の居住者の男性が彼に対する反感を表明したり、彼と口論したりすることが観察された。また、Camp Rs の Chun//owa, kjuemakwa の夫妻は、1982年に Metse-a-Manong から移住してきた人々の一員であり、カラハリ族の血を濃くひいている。1984年度には、Camp P の住人のみならず、他のキャンプのサンたちからも Chun//owa に対する反感の声が聞かれた。たとえば、G//ana の一少女の死が、彼の妖術のせいであるという噂が立ったことがある。

Ⅳ. 経済的・社会的 transaction

この章では、訪問活動によって、訪問者と居住者との間にいかなる社会的・経済的 transaction が実現されているのかを分析する。ここで transaction とは何らかの実利的 (practical) な目的をもって遂行される相互行為のことである。とくに transaction と名づけるような相互行為を他の相互行為から区別する理由は、それを行うことが、他のキャンプを訪問しようと思いつ有力な動機になっていると予想されるからである。

とはいえ、実利的な目的をもった相互行為を非実利的な相互行為と区別する基準は、それほど厳密なものではない。とくにある相互行為が<楽しみ>や<快楽>を追求するものである場合には、実利性という基準はあまりにナイーブなものである。たとえば「会話」は、その大部分が<楽しみ>や、あるいは単なる暇潰しとしてなされるかもしれないが、その合間に実利的に価値のある情報が交換されたり、政治的な decision-making に関わる討論が挿入されることもあろう [SILBERBAUER 1982: 26-27]。

そこで本章では、観察者がもっとも容易に把握しうる transaction の形態として、物品の授受、商取引、労働の援助といった経済的活動を取り扱うことにする。それに加えて、経済的な価値はまったくないが、居住者と訪問者の親和的關係を確認したり強化したりするのに役立つと考えられるいくつかの身体接触行動をも分析の対象とする。この論文では、会話の内容については立ち入った分析を行うことはできないが、とくに会話の中心的主題が明らかになったもので、居住者と訪問者の transaction の様態を照射するうえで重要と思われる事例については逸話的に記述する。

なお以下では、Camp P への他キャンプからの訪問の事例と、Camp P の男性居住者たちが他キャンプを訪れた事例を別個に取り扱う。両方の分析結果を比較することによって、!Koi!kom community において Camp P が占めている社会的ニッチェを明らかにすることができるだろう。

1. Camp P への訪問の事例 (Visitor sample)

表6には22例の Visitor sample と、そこで観察された8種類の transaction の頻度を示す。ここに示したデータは、私が観察の焦点とした訪問者以外の訪問者——すなわち観察開始前からすでにその場にいた訪問者と観察継続中にその場に現われた訪問者——が関与した transaction の事例をも含んでいる。それゆえ、時系列に沿った厳密な分析や、単位時間あたりのある transaction の生起率を求めることは難しい。

表6 Camp P で訪問者の滞在が継続的に観察された事例 (Visitor sample) とそこで起こった transaction

分類番号	観察時間 (分)	訪問者数		居住者数		transaction の形態								
		男	女	男	女	Smoke	Donate	Feed	Water	Groom	Help	Joke	Child	
V 1	70	6		2	2	1	3							
V 2	75	1	1	1										4
V 3	40	(1)	1	(1)	(2)		(2)	1						
V 4	40	1		(2)	(2)	1								1
V 5	115	(2)	2		2	1(1)		2	1	4(8)	1	1		1
V 6	110	2	1	4	5	1(2)			1			1		
V 7	105	2	3	3	5	[1](2)	2		1	3				
V 8	65	1		2	1	1								
V 9	55	5(4)		6(2)		1								
V10	205	1	4	4		1(2)		2			2			
V11	125	1	5	4(1)	3	2	(1)	2	1	4				
V12	125	3	5	3	4	1(1)		1(1)		5[1]		1		
V13	85	(1)	2	3		21	(1)	2(1)			8			
V14	85	(1)		3				1						
V15	190	3	3	1	5	2		2	1	7[6]		1		
V16	55	(1)		4(2)		2	2							
V17	35		3(1)		3	1[1]				1[2]			[1]	
V18	130	5(1)		5	1	1	1	1						
V19	85	2		2			1		1					
V20	45	2		4(3)		1							1	
V21	80	2		4(1)	(1)						3			1
V22	60	3		5(1)										3
計	1980	40(11)	30(1)	60(13)	31(5)	18(10) [4]	9(4)	14(2)	6	24(8) [9]	14	5 [1]		10

訪問者数および居住者数は観察継続中にその場に参与したのべ人数。()内は青年を表わす。transaction の回数は5分間の観察ユニット数で示した。()内は訪問者のほうが物資の提供者であったか、または接触行動で能動的役割をとっていたことを示す。[]内は訪問者どうし、または居住者どうしでその transaction が起こっていたことを示す。Smoke: タバコのまわしのみ、Donate: 物品の贈与、Feed: 食物をふるまう、Water: 水を所望する、Groom: 虱取り、Help: 作業の手伝い、Joke: 冗談的行動、Child: 子供に接触を求める。

唯一の例外は、すぐ下に述べるタバコのまわしのみである。

(1) タバコのまわしのみ

タバコのまわしのみは、Camp P において居住者と訪問者の間でもっとも頻繁に交された transaction である。タバコのまわしのみは Visitor sample の 72.7パーセント (16/22) で起こっている。その生起率は、0.97回/時である。ただし、まわしのみ全事例の12.5パーセント(4/32)では、訪問者どうし、または居住者どうしの間で、パイプがやりとりされた。訪問者と居住者の双方が関与した事例のうち、64.3パーセント (18/28) で、そのとき消費されるタバコの葉を居住者が提供していた。

タバコはサンにとって欠かすことのできない嗜好品である。人々はタバコの煙を胸の奥深くまで吸いこみ、咳きこんだり、苦しげに顔をしかめたりしながらも、その強い刺激に陶酔する。このような陶酔を共有することは、対面的状況を活気に溢れたものにするであろう。

多くの場合、タバコのまわしのみにはその場にあわせたすべてのおとなが関与するので、時系列に沿った分析を行うことができる。登場から退去までの行動を30分以上連続して記録できたのべ39人の訪問者は、すべて登場後50分以内に、またその半数以上は15分以内に第1回のまわしのみに関与した (平均14.9分)。それが終わってから訪問者が立ち去るまでの時間の平均値は41.9分であった。つまり第1回のまわしのみは、訪問者の全滞在時間の最初の4分の1が経過するまでの間に集中的に起こる傾向がある。以上から、タバコのまわしのみは、訪問者を「場」に迎え入れると同時に、その場を長時間安定化させることに寄与する、ある種の「儀式」としての性格を帯びていると考えられる。

(2) 物品の授受

食物としては“肉” (*k/a:*)、 “トウモロコシの粉” (*mai*)、 “タバコの葉” (*sjui*) の受け渡し実際に観察された。これらはいずれも、訪問者によって持ち帰られるという点で、次に述べる「食物をふるまう」という transaction とは区別される。食物以外の物品としては、“斧” (*bó*)、 “小斧” (*n!ubi*)、 “槍” (*kxaot*) の受け渡しが観察された。しかしこれらの事例の中には、単なる貸し借りも含まれている。

肉の授受はけっして頻度は多くないが、Camp P と他のキャンプとの経済的な transaction として、本質的な重要性を帯びている。前の章で述べたように、Chu:- \neq uma-Kena:masi の兄弟は、弓矢猟によって時々キャンプに肉をもたらす。また Chu:- \neq uma が最近購入したウマ (脚註2) 参照) は、時々他のキャンプのハンター

に貸与されるので、獲物があれば、Chu:≠uma は肉の分配にあずかることができる [OSAKI 1984: 58]。こうしてキャンプ P にもたらされた肉のかなりの部分を Camp Kj からの男性訪問者たちが持ち去ってしまうのを数回目撃した。このことは、Camp P の居住者たちが、Camp Kj に対して何らかの経済的負債を負っていることを推測させる。その負債の主なものとして「酒」と「子供の寄宿」をあげることができる。Camp Kj ではしばしば酒が造られて酒宴が催され、そこに Camp P の男性たちも参加するのである。酒宴の席ではホストと客の間に「どのくらい飲むか?」「50テベ分もらおう」といったやりとりが交される⁷⁾。明らかに、この酒は気前よくふるまわれているわけではなく、たとえその場で現金の受け渡しがなされないとしても、経済的貸借として当事者たちに記憶されているのである。

また思春期に達しかけているキャンプ P の2人の少年は、それぞれ Camp Kj の母方のおばのもとに寄宿して、そこから小学校に通っている。あるとき酒に酔った Kje:ma (Camp Kj の中心的人物) が、水汲みの往路に立ち寄った少年の母親たちに向かって「子供たちを連れ帰ってくれ、かれらは“粥”(paritsi)をたくさん食べるから」といった趣旨の罵りを浴びせかけるのを目撃した。この母親の一人は Kje:ma の sister-in-law であり、いわゆる冗談関係が許容される間柄である [MARSHALL 1976: 207; 菅原 1986a: 125-127]。それゆえこの罵りを額面通りに受け取るわけにはいかないが、それでもなお、少年の母の困惑した表情は印象深いものであった。おのれが扶養すべき子供が長期間、他のキャンプに依存しているという状態も、両親たちが返済せねばならない負債とみなされていると思われる。

トウモロコシの粉も、定住コミュニティでの生計と密接に結びついた経済的 transaction の対象となっている。遠隔地開発局は約2カ月に1回の割合で各世帯にトウモロコシの粉を配給しているが、前回の配給で十分な量を受け取った世帯は支給の対象とならないことがあるし、輸送上のトラブルから、かなりの数の世帯への配給が大幅に遅延することもありうる。このような場合、サンは、十分な配給を受けた世帯からトウモロコシの粉を借りて、当座をしのぐのである。訪問者と居住者の間でこのような貸与と返却がなされた例が実際に観察された。また、肉の贈与も、トウモロコシ粉の借用に対する見返りとして起こっていると推測しうる場合があった。

(3) 食物をふるまう

居住者から訪問者に食物がふるまわれ、その場で消費されたのは、全事例の40.9%

7) テベ (thebe) はボツワナの通貨の最小単位。100 thebe が 1 pula にあたる。

ーセント (9/22) にすぎない。供与された食物は、少量の肉、粥、*lom/e* (*Cucumis kalahariensis*) の根、メロンの皮といったものにすぎず、大盤振舞というにはほど遠い。つまり Camp P への通常の訪問においては、訪問者は居住者からの豊富な食物の供与をほとんど期待しえないといえる。

なお6例の事例において、訪問者が喉の渇きをうたえて水を所望し、提供された。居住者は、水を要求されると「水はない」あるいは「少ない」と言って渋ってみせるが、拒みきくことはまずない。すなわち定住地においては、汲みに行く労を厭いさえしなければ確実に手に入る水こそは、訪問者をもっとも要求しやすく、またそれがもっともかなえられやすい対象なのである。

(4) 労働の手伝い

皮なめし、農耕に使う犁の製作、‘finger piano’ (*dengu:*) の修理といった作業を訪問者が手伝うことが見られた。青年の訪問者は気軽に手伝いをすることが多い。

(5) 親和的な身体接触行動

女性訪問者と女性居住者の間の虱取り行動は、27.3パーセント(6/22)の事例で観察された。これらの事例はすべて、2人以上の訪問者の女性と2人以上の居住者の女性とを含む場で起こっていた。それゆえ、場に多数の女性が参集することは、長時間続く快楽的な相互行為に彼女らが没頭するための重要な条件だといえよう (SUGAWARA 1984: 19-24)。

虱取りの他に注目すべき身体接触として、*giba-ku* と呼ばれる相互行為のパターンがある。これは“くっつき合ってすわる”というほどの意味である。*giba-ku* の典型的な形態はおたがいにあぐらを組み、一方が他方の腿におのれの腿と膝を載せるというものである。*giba-ku* は同一キャンプの中でも、とくに親しい関係にある同性どうしの間でよくみられるが、訪問者と居住者の間で交される *giba-ku* としてもっとも興味深いのは、義理の異性きょうだい間のそれである。

サンの proxemic 行動のもっとも顕著な特徴は男女の空間的分離である [SUGAWARA 1984: 37-40]。義理の異性きょうだいもその例外ではなく、同一キャンプの居住者の間では、かれらの間での身体接触はめったに起こらない。しかし義理の異性きょうだいが異なるキャンプに住んでいる場合には、訪問に際して両者の親密な身体接触——すなわち *giba-ku*——がしばしば見られる。

事例1 (V1) 9月20日 9:06 a.m.

Chu:≠uma の hut の前に、4人の居住者と4人の訪問者が集まっている。ここへ Kje:ma (Camp Kj) が近づき Chu:≠uma とその妻の g//aekwe (Kje:ma の sister-in-law) の間にどっ

かりと坐りこむ。Kje:ma は g//aekwe の立てた右膝を右拳でかくり叩きながら熱中して話す。10分後には Kje:ma は伸ばした腿の外側部を g//aekwe の左膝に触れさせ、右手で g//aekwe の左腿に触れながら喋りつづける。

約1時間の滞在の後に、Kje:ma と他の2人の男性訪問者（うち1人は Kje:ma の息子で Camp Kj の住人）は、それぞれ干肉を一束ずつかついで帰る。

事例2 (Anecdote) 1月3日 5:30 p.m.

私のテントの前に k!oeg//ae とその息子である青年 Kire:ho がいる。H/ua:ko (Camp J) がやってきて k!oeg//ae のよこにべったり密着して坐り、その腕をひっぱって腕輪を取ろうとしたりする。k!oeg//ae は笑いながらされるままになっている。10数分後、k!oeg//ae の向こう隣りに青年期の女性 //ure: (k!oeg//ae の HBD) が坐ると、H/ua:ko は k!oeg//ae の体ごとに //ure: に触ってからかう。自然に、H/ua:ko と k!oeg//ae の上半身は密着する。

30分の滞在の後に H/ua:ko が帰ったあと、私が k!oeg//ae に「彼はあなたの“愛人”(za:ma) か?」と訊くと、k!oeg//ae はとてもおかしように笑う。Kire:ho が、「彼はおかあさんの‘brother-in-law’ (ui-ma) である。おまえは忘れたのか、H/ua:ko はおかあさんの姉と“愛人関係”(za:kua-ha) にあったじゃないか」と言う。私はこのことをすっかり忘れていた。そこで「彼はあなたの brother-in-law だけどあなたは彼とくっつきあうのか?」と訊くと k!oeg//ae は笑いながら照れくさそうに「brother-in-law だから近くに坐るのよ」と答える。

もうひとつの重要な身体接触行動として //gaikari-ku と呼ばれる相互行為のパターンがある。典型的には //gaikari-ku はキックボクシングのようなスタイルをとる青年男性どうしの play fight であるが、口頭での冗談のやりとりも同じ言葉で呼ばれる。すなわち、//gaikari-ku とは、いわゆる冗談関係という概念にもっともよくあてはまる相互行為のパターンとみなしうる。Visitor sample の中で //gaikari-ku が訪問者と居住者の間で起こったのはわずか5例(22.7パーセント)にしからずがないが、逸話的には、とくに青年男性の訪問に際してしばしば観察された。そのもっとも典型的な事例は次節で Sortie sample の中から抽こう。また私の別稿にもこれと類似の行動の具体例の記載がある[菅原 1984: 122]。この相互行為パターンの個体発生についてはすでに別の所で論じた[菅原 1986b]。

(6) トピックの明瞭な会話

a) 新奇な情報の提示

遠隔の地から帰ってきた人のもたらすその地の状況、他のキャンプで起こった姦通や暴力沙汰に関するゴシップ、街からの物資の到着や政府の役人からの布告等々、訪問者と居住者が会話の中で交換しあう情報は、それこそ枚挙に暇がない。ここでは、訪問者が特殊な情報をもたらした例として、次の2つの事例をあげよう。

事例3 (Anecdote) 9月14日 11:10 a.m.

Kena:masi の hut の前で Piri, Kena:masi, 私の3人がねころんで日本の話などをしている

と、Piri とほぼ同年配の老齢の男性 Kama:gi (Camp N) が finger piano をつまびきながらやってくる。Piri の挨拶に応じて Kama:gi はうかめ顔で挨拶を返す。Piri は今まで私が話していた日本の話を復元して演説する。その合間に Kama:gi と Kena:masi はポツポツと言葉を交す。しかしやがて Kama:gi が「新しい子が生まれる」(*Ikaba-shi aba:ha*) と洩らすと、Piri は突然笑いながら起きあがり、右手の親指を人さし指と中指の間からつき出す卑猥な emblem [EKMAN & FRIESEN 1969] をつくって Kama:gi の顔の前につき出し、何度も「おまえをぶん殴ってやる」(*Kie kwa tsa chu:kaho*) と繰り返す⁸⁾。そのあと2人は対面して横たわり熱中して延々と討論を行うが、その内容は私にはフォローできない。

後に Piri や他のインフォーマントから聞いたところによると、昨晚、Ghanzi の街から帰ってきた Kama:gi の若い妻が妊娠していることがわかったのだという。さらに Kama:gi は Camp S の青年期の女性にも求愛したが、この女性は「老人を怖れて」拒否したのだという。つまり、Piri は老いてなお精力盛んな Kama:gi をからかったわけである。

事例4 (Anecdote) 11月15日 8:45 a.m.

Camp P の青年期の女性 g//ue が、Camp S の青年 Kero:ha と結婚式を挙げ、Kero:ha が Camp P に住み始めた翌々日、私のテントの前で、Piri ほかに3人の男性居住者がたむろしていると、Camp S の既婚女性 kana:ma がやってくる。kana:ma は夫 Hxara: との間に2児をもうけているが、Kero:ha とは愛人関係にあり、いま彼女が背負って歩いている乳児は Kero:ha との間にできた子である。kana:ma はもっぱら Piri を相手におのれの不幸な心境を述べ立てて去る。約45分後、私が Camp Kj を訪れると、ここでも kana:ma は、Kj の2人の女性居住者を相手に不満をおちまけている。kana:ma の主張を要約すると「Kero:ha は私と愛人関係をもち、子供まで産ませておきながら私を捨てた。“他の女と寝た彼を私は怒る” (*Kie kwa ama //au-ma tsá*)」といったところである⁹⁾。

上記の2つの事例が特異なのは、いずれも訪問者がおのれ自身に関する情報を提示していることである。いやむしろ、かれらの訪問は、おのれ自身に関する情報をいくつものキャンプにばらまいて歩くためにのみ行われているようにさえみえる。このように、なんらかの特異な境遇に直面した当事者が、広く人々に自己喧伝を行おうとする意志も、訪問活動への重要な動機づけとなりうるのである。

b) 商取引とコンフリクト

前章で Camp P との間に新しい関係を発展させつつある個体を挙げたが(表5参照)、この中で Camp M の Tse:ko は、Piri, Kire:ho の父子とロバの売買について交渉を行うために頻繁に Camp P を訪れていた。

また Kire:ho と Camp Ts の中年の婦人 //kaopuri とは愛人関係にあるので、//ka-

8) *chu:kaho* を文字通りに訳せば“脱糞させる”という意味になる。この語は、からかい、威嚇、侮辱といった文脈で頻繁に使用される。

9) しかし、結局は、Kero:ha と g//ue の婚姻はわずか1週間で解消され、Kero:ha は Camp S に帰った。その理由として、i) g//ue が Kero:ha の頭のシラクモをいやがった、ii) Camp P の青年 Tabu:ka が g//ue を好いていたので Kero:ha を脅かした、iii) Camp P の少女たちが Kero:ha を侮辱した、といったことをインフォーマントたちは挙げた。

opuri のみならず夫の ≠Ka: もしばしば Camp P を訪れた。≠Ka: の訪問に際しては、彼と Kire:ho との間の対立が露わになることがしばしばあった。

事例5 (Anecdote) 11月17日 6:30 a.m.

Kire:ho と父方の平行いと Tabu:ka とは、≠Ka: に委託されて Camp P において数羽のニワトリを飼っている。2人の青年が所有するイヌがこのニワトリの産んだ卵10個を食ってしまったので、この朝 ≠Ka: は訪問してきて、かれら2人に卵の代金を支払うことを要求した。≠Ka: と居住者の男性4名がいる前で Kire:ho と Tabu:ka は互いに責任をなすりつけあって激論を戦わせた。

結局その日のうちに Tabu:ka は道路工事で得た賃金を両替えに行き、1 pula 分の酒を飲み残り 1 pula をもって Camp Ts に行き ≠Ka: にそれを支払った。≠Ka: は「少ない」と文句を言ったが結局この金を受け取った。

上記の事例は、コンフリクトと呼ぶにはあまりにはほえましいものかもしれない。しかし、ここで確認せねばならないのは、訪問とはポジティブな社会関係の発展だけが促進される機会ではないということである。それはまた、居住者と非居住者の間に潜在するさまざまな対立が露わになる可能性をも含んだ社会的できごとなのである。

2. Camp P からの他キャンプへの訪問の事例 (Sortie sample)

この節では、Camp P の男性居住者（おもに Piri と Chu:≠uma）が他のキャンプを訪問した事例 (Sortie sample) を分析する。19回にわたり、Camp P から出発した男性居住者に同行して、訪問先で起こった社会的できごとを連続的に記載した(表7)。この19回の外出の間に、かれらはのべ24のキャンプに足を踏み入れている。このうち1例は外的な攪乱によって途中で観察を打ち切ったのでデータに含めない。また滞在期間が著しく短い“通過”(n!ae:) の例(10a, 15b, 15c, 19a)も除外する。こうして結局全部で19例を他キャンプへの訪問の事例として扱おうるのである。ただし、この中には、Camp S の居住者 Shie:ho が Camp P を経由して他キャンプを訪問した事例も含まれているので Camp P の‘Visitor sample’ との比較を行う場合には、これも除外する(S3)。

訪問に出かける際に、訪問者たちがその目的をはっきり言明することがしばしばある。もっともよく聞かれる言いまわしは、“誰某(人名)のキャンプを訪ねて肉(トウモロコシ粉、タバコ等々)をねだろう”[X-muka //ae-shiwa gira: na /ka:ji (mai-sha, sjuisa, etc.) tsao] というものである。Sortie sample の半ば以上は、訪問の目的が訪問者自身によってこのように明確に特定されている場合によって占められている。しかも、言明された訪問の目的としては、肉、タバコ、紅茶などのベギングと

表7 Camp P から他キャンプへの男性の訪問を追跡した事例 (Sortie sample)

分類番号	訪問者名	訪問した キャンプ	観察時間 (分)	言明された目的	持参した物品	贈与された物品	食物などの もてなし	タバコ のみ	水の 所望	註記
S1	Chu: ≠uma 他3名	Kj	10				粥			!Koi!kom 中心部へ行く途中
S2	Piri, Kire:ho	Hb	120+	労働	スティーンボックの皮	タバコ			+	ホストは不在
(S3)	Shie:ho	Kj	60+	タバコを乞う					+	
S4	Piri, Kire:ho	Ts	185-			タバコのヤニ		2		
S5	Chu: ≠uma	Kj	a) 23 b) 46				粥			井戸への行き帰りに寄る
S6	Chu: ≠uma, N//osju: 他1名	M	150	肉を乞う		ゲムスボックの肉	肉, 粥	1	+	N//osju: だけ先に帰る
(S7)	Chu: ≠uma, Kena: masi	Ts	—					1		途中で観察中止
S8	Piri	Ts	105				粥	1		ホストは不在
S9	Piri	a) Gy b) Ts	45 145				干し肉	1		
S10	Chu: ≠uma, Shie:ho	a) J b) Hb	(5) 65+	労働			酒			n!ae: 畑を囲う柵を作る手伝い
S11	Piri	S	205+	肉を乞う			粥, 肉	1	+	
S12	Piri, N≠uekukjue	S	230	肉を乞う	ヤギの皮		血のスープ	1	+	皮なめしの作業をする
S13	Piri, Chu: ≠uma 他2名	S	255	肉を乞う		タバコ	肉, 酒	2		Piri と他の訪問者は別々に行く
S14	Piri, Kire:ho	Ts	175	ヤギを見る				1		ヤギをロバと交換する交渉
S15	Piri	a) O b) Km c) Kg	80 (5) (5)	紅茶を乞う トウモロコシ粉を乞う トウモロコシ粉を乞う			キャンディ	2		食料配給所からの帰途 n!ae: n!ae: (ホスト不在)
S16	Chu: ≠uma	Kj	187				肉, 酒	1		10数人集まる酒宴
S17	Chu: ≠uma	Ts	195	労働			粥			獲物の肉をリボン状に切る作業
S18	Chu: ≠uma	Ts	170	労働	ゲムスボックの腱		干し肉	2		皮紐を作る作業
S19	Chu: ≠uma, Kena: masi	a) J b) Hp	(5) 173+	労働			紅茶, 酒			n!ae: 皮なめしの作業に約10人が集まる
合計	—	24	2624	[14]	[3]	[4]	[14]	17 [13]	[5]	—

観察時間に付した+記号は、観察終了後も訪問者は当該キャンプにとどまっていたことを示す。観察時間に()を付した事例は滞在時間のごく短い「通過」(n!ae:)をさす。合計欄の[]内は各項目が少くとも1度みられた事例数を示す。「粥」とは、トウモロコシ粉を煮たもの(paritsi)のことである。

背景 セントラル・カラハリ・ナンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面相互行為

並んで“労働”(tʂe:)が高い頻度を占めているのは興味深い。

労働の内容としてもっとも典型的なのは、狩猟の後始末といった協同で行うべき作業である。たとえば S16, S17 においては, Chu:≠uma は2日間連続して, 午前中を Camp Ts で過ごし, Kxaochwe への遠征猟のパートナーであった Gyube と協力して, 獲物の肉を細いリボン状に切ったり, 皮紐を作ったりした。

しかし, このように双方が共通の目的と対等の権利=義務をもってあたる協同作業のほかに, なんらかの報酬を期待して行われる純然たる労働奉仕がある。このような奉仕を依頼するのはカラハリ族のキャンプである。たとえば, 畑を囲う垣根を作ったり (S10b), 大量に手に入った獲物の毛皮をなめしたり (S19) といった, 人手と労力を要する仕事にいわば臨時に雇われるのである。奉仕の見返りとして訪問者が得る主な代償は酒である。一杯の酒のもたらす酔いを得るためならば, 訪問者は数時間にわたる労働も厭わないのである。このような transaction の形態は, 定住地における文化変容の一側面を如実に示している。

これに対して, ベギングするために他キャンプを訪問するというのは, サンの伝統的な訪問活動のありかたをよく表わしているようにみえる。しかし, 訪問者は必ずしも, 言明された目標を達成するために努力を傾注するわけではない。かれらの訪問に同行してもっとも印象的なのは, 「tsaoo しに行こう」と言って出かけた訪問者が, いざ目的のキャンプに着くとはっきりした要求は何もせず, しかも決して居心地よさそうにでもなく, 溜息をつきながら延々と坐っている, そのいかにも無器用な様である。そのくせかれらは, 帰途につくと, きまって「連中は肉(粥等々)を“分けない”(hxæ:)」と不平を洩らすのである。

事例6 (S6) 10月20日 8:40 a.m.~11:20 a.m.

Chu:≠uma, Kena:masi, N//ósju: の3人は連れ立って Camp M を訪問し, まず Horarigjo の hut の前に50分間滞在する。ここでかれらは Horarigjo (老齢の男性) を含む計5人の男性および4人の女性と出会い挨拶を交す。N//ósju: と Kena:masi は垣根の内側にはいり, N//ósju: だけ到着から20分後に肉を供されて食う。Chu:≠uma は垣根の外に坐りつづけ, 足の指をいじったり, スポンの裾をはいたりしながら垣根の柵に顔を押しつけて中を覗きこんでいるが, 到着から45分後に女の1人(1982年の Camp V の住人) がタバコを取り出してパイプに詰め始めると, さっと立ちあがって中にはいる。N//ósju: はその直後に粥を供されて食べる。そのあとタバコのまわしのみが始まり3人の訪問者全員がこれに参加する。まわしのみが終わると2分後に3人は連れ立って垣根を出る。かれらは老齢の !Oa≠na の hut 前に坐り, !Oa≠na, その妻, かれらの中年の娘などと会話する。ここで Chu:≠uma は水を飲ましてもらう。ついで /Owang//oi の hut と Tseu/ori の hut を訪れる(事例7参照)。Tseu/ori の hut を出ると N//ósju: は再び /Owang//oi の hut に行き, 中にはいる。Chu:≠uma と Kena:masi は10m ほど離れた N!u:ba の hut にはいる。N//ósju: はすぐに出て来て再び Tseu/ori の

hutに戻り、中にいる Tseu/ori に二言、三言声をかけてから、屋根にかけてある“ゲムスボック”(h/o:)の“あばら肉”(za:he)を取り、私と2人だけで帰途につく。途中で「この肉は腐っている」と不平を洩らす。確かにいやな匂いがする。

この事例は次の3点で重要である。第一に注目すべきなのは、40分以上にもわたって垣根の外側に遠慮深げに坐っていた Chu:≠uma が、タバコの用意が始められた途端、決然として中にはいり、まわしのみに参加したということである。前節で論じたように、タバコのまわしのみは、食物の授受とは異なって、その場に居合わせるすべての人々が参与する権利を主張しうる特異な transaction であると考えられる。

第二に、N//ôsju: の行動からは、明らかに他の2人の連れを「まこう」とする戦略が見てとれる。彼は、自分が1人だけになるやいなや、すかさず肉の塊りを獲得して、即座に帰途についたのである。

第三に、誰が贈与にあずかるべきであるかは、居住者、訪問者の双方にとって自明であるかのように物事は進行する。ここで N//ôsju: だけが肉と粥の供給を受け、また za:he を持ち帰ることができた理由を知ろうとすれば、彼と Horarigjo,あるいは Tseu/ori との間に成立している長期的な社会関係のコンテクストすべてを理解せねばなるまい。これは、直接観察に固執する、現在の私の方法論を超えた課題である。だが、なおかつ、この事例の告げる意味は重大である。つまり居住者は連れ立ってやってくる訪問者のすべてを公平に処遇する必要はないのである。たとえ訪問者たちの側がチームをなして行動するとしても、居住者の訪問者たちへの処遇は、あくまでも個々の訪問者との dyadic な関係に基づいて組み立てられるのである。

さて、訪問者はふつう声高に物品を要求するわけではないし、その当然の帰結として、物品が贈与されそれを訪問者が持ち帰るということもめったにない(4/18=22.2%)。しかし、少量の食物がふるまわれ、その場で消費されることは非常にしばしば見られた(14/18=77.8%)。観察単位時間あたりの頻度は0.47回/時であり、Visitor sample の頻度0.42回/時に比べて決して多くはない。しかし Visitor sample では計14回の食物のふるまいは異なる11人の訪問者に対してなされていたのに対して、Sortie sample では22回にのぼるふるまいのうち20回までは、私が追跡対象としていた特定の2人の男性(Piri と Chu:≠uma)に対してなされたのであった。

Visitor sample と Sortie sample は観察方法が異なっているので、両者の定量的な比較だけから、Camp P の男性たちが、自ら他のキャンプに与えるよりもずっと多くを他のキャンプから得ていると結論することはできないであろう。もしある程度長い期間をとってみれば、個々のキャンプは訪問者に対してほぼ同程度にしか与えて

いないのかもしれない。だが訪問者は複数のキャンプの中からその都度もっとも供与を期待しうるキャンプを選ぶことができるので、ある1人の訪問者の視点からみれば、訪問中に何らかの物質的報酬を得る可能性はかなり高いと考えられる。すなわち何かを“ねだる”(tsaoo)という、しばしば言明される目標は、それなりに達成されているのである。

以上の分析で、私は訪問のもたらす物質的報酬をあまりに強調しすぎたかもしれない。Visitor sample の分析でも指摘したことであるが、ほとんどの場合、訪問者が受け取る物品は、量的には微々たるものであり、なんら生計に影響を及ぼすものではない。それゆえ、ベギングという目的が、訪問者の足を他のキャンプへ向かわせるもっとも大きな理由だと結論することは、訪問活動の中で起こっている様々な社会的 transaction の意義を過小評価することになる。たとえば次のように心楽しい時間は、訪問それ自体に内在する喜びをよく示している。

事例7 (S6) 10月20日 10:28~10:50

Camp M の Tseu/ori の hut 内に Tseu/ori, Hxara:, Tsebe:ka, Piri が集まっている。N//ósju:, Chu:≠uma, Kena:masi, ≠Ta:, そして私もこの hut にはいり、ぎゅうぎゅう詰めで坐る。私たちがはいって間もなく、Piri が私に「もう“われわれ2人”(itsibi; 両数1人称代名詞)は帰らないか」と言うが、N//ósju: が「いや“われわれ”(ik//ae; 1人称複数代名詞)で帰るんだ」と言い直し、Chu:≠uma も「すぐ引き返すさ」と言う。Piri は、1人でコップに入れた挽き肉と、肉の塊りとをもって出て行ってしまふ。その数分後 //Kawashieho (Camp P の青年) が“マリファナ”(kana:) を吸っているんだろう、“分けない”(hxae:) つもりだな」と怒鳴りながらずかずかとはいりこんで来て、Hxara: と Tseu/ori の間にべったりと坐る。Tseu/ori の夫人が「缶をちょうだい」と言いながら戸口から覗きこむ。//Kawashieho は Hxara: の肩に手をかけて、彼を押し潰しながら立ち上がり缶を取って夫人に渡し、坐ると Hxara: と“殴り合いのまね”(g//aikari-ku) をする。Tseu/ori が //Kawashieho の尻をつつき、//Kawashieho は「エーッ、クソが出ちゃうじゃないか」と叫び3人もゲラゲラ笑う。他の男たちもこのやりとりをおもしろそうに微笑して見ている。やがて、Tseu/ori が喋り出すと //Kawashieho は Tseu/ori の首の後を手で掴んでこずく。Tseu/ori が笑いながら首をすくめて喋っていると、大きな尻の音がする。どうも Tseu/ori がしたようだ。//Kawashieho は Tseu/ori の肩や首すじを掴み、唇を震わせて「ブブルル」と尻の音をまねてからかう。この2分後、Kero:ha (Camp S の青年) が、//Kawashieho に「水を汲みに行こうよ」と呼びかけながら小屋の中にはいって来て Chu:≠uma のあぐらの上に坐ろうとする。Chu:≠uma は“だめ”(é-e) と言いながら、Kero:ha の尻をつつく。このあと Chu:≠uma と Kero:ha の間で和やかな会話がやりとりされる。Chu:≠uma は優しく微笑している。

また、このように大勢の人々が寄り集まって交される賑やかな会話とは対照的に、2, 3人だけが他の人々から離れて内密で穏かな時間を過ごすことが、時おり見られる。

事例8 (S16) 12月21日 8:41 a.m.~10:30 a.m.

Chu:≠uma は Camp K_Jを訪れ, Kje:ma, Daon//ú (Kje:ma の義理の息子), Sho:ho:to (Kje:ma の血縁親族), および2人の青年のいる集まりで45分間を過ごし肉をふるまわれる。Sho:ho:to が「水を飲もう」と呟いて自分の hut の方へ去ると, Chu:≠uma も「Sho:ho:to の所で水を飲む」と言っついてゆく。Sho:ho:to の hut の前で水を飲んでから2人は横たわり, 低い声でポソポソと愚知や噂話を40分間ほど断続的に続ける。そのうち Chu:≠uma は眠ってしまう。ここへ Daon//ú が finger piano をつまびきながらやってきて, Sho:ho:to と Chu:≠uma の間の狭い空間に坐りこみ, 「イヌのクソが来るぞ」と言う。フンコロガシが, Sho:ho:to の方へ糞の玉を押しつけている。Sho:ho:to は起きあがってしゃがみこみ, 砂に溝を掘って, フンコロガシを別の方へ行かせようとする。しばらくそんなことをして遊んでいるが, またうつおせになり Daon//ú とポツリポツリと話し始める。Daon//ú は Chu:≠uma を見おろし, 「ここで眠ってら」と呟く。Chu:≠uma の眠っている傍らで Daon//ú と Sho:ho:to はおよそ30分間, 噂話を続ける。その後, Sho:ho:to は息子のもってきた粥を息子と2人で食べてから¹⁰⁾, 目を醒ました Chu:≠uma, Daon//ú と共に, Kje:ma の小屋へ行き酒宴に参加した。

しかし, Sortie sample を通覧すると, 訪問者と居住者の間に, 上記のような安らかな時が共有されることはけっして多くはない。とくに, 労働に対する何らかの報酬を期待してカラハリ族のキャンプを訪れるとき, 訪問者は不愛想な居住者の前に坐りこんで, 激しい日射しに灼かれながら長い時間を耐える。だが, おそらくこのように描写するとき, 私は ethnocentrism に陥っているのであろう。

事例9 (S2) 10月12日 7:55 a.m.~9:57 a.m.

Piri は Habubane に委託されてなめた “スティーンボック” (*g/laen*) の皮6枚をもって, 息子の Kire:ho と共に Camp Hb (カラハリ族のキャンプ)を訪れるが, Habubane は不在である。Piri は hut の前で椅子に坐っている Gabapu:ri に挨拶し, その1m 前に腰をおろす。Gabapu:ri は落馬して肘を骨折したので腕を吊っている。Piri は, Gabapu:ri に愛想よく, 骨折のこと, スティーンボック猟のこと, 私がサンの言葉は喋れるが Setswana は喋れないことなどについて話しかけるが, Gabapu:ri は「エー, エー」と時たま相槌を打つだけである。Piri はこの場をいったん離れて他の hut を訪れ, 水を飲ませてもらったり, タバコをもらったりするが, 40分後に再び Gabapu:ri の前に戻り坐る。10分間近く沈黙が続いてから Piri は, Gabapu:ri に話しかける。「骨折」のトピックを発展させて, ウマを鞭打ったら蹴とばされた男の話, 田中二郎が ≠Kade にいたときに, 怪我をした男を診察し骨折はしていないと判断したという話などをするが, Gabapu:ri は口をへの字に結んで「ソーソー」と唸り声を上げるだけである。ここへ /Owang//oi (Camp M) が訪問してきて Piri のよこ0.3m に坐り挨拶する。Piri は /Owang//oi に「おまえさんはここへまっすぐ来たのか」と尋ね, /Owang//oi は小さな声で答える。Piri は自分の肘をさわりながら, Gabapu:ri が骨折した経緯を説明している。

10) ただしこの子供は Sho:ho:to の実の息子ではなく, 彼の妻がかつて H/ua:ko と愛人関係にあったときその間にもうけた子である。そうと知らなければ実の親子と信じかねないほど, この「父」と「息子」の関係は睦まじいものである。事例2で言及した愛人関係とはこれを指している。

さらに話は、罨獵の際に腕を怪我する危険があることへと発展し、Piri は杖を振り上げて illustrate しながら、「動物を棒でぶつたら肘を痛めるぞ、槍そのもので刺さねばならん」と力説する。Gabapu:ri はつまらなそうにそっぽを向いている。このあと Piri, /Owang//oi, Kire:ho の間で、「ヤギとロバ」、「田中二郎」、「日本はいかに遠いか」といったトピックをめぐって会話が進行するが、もう1度骨折の話がむし返される。さらに、Kire:ho がイヌに咬まれた話へと移行する。Gabapu:ri は椅子をもってこの場を離れ、10数メートル離れた木蔭へ移動してしまう。/Owang//oi は立ち去るが、Piri は「おれはここで Habubane の帰りを待っているからおまえたちだけ帰れ」と言うので、私は Kire:ho と共に引き上げる。

カラハリ族が椅子に坐り、サンが地面に坐っているという空間配置そのものの中に、両者の優劣関係が象徴的に表わされている。だが、私にとっては苦痛であったこの2時間が、Piri にとっても苦痛な時間であったとはかぎらない。もちろん、腕の骨折というトピックをこれほど執拗に追求する Piri の会話行動を、カラハリ族との友好的な関係を打ち立ててゆこうとする彼の精一杯の努力の現われとみなすことは可能だ。居住者の反応の鈍さから判断して、Piri のこの企ては挫折したともいえよう。だが、もっと重要なのは、居住者からの冷淡な処遇にもかかわらず、Piri は、用事のある当の本人が帰ってくるまで待ち続けるという選択を確固としてとりつづけたことである。おのれに何らかの正当な要求の権利があると訪問者が確信しているとき、彼がそこにいつづけることも正当化され、何ら疑念の差し挟まれる余地はないのである。

V. 対面相互行為

前章で分析した経済的・社会的 transaction は居住者と訪問者の対面相互行為の全体系の中に埋めこまれている。対面相互行為の全体系とは、言語、パラ言語、身体行動といった多彩なコミュニケーション・チャンネルが相互依存して組み立てられている。その全領域を本論文で分析することはもちろん不可能である。本章では、居住者と訪問者の対面相互行為の中からいくつかの基本的な行動様式を取り上げ、それらの背後に潜む ground rule を抽出することを試みたい。

1. 訪問者の proxemic 行動の特徴

まず、私に強い印象を与えたひとつの事例を記述しよう。

事例10 9月7日 10:02 a.m.~10:38 a.m.

Camp P から2人の既婚女性 (k!aoba, kxom) と3人の青年期ないし思春期の少女とが Camp S に向かって出発する。この前日、Camp S の Shie:ho と Camp Ts の Gyube とが ≠Kade pan で“エランド”(gyu) を仕留め、その解体と運搬は Camp P の男性たちが行った。

Camp S に運びこまれたその肉をこれからベギングに行こうと女たちは言う。28分でSに着く。キャンプの奥の日蔭に、老齡の婦人 g/oyashi とその末娘 k//xama: を含む住人4人が坐っているのが見える。私がそちらへまっすぐに進もうとすると、kxom が「こっちへ行こう、スガワラ」とたしなめる。訪問者たちは左手に逸れ、居住者たちのいる日蔭から15メートルほど離れた大きな木蔭に坐る。6分後、g/oyashi (kxom の祖母) が、訪問者たちのいる日蔭にやってきて、思春期の少女に対面して近接して坐り、自分の方から喋り出す。その2分後、k//xama: (kxom より年若い未婚のオバ) がやってきて、思春期直前の少女の真後に近接して坐る。

この訪問者たちは、居住者たちの中に訪問者にとってごく近い血縁親族がいるのにもかかわらず、居住者たちのいる場にまっすぐ近づくことを回避している。つまり、この事例は、「居住者たちの集まりの内部へ一挙に侵入すべきではない」という暗黙のルールが訪問者たちの proxemic 行動を強く規制していることを暗示している。ここで、かくも鮮明に訪問者たちの「遠慮」が現われているのは、おそらく、かれらの訪問の目的が、あからさまに大量の肉を乞うことにあったという点に起因しているであろう。

もうひとつ興味深いのは、離れた所に坐ることによって、訪問者は、自らが居住者に対する相互行為を始めるのではなく、居住者の側が接近の口火を切ってくれるまで待つという姿勢を打ち出していることである。

この事例ほど極端にはないが、訪問者が居住者の集まりからやや離れた位置、あるいは集まりの最外縁の位置を占めるという傾向は、多くの訪問の事例で認められた(写真1)。訪問者のこのような proxemic 行動の特徴を理解するためには、キャンプという空間を居住者たちの占有する“micro-territory”として捉え、その構造を定式化することが有効であろう。

ここで“territory”という用語は、もっとも広義の意味で用いられている。普通、territory を定義する際にもっとも有力な基準とされる占有者による「防衛」ないしは「攻撃」といった行動 [MALMBERG 1980: 7-10] は、ここにはもちろん欠落している。さらに、キャンプという空間の境界を標しづける明確な目印や防壁があるわけでもない。しかし、キャンプは明らかに、居住者によって1日の大半の時間、ほぼ独占的に使用される空間なのである。もちろん訪問者は頻々とこの空間内に侵入する。だが、この空間の「核」に接近することに対する躊躇が訪問者の側に一貫して見出されるという事実は、ある種の心理的ないしは慣習的バリアが存在していることを示唆するものである。

キャンプという micro-territory は均一な空間ではなく、その中に数層にわたる分節構造を内包している。まず、はっきりと標しづけられているわけではないが、キャ

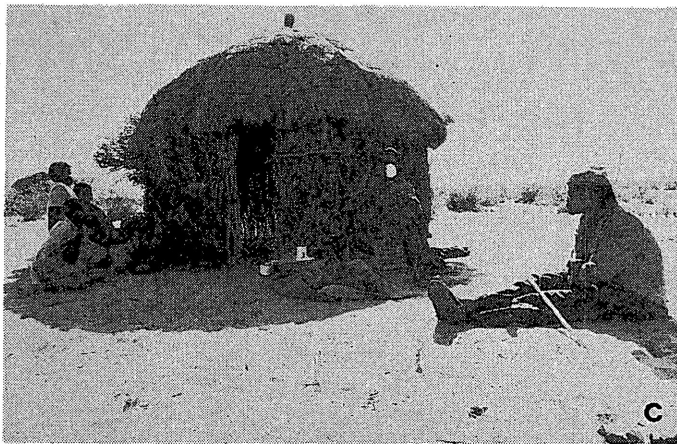
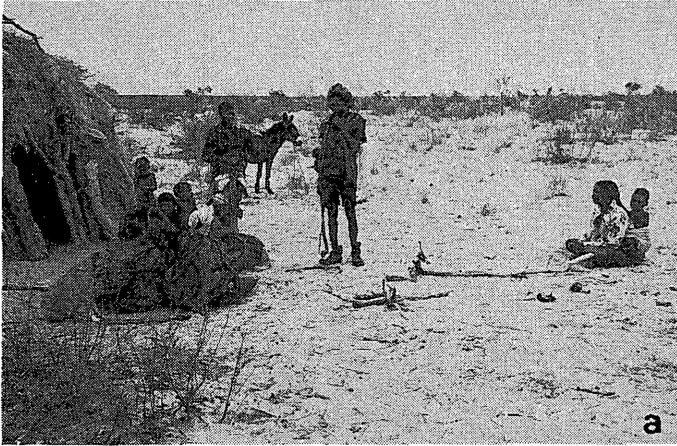


写真1 訪問者の位置どりの諸例。aとcは右端、bは左端が訪問者である。

ンプ全体を囲む最外縁の境界線を想定することができる。ふつうキャンプの全域はヘビが隠れひそむことを防ぐために下生えをほとんど取り払われてあるが、最外縁とはこのような物理的 clearance の範囲よりもさらに外側にある。この最外縁が顕在化するの文字通りの“通過” (*nlae:*) が起こるときである。すなわち、そのキャンプにまったく立ち入る意志のない者は、キャンプからかなり離れたブッシュの中を足早に通り返り過ぎてゆくのである。

つぎに、事例10でも述べたように、居住者たちの多くがしばしば参集する、大きな木の下の日蔭がキャンプ内の core area を形づくっている。ここは、いわば、そのキャンプ内でもっとも“public”な場所であり、居住者のすべてが同等の権利を主張しうる micro-territory である。

さらに、個々の hut の周囲の空間、とくに戸口の前方 5-6 m はその hut に寝起きする家族が占有する micro-territory である。訪問者のみならず、hut の所有者以外の居住者たちもまた、hut の戸口に対して外側の位置を占める傾向がある (写真2)。この点と関連して興味深いのは、hut の所有者自身も、戸口の側の空間に固執する傾向があり、たとえ hut の裏側に大きな日蔭ができていても、そちらの側はあまり使用されないということである。もちろん所有者以外の者が、他人の hut の背後に坐りこむなどということはめったにみられないのである¹¹⁾。

最後に、hut の内部はもっとも厳格な micro-territory を構成する。hut 内の空間

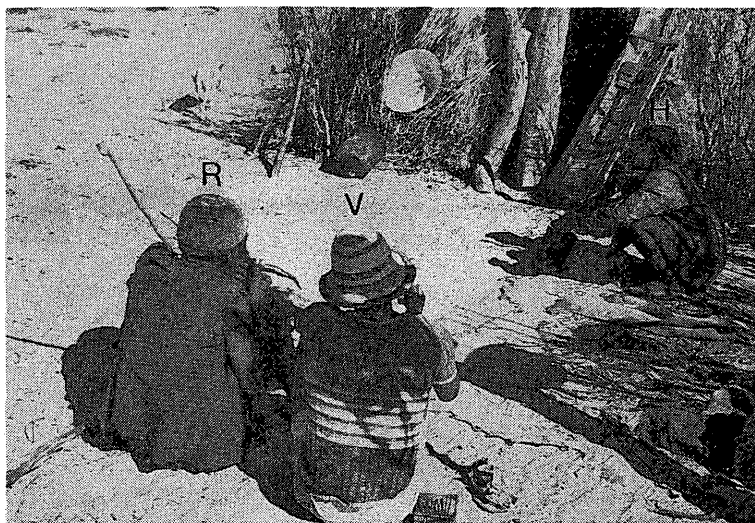


写真2 hut の戸口前の外縁に坐る居住者と訪問者。H は背後の hut の所有者の男性、R はこのキャンプの居住者、V は訪問者の青年である。

は、夜、夫婦の性生活が営まれる場所なので、その夫婦の子供といえども、思春期に達してからのちは、就眠時にはこの空間から排除される。思春期や青年期の男女は、それぞれ自分たち専用の hut を建てたり、簡素な“柵”(≠*hai*)の蔭で寝起きしたりする。

訪問者あるいは hut の所有者以外の居住者は、この hut の内部の空間を大変尊重しているように見える。かれらは、そう気安く他人の hut 内に立ち入ろうとはしない。hut の所有者以外の方が、戸口に体をくっつけて坐りこみ、時には伸ばした足の先を戸口の中に差し入れたりしながらも、中に入ろうとはせず、hut の中で何か作業をしている所有者と話をしているのをしばしば見かける。「家の柱の間から覗く」(*nglu:m tsxone gyom ka mo:*)という言い回しがあることからわかるように、プライベートな空間の外部に位置する人間が、小屋あるいはその周囲を囲う垣根の隙間から中を覗きながら坐りつづけていることもある(事例6の *Chu:≠uma* の行動を参照のこと)。

しかし、サンがつねに他人の hut にはいることをためらうと言えば誇張になろう。ときには、ごく速やかにズカズカと内部にはいりこむこともあるからである。このような速やかな侵入を可能にしている社会的コンテキストの広がりや厳密に確定することは困難であるが、たとえば前節の事例7で見たように、hut 内にいる居住者と冗談関係にある者は容易に内部に侵入しうるであろう。また、訪問者が明確な用事をもっている場合にも侵入の権利が与えられるように見える。

hut 内の空間がもっとも厳密な *micro-territory* として機能するという潜在可能性とちょうど表裏一体の関係にあるのは、なるべくその *territory* にひきこもらないようにするという、所有者自身の努力である。日中、サンたちは努めて戸外にしようとしているように見える。定住地では大きな木が次々と切り倒されてゆくために、どのキャンプでも快適な木蔭は少ない。日が高くなると hut の周囲の日蔭は小さくなり、中にいたほうがずっと涼しいのは確かなのだが、男たちは hut の前に坐りこんで忍耐強く作業を続ける。気分がすぐれず水汲みに行くのを休んだ女も、hut の中から毛布をひっぱり出してきて外で眠りにつくのである。

サンの社会生活が著しく共同的であり、プライバシーは最小限に抑えられているということはつとに指摘されてきた [DRAPER 1976: 201-202]。重要なことは、か

11) 近年、富裕な *G//anakwe* やカラハリ族の中には、hut の周囲を立派な垣根で囲う人々が少なからずいる。垣根はなによりも、ヤギやイヌが hut を荒らすのを防ぐうえで有益であるが、同時にそれは hut の周囲の空間を *private* なものとして遮蔽するという重大な機能を担っている。すなわち *proxemics* の領域においても、サンの文化変容は急速に進んでいるのである。

これらのキャンプの物理的配置がプライバシーを守りにくくしているというよりはむしろ、少なくとも日中はサン自身が進んで外部の人々におのれの姿を晒そうとしていることなのである。おのれの姿を他から隔てる hut という micro-territory の効力をあえて不鮮明にしようとするこの努力は、物品や食物を“隠匿する” (*ng'la'o*) ことを忌み嫌う平等主義社会の価値観と密接に結びついていると思われる。

サン自身は、私がここで定式化しようと努めてきた micro-territory に対する所有の意識をどのように表明するのであろう。私に対するかれらの処遇にそのひとつの例をみることができる。私が hut の前にいすわっているときに、その hut の主が外出しようとするのがしばしばある。そのようなとき hut の主は、きまって、「わたしはこれから出かけるからあんたは誰某（別の住人の名前）の所に行ってそこで休んでいなさい」と勧めてくれるのである。これは一見したところ、私を“心細く” (*laogna*) させないように配慮する hospitality の表われのように聞こえるが、じつはそこにはおのれの hut とその周囲の空間に対するあるじ自身の所有権がひそかに表明されているのである。言いかえれば、本来彼（女）に属する micro-territory に彼（女）が不在であるとき、すなわち彼（女）がそれに対して統制力を揮いえないときに他者がそこにいつづけることは、望ましくない侵犯とみなされているのである。

これとまったくパラレルな所有権の表明が、キャンプ全体に対してなされたこともある。ある朝私は Camp S を訪問したが、しばらくすると S の居住者全員が採集や水汲みに出かけることになってしまった。S のある男性居住者が、うろうろしている私に言った、「誰もいないキャンプに1人で残っていると、“悪魔” (*G||ama*) があんたを見つけるよ」。私は Camp S をあとにするしかなかったのである。

2. 挨拶行動

前節で論じたように、キャンプが重層的な micro-territory として機能しているのであるならば、そこに侵入する者は何らかの方法によっておのれの滞在を居住者に承認してもらう必要がある。挨拶行動こそは、このような承認が得られるもっとも代表的な相互行為のパターンであると考えられる。

サンの挨拶が、基本的には、micro-territory への侵入と滞在という問題と結びついており、しかも「居住者」対「訪問者」の出会いの儀式であるという直観は、ごく表層的な観察から得ることができる。なぜなら挨拶が同一キャンプの居住者間で起こることはほとんどなく、またほとんどの場合、それは訪問者が居住者たちのいる場に登場するという事態に結びついて起こっているからである。以上の言明に矛盾する例

外的な事例については、後に詳しく検討することにした。

以下では、分析の準拠枠を、誰かが、1人以上の人が占めている場に登場するというできごとと置こう。その場にすでにいる人を<既存者>、新たに登場する人を<登場者>と呼ぼう。このようなできごとを<出会い>と定義する。

(1) 挨拶の基本的パターン

表8に、サンの挨拶の基本的パターンをまとめた。挨拶の中心をなすのは、≠kai-kaho と呼ばれる一対一の言語的なやりとりである。≠kai とは、もともと「目を醒ます」という意味の自動詞であるので、それに使役の接尾辞 -kaho が連結した ≠kai-kaho は、相手の「目を醒ませせる」という原義をもつ。しかし、ふつう ≠kaikaho とは、相手に“≠Kai?”(「目を醒ましているか」すなわち「元気か」と問いかける行動をさすので、われわれの社会で普通に行われている「どうだい?」(How are you) という問いかけによって始まる口頭の挨拶とほぼ対応すると考えてよからう。

一対一の挨拶がやりとりされる時、ふつうは相互的な視線の触れ合いと微笑とが両方の参与者に起こる [EIBLE-EIBESFELDT 1972: 299-302]。しかしまったくシリアスな顔のまま素気なく事務的に挨拶が済まされることもあるし、甚しい場合には、

表8 セントラル・カラハリ・サンの挨拶の基本的パターン

Stage I: 開始の挨拶	
(G/wi 語)	(大意)
!dom	受け入れてくれ
kjua: n	休んでいますか
kxoi /a	//
g//a:*	//
moro, mera, dumer**	こんにちわ
Stage II: 一対一の挨拶	
(G/wi 語)	(大意)
A: ≠Kai?	元気ですか
B: ≠Kai (kwa)	元気ですよ
Tsam ≠kaya: ha?	あなたは元気ですか
A: ≠Kai	元気です
Stage III: 公式的挨拶	
P	Q
近況を報告する	エー、エー、と相槌を打つ
エー、エー、と相槌を打つ	近況を報告する
[いずれも哀れっぽい調子で]	

* Nharon の言語からの借用。

** Tswana の言語 (Setswana) からの借用。

A, B および P, Q は2人の参与者を示す。

横に坐った相手を見向きもしないまま ≠*kaikaho* を行うことさえある。

≠*kaikaho* のきわだった特徴は、厳密に一对一でやりとりされねばならないということである。それゆえ、場に複数の既存者がいる場合には、登場者は原則的には、かれらのすべてに順次 ≠*kaikaho* をしなければならない。これに対して、登場者が接近しながら、場全体に向けて呼びかけることがしばしばある。この呼びかけを「開始の挨拶」と名づけておこう。開始の挨拶には G/wi 語、G//ana 語の他に、Nharon や Tswana の言語から借用された単語もよく用いられる。

さらに一对一の挨拶が終了したあとに、お互いが衰えれば調子で、順次、近況報告を行うことがある。このような近況報告の交換を「公式的挨拶」と名づけよう。公式的挨拶は、かつて !Koi!kom に定住する以前に、サンが原野の中で著しく分散した生活を送っていたときには、遠く離れたキャンプ間の訪問に際して、必ず見られたものだという [田中 私信]。しかし、現在では、この型式の挨拶が行われることはまれであり、挨拶の起こった「出会い」の 5.2パーセント (8/154) でしか記録されなかった。公式的挨拶は、高齢者の間で交される傾向が強い¹²⁾。

つぎに、別れの挨拶について簡単に触れておこう。典型的には、場から立ち去ろうとする訪問者は「〔御機嫌〕よく残りなさい” (*Kxaen se !kau*)” と言いき、それに対して居住者たちは「〔御機嫌〕よく行きなさい” (*Kxaen se !kon*)” と応じる。しかし、実際には、このような型式化されたやりとりが交されることはあまり多くはない。立ち去ろうとする人々が“私は引き返す” (*Kie kere:she*)、”私は帰る” (*Kie //aeku*)、あるいは「誰某の所を訪問する」などと言いながら立ちあがり、居住者たちは“ああ” (*ehe:*) と言って送るという場合のほうがむしろ一般的である。また訪問者が何ひとつ言わずに去ってゆくこともけっして少なくない。

以下の分析では、「出会い」に伴った挨拶のみを取り上げ、別れの挨拶は考察の対象としない。「出会い」の挨拶は表 8 で示した 3 段階の stage を順次踏んで進行するものであるが、stage I と III とはしばしば省略されるので、主に stage II で起こる一对一の挨拶を分析する。しかし、開始の挨拶を登場者が投げかけた後に、一对一の挨拶がまったく起こらなかったこともまれにみられた。後述する挨拶の継起的分析には、このような不完全な事例も含めた。

12) 公式的挨拶の中で交される近況報告の一例は以下のようなものである。P は訪問者、K は居住者であり、いずれも初老の男性である。この事例は Camp S で採取した。

P: けさ Hlonasi (Camp S に居住する青年の名) が、わたしのキャンプを通りかかったので、彼と一緒に来たんだ。昨晩は、Tsomako のキャンプから *gemsbock dance* (*h/o:*) の歌声がよく聞こえた。わたしのキャンプはあそこから遠くないので、眠れなかった、云々。

K: このキャンプの人々もみんなそのダンスに行つて、まだ帰ってきてない。おとついはこの男たちはワイルドビースト (*t/e:*) を探しに行つて見つけたよ、云々。

(2) 性・年齢・訪問頻度との関わり

挨拶の頻度には、性と年齢層に従った大きな偏りがある。まず Camp P に訪問者が接近することが実際に観察された事例を検討すると、青年訪問者の登場に際して挨拶が起こったことは皆無である。さらに、登場した成人男性の訪問者ののべ人数のうち52.3パーセント (68/130) は挨拶に関与しているが、成人女性の訪問者で挨拶に関与したのは10.5パーセント (8/76) にすぎない (表9)。それゆえ、挨拶が主に起こるのは、成人男性訪問者の接近に際してであることがわかる (図6, 図7も参照のこと)。

性一年齢層に従った偏りをより明確にするために、Camp P で観察された事例に限定せずに、!Koi!kom 定住地で私が記録した挨拶の全事例を分析しよう。一対一の挨拶に関与したのべ dyad 数の大部分 (83.3パーセント) は、成人男性どうしの組み合わせであり、成人女性どうしの間で挨拶が起こった例は5パーセント以下にしかすぎないのである (表10)。以上のことから、サンの挨拶行動とは、“成熟した男性” (*kxʔao d//o:ko*) によって、ほとんど独占的に遂行される相互行為であることがわかる。

だが、成人男性の訪問者がキャンプ内の集まりに接近したとき、必ず挨拶が起こるとはかぎらない。まず第一に、既存者たちの構成が、挨拶が起こるかどうかに影響を与えている。Camp P に成人男性訪問者が登場したとき、その場にいた青年期以上の既存者の人数と性別を、挨拶の起こった出会いと、起こらなかった出会いとの間で比較してみよう (図8)¹³⁾。

既存者の人数には、2種の出会いの間で有意な差はない。しかし、挨拶の起こった出会いでは、既存者の集まりは、男性だけを含むものが非常に高い割合 (65.5パーセント) を占めており、逆に女性だけを含むものはほとんどみられなかった (1.7パー

表9 訪問者の登場が観察された事例における挨拶の生起の有無

登 場	男 性			女 性		
	成 人	青 年	計	成 人	青 年	計
挨拶の起こった事例	68 (52.3)	0 (0.0)	68 (40.2)	8 (10.5)	0 (0.0)	8 (9.4)
挨拶の起こらなかった事例	62 (47.7)	39 (100.0)	101 (59.8)	68 (89.5)	9 (100.0)	77 (90.6)
計	130	39	169	76	9	85

() 内は各列における百分率を示す。

13) 一度に2人以上の訪問者が連れ立って現われることがあるので、「出会いの数」は、表2に示した訪問者ののべ人数よりも少なくなる。

表10 一対一の挨拶の参加者が属する性一年齢クラスの頻度分布

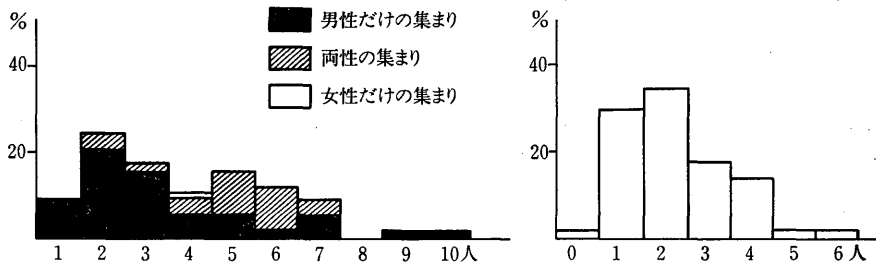
参加者		男性		女性		計
		成人	青年	成人	青年	
男性	成人	255 (83.3)	1 (0.3)	35 (11.4)	0 (0.0)	291 [95.1]
	青年		1 (0.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 [0.7]
女性	成人			14 (4.6)	0 (0.0)	49 [16.0]
	—				0 (0.0)	0 [0.0]
計						306 (100.0)

() 内は、各性一年齢クラスの組み合わせの全事例に対する百分率を示す。[] 内は各性一年齢クラスが少なくとも一方の参加者として関与した事例の全事例に対する百分率を示す。[] の合計は100%にはならない。

(a)

(b)

挨拶の起こった出会い(N=58)



挨拶の起こらなかった出会い(N=43)

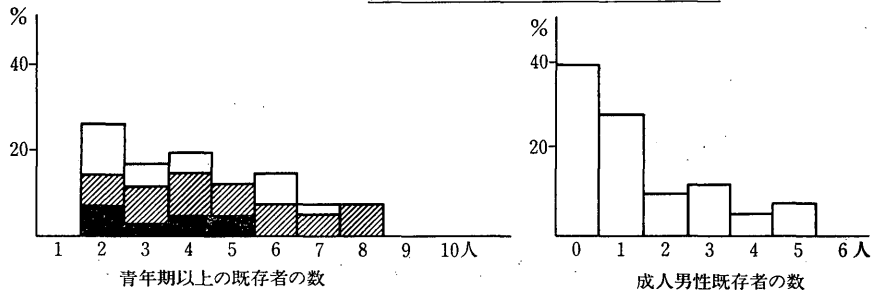


図8 成人の男性訪問者が登場したときの既存者の人数と挨拶の生起の有無との関連。上は挨拶の起こった出会い、下は起こらなかった出会いを示す。また左側 (a) は青年も含めた既存者の数、右側 (b) は成人男性既存者の数を示す。

セント)。これに対して、挨拶の起こらなかった出会いでは、男性既存者だけの集まりが占める比率は低く(18.6パーセント)、逆に女性のみを集まりの占める割合が高くなっているのである(30.2パーセント)。さらに、既存者の中に含まれていた成人男性の数は、挨拶の起こった出会いでは、平均2.24人であったのに対して、その起こらなかった出会いでは平均1.35人にすぎなかった。すなわち、挨拶の起こる出会いは、起こらない出会いよりも、多くの男性既存者を含んでいるのである(Kormogorov-Smirnov 検定: $D=0.378$, $p<0.005$, 両側)。すなわち、たとえ場に成人男性の訪問者が現われても、既存者の多くが女性や青年である場合には、挨拶は省略される傾向があるといえるのである。

しかし、挨拶の起こらなかった出会いといえども、その60パーセント以上は、少なくとも1人の成人男性の既存者を含んでいたのであるから、「挨拶は主に成熟した男性の間で交される」という規則のみによって、挨拶の「起こらない」ことを説明するわけにはゆかない。成人男性どうしの間でさえ挨拶が省略されることの要因として考慮に入れねばならないのは、その男性たちの出会いがどれだけ頻繁かということである。各々の男性成人訪問者が Camp P を訪問した頻度に従って、かれらを5段階にランクづけ、それぞれの段階において、実際に登場が観察された事例の何パーセント

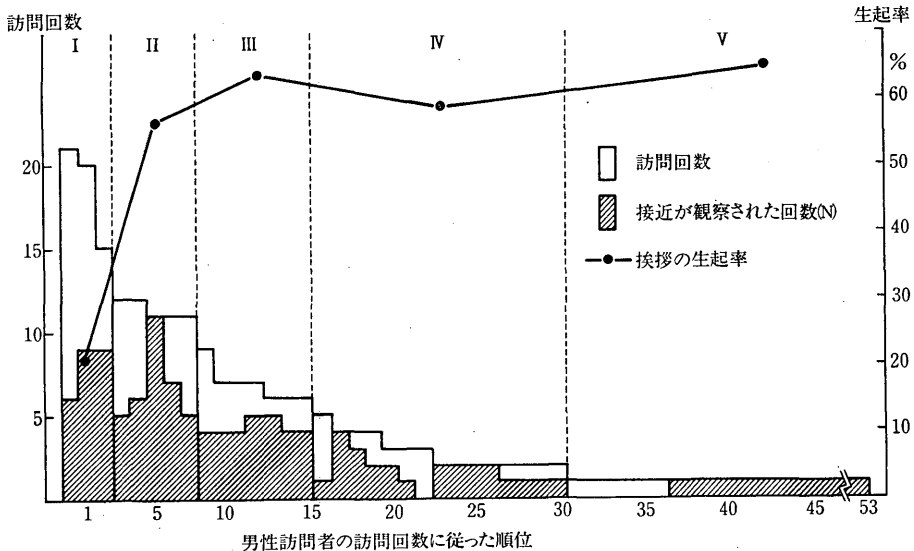


図9 成人の男性訪問者の訪問頻度と挨拶の生起率との関連。男性訪問者53人を訪問頻度に従って左から右へ配列し、縦軸に各個体の訪問回数、接近が実際に観察された事例数および挨拶の生起率を表わした。生起率= $n/N \times 100(\%)$ ただし n は挨拶の起こった出会いの数を示す。破線とローマ数字は訪問頻度の5つのグレードを表わす。

で挨拶が起こったかを比較してみる(図9)。もっとも頻繁に Camp P を訪れる「常連」3人は、挨拶を行うことが非常に少なく、また上位から2段階目に含まれる5人も、それ以下の3つの段階に比べて、挨拶を行う確率はやや低いのである。つまり、Camp P を頻繁に訪れる「常連」的な男性の登場に際しては、挨拶は省略される傾向があると結論できる。

(3) 社会的距離との関連

すぐ上に述べた点は、成人男性どうしで挨拶が起こるか否かは、出会う二者の間の社会的距離の遠近に強く依存していることを示唆している。社会的距離を表す代表的な指標として、親族関係を取り上げてみよう。

Camp P の主要な男性メンバーである1組の兄弟のペア、すなわち Chu:≠uma-Kena:masi, Piri-N≠uekukjue の4人は、私とその行動を観察する機会がもっとも多かった人々である。この4人が Camp P の内外で関与した対一の挨拶の総事例数は158回にのぼる。かれら4人と !Koi!kom の他のキャンプの男性たちとの組み合わせを、第Ⅲ章で述べた方法によって、3つの親族カテゴリーに分類する。またカラハリ族は別個のカテゴリーとする。ただし、サンについては、第Ⅲ章で明らかにされた「疎遠な他者」たちの集合は、もともとこれら4人の Camp P の男性たちと出会う機会自体が著しく少ないと考えられるので、分析から除外する(表11)。

表11 男性どうしの一対一の挨拶の参与者間の親族距離

親族カテゴリー	dyad 数	挨拶の頻度		有意水準
		観察値	期待値	
一次姻族	56 (20.0)	25 (16.1)	31.0	ns
二次姻族	80 (28.6)	36 (23.2)	44.3	ns
非親族	60 (21.4)	64 (41.3)	33.2	+++
カラハリ族	84 (30.0)	30 (19.4)	46.5	-
計	280	155	155.0	0.001

Camp P の4人の男性が関与した挨拶の全事例を示す。ただしこれらの男性が「疎遠な他者」と交した3例は除外する。dyad 数とは、この4人の男性と「疎遠な他者」を除くすべての男性非居住者(70名)との間の組み合わせ数を示す。期待値は dyad 数に基づいて計算した。+および-の符号は各行の観察値が期待値より有意に多い、または少ないことを示す。符号3つ： $p < 0.001$ ，符号1つ： $p < 0.02$ (χ^2 検定， $df=1$)。() 内は各列における百分率。

この4人が関与した挨拶の頻度分布は、各親族カテゴリーに対応する dyad 数に基づいて期待される値に比べて、明らかに有意な偏りを示している ($\chi^2=36.3279$, $p<0.001$, $df=3$)。とくに、もっとも頻繁に挨拶が起こっているのは非親族との間においてであり ($\chi^2=26.7259$, $p<0.001$, $df=1$)、逆にカラハリ族との間ではあまり起こっていない ($\chi^2=6.3873$, $p<0.05$, $df=1$)。すなわち、挨拶行動は、日常生活においてそれほど頻繁にはではないが出会う、親族関係の比較的遠いサンとの男性どうしの間で、とくによく起こると言えるのである。

いま分析対象とした Camp P の4人の男性は、先に述べたように他のキャンプに男性血族をもたないが、Camp P 以外で起こった事例を含めても、血縁関係をもった者どうしの間では挨拶はほとんど観察されなかった。唯一の例外は以下のようなものである。

事例11 9月4日 12:30 p.m. 調査者たちのベースキャンプで。

N//ôsju: がスタスタとやってくる。私たち(日本人4人)が挨拶すると、ニコニコして全員に挨拶する。そのあと、私たちの使用人 Daogu: (N//ôsju: の息子)が横を通り過ぎながら、“≠Kai-o babae” と小さな声で言い¹⁴⁾、N//ôsju: も “≠Kai” と小声で答え、ボソボソと二言三言やりとりする。そのあと焚火のそばへ行き、立ったまま2人で会話する。この会話に Maho (別の使用人)も参加する。

G//ana 言語集団に属する N//ôsju: は現在までに5人の女性と婚姻関係ないしは愛人関係をもち、Daogu: を含めて10人の子をもうけている。彼は1982年度以来、現在の妻 !kaoba (G/wikwe) と共に、孤立した生活を営む傾向をみせている。たとえ父子とはいえ、現在では、N//ôsju: と Daogu: は生活の場をほとんど共有していない。このような実際的な社会的隔りが、父子の関係を、挨拶を交すのにふさわしいほど遠いものにしてしているのかもしれない。

だが、例外的な事例の<特殊性>を強調するあまり、その事例のもつ本質的な重要性を見失ってはならない。社会的距離の遠い者どうしの間で挨拶の起こる傾向があることは確かである。しかし、このことは「近しい者どうしの間では挨拶をしてはならない」という<規範>に従って人々は相互行為をしているのだということを意味するわけではない。上述の<例外的な>事例が教えているのは、たとえ父子といえども、ある文脈においては、挨拶を交しうるということである。つまり、われわれが探求している、日常行動を司る ground rule とは、二者択一的な行動選択肢を人々に強要するものではなく、そのふるまい方にある方向づけを与えるにすぎないのである。

14) babae は、父に対する親族呼称 ba:e から派生した、相手に対する尊称と推測される。mamae という言葉もまれに聞かれる。

居住者どうしの挨拶に関しても、まったく同様の議論が成り立つ。すなわち、同一キャンプの居住者間で挨拶が起こることはほとんどない——次の一例だけを除いては。

事例12 11月17日 8:31 a.m. Camp P で

K≠á: のニワトリの卵を犬が食べたことに関する口論（事例5参照）のあとで、Tabu:ka は金を“両替え” (*tseñsa*) に行った。K≠á:, Piri, N≠uekujue の3人は Tabu:ka が夜寝ている柵のそばで、ぼんやり立っている。そこへ K≠á: と同じ Camp Ts の住人である Gyube が近づいてきて Piri の傍らに立つ。Piri, K≠á:, N≠uekujue の順で、Gyube と一対一の挨拶を行う。Gyube は、私に「胸が痛いから薬をくれ」とねだるが、私は「いまもってない」と断わる。Piri は自分の hut の方へ立ち去ってゆく。Gyube, N≠uekujue, K≠á: の3人は、1分間ほど、他のキャンプの男がエランドを獲ったことについて会話し、そのあと Gyube も立ち去る。N≠uekujue が「あなたは病院に行くのか」と後から声をかけ、Gyube は「そうだ」と答えながら去ってゆく。

同一のキャンプの居住者たちが、そのキャンプ内で挨拶しあうことは、確かにけっして起こらないかもしれない。しかし、上記の事例のように、これらの居住者たちが別のキャンプで出くわしたとすれば、かれらが挨拶することはありえないことではない。

以上の議論を踏まえて、一般に、対面相互行為を構造化している<慣習的プログラム>という概念を定式化することができる。慣習的プログラムとは、人々の行動を絶対的に拘束する、明瞭に成文化しうるような規範ではない。それは「人びとが互いに直接肉体をもった者として人前にでたとき」[ゴッフマン 1974: 300]、その身体的なふるまいに大まかな枠組を与えるような暗黙の規則である。慣習的プログラムは、個個人によって無意識的なレベルで内面化されているがゆえに、行為はあたかも第二の<自然>であるかのように自発的に湧き出してくるのである。しかし、オルテガが見事に論じたように、このプログラムは、行為者個人の中にも、また同時に他のどのような特定の個人の中にもその起源をもたないのである [オルテガ・イ・ガセット 1969: 232-233]。

(4) 挨拶の継起的構造

慣習的プログラムが相互行為に与える枠組とは、まず第一に、ある行為が誰によって、また誰に対してなされるのが適切であるかを規定するものである。今まで、性、年齢、社会関係、親族関係といった変数に応じて、挨拶行動の頻度分布にどのような偏りが見出されるかを明らかにしてきたわけだが、これらの変数は、まさしく挨拶という相互行為への適切な参加者の種類を規定するものなのである。

第二に、慣習的プログラムは、相互行為の進行の手順、あるいは時間的構造に枠組

を与えるのである¹⁵⁾。相互行為の時間的構造を分析するうえでもっとも有効な手掛りは、だれがその進行のイニシアティブを取るかを明らかにするところから得られよう。

私は、127種類の「場」において、挨拶の起こった「出会い」を154回記録した。これらの「出会い」における登場者と既存者は、必ずしも、それぞれ訪問者と居住者とに対応しているとはかぎらなかった。たとえば、訪問者がある集まりの中にいすわった後に、別の居住者がここへ接近してくる場合もあるからである。ここでは問題を単純にするために、登場者が訪問者であった場合のみを分析しよう。

訪問者が登場した出会いは、全部で114回記録された。これらの出会いの継起的構造を、登場者と既存者のそれぞれのイニシアティブに注目しながら流れ図にまとめた(図10)。この流れ図から、われわれは挨拶という相互行為がいかに多様な経路を経て進行するものであるかを知ることができる。すなわち挨拶に関与する者は、それが進行してゆく各段階において複数の行動選択肢に直面するのである。このような行動選択肢の多様性については次節で改めて論じよう。

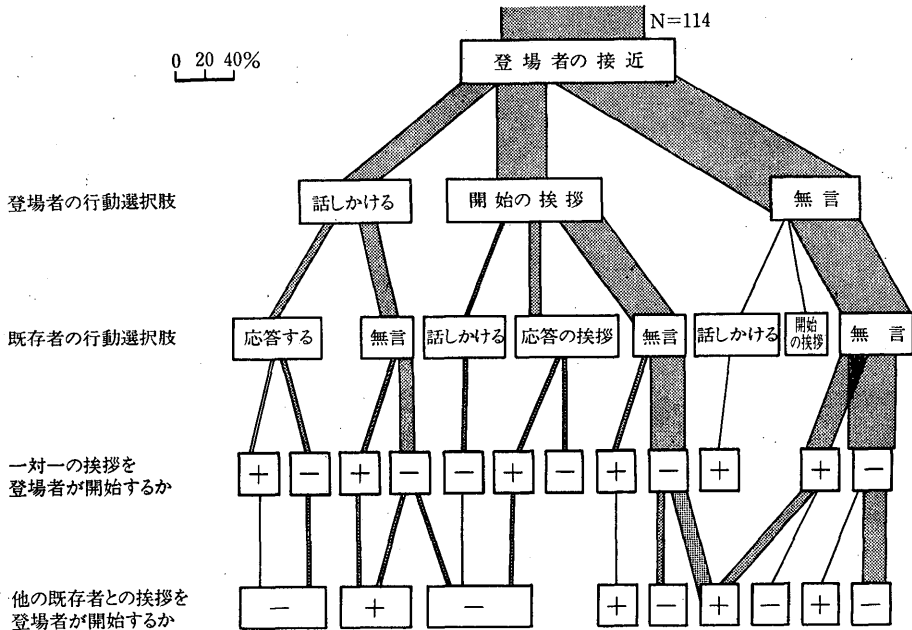


図10 挨拶の起こった出会いの継起的構造。帯の太さは全事例数に対する各経路の百分率を示す。+および-の符号は左の選択命題への肯定および否定を表わす。

15) 相互行為が階層的に構造化されたプログラムによって支配されているという考え方は Adam Kendon によって発展させられた。ただし Kendon は program という言葉よりも plan という言葉を好んで用いている [KENDON 1982: 480]。

しかし、それにもかかわらず、この多様な経路の中から、きわだって辿られる確率の高い主要な経路を区別することができるのも確かである。もっとも辿られる確率の高い挨拶の経路は、次のように要約される。1) 登場者は無言で場に侵入し、2) 既存者も登場者に対して何も言わず、3) ややあって既存者の方から一対一の挨拶を開始し、4) 他の既存者も順次登場者に一対一の挨拶を開始する。その次によくみられるのは、1) 登場者が「開始の挨拶」を投げかけながら場に入ってくる、という選択肢によって始まるものであるが、それ以降の進行経路は上記 2)－4) とほとんど変わらない。

挨拶の継起的構造をさらに抽象化して表わすならば、図11のようなになる。この単純な図式は、挨拶を司る慣習的プログラムの基本構造を明瞭に表わしている。すなわち、第一に、場に入ってくる際に登場者が発話するかしないかはほぼ半々の確率で起こるのであるが、どちらの場合にも、登場者の出現は既存者の<無視>によって迎えられるのである。第二に、このような無視のあとで挨拶を改めて開始する権限は、既存者の方に優先的に割り当てられているのである。

比喩的に言えば、このようにして抽出された挨拶の基本構造とは、慣習的プログラムの「主題」を表わしているのであり、参加者が随時選択しうる多様な経路はその

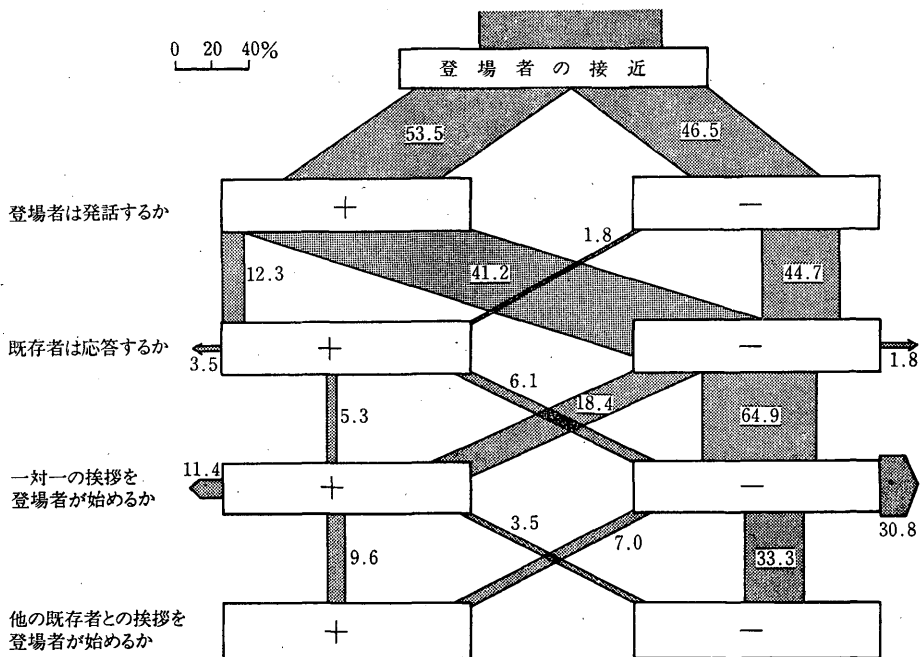


図11 挨拶の継起的構造を簡略化したシェマ。(図10の説明を見よ。)

「主題」をめぐる「変奏」なのである。そしてこの「主題」こそが、そのプログラムが当該社会において担っている〈意味〉ないしは〈メッセージ〉をもっとも鮮明に照らし出しているのである。挨拶の慣習的プログラムの「主題」とサン社会構造との関連については、討論の章で改めて論じることしよう。

(5) 行動選択肢の多様性

この節で今まで追求してきた定量的手法は、相互行為の静的な構造のみを強調し、人がつねに自動的にプログラムに則って行為するような印象を与えかねない。そこで次に、個別的な「変奏」に焦点を合わせて定性的な記述を行うことによって、サン自身が挨拶に対してどのような思いを抱き、またどのような戦略をもって、この相互行為に参加しているかを描き出すことに努めよう¹⁶⁾。

a) 逸 脱

参加者のとりうる行動選択肢のもっとも極端なものは、挨拶のプログラムの基本的な枠組からの逸脱である。逸脱の第一のタイプは、挨拶を行うことが適切とは考えられない性・年齢クラスに属する者がそれを行うところに生じる。

事例13 10月19日 7:00 p.m.

私のテントの前で、夕食を食べ終えた3人の成人男性と2人の青年男子(Kire:hoとTabu:ka)がくつろいでいる。ここへCamp SからKare:とHxara:が訪問してくる。Kare:と男たちとの間で挨拶が交換されたあと、Kare:は私に「休んでいるかい」(*kjua:n-ha*)と呼びかける。そのあと、Hxara:と2人の既存者の男性との間で挨拶が交換される。するとTabu:kaが寝ころんだまま、ふざけたように“≠Kai, Hxara:be”と呼びかける。Hxara:はただちにTabu:kaをこずき回し、足を挙げてTabu:kaの頭を踏みつけさえする。Tabu:kaは「Hxara:やめてくれ」(*Hxara:e ho: ae*)と叫びながら頭を抱えて砂の上を這いまわる。しかし両者とも顔は笑っている。ひとくさりTabu:kaをやっつけると、Hxara:は私の前にやってきて、私に≠*kaikaho*する。

この事例は、本来挨拶をするべきでない青年男子からの挨拶が、それを投げかけられた壮年の男性によって「がらかい」と解釈されたことを示している。

逸脱の第二のタイプは、社会的距離に関わるものである。前に、挨拶は、社会的距離の遠い者どうしの間でよく起こると指摘した。逆に言えば、挨拶をくしないことの背後には、お互いの「近しさ」に対する相互認知が働いているのである。〈近しさ

16) Starkey Duncan, Jr. は、相互行為の構造(organization)と戦略(strategy)とは、コインの裏表のようなのだと述べている。あらゆる相互行為の構造的規則は、合法的なものであれ、非合法的なものであれ、複数の行動選択肢(option)を含んでいる。戦略とは、利用可能な行動選択肢のどれを参加者が実際に選ぶかを記述することによって、経験的に明らかにするものなのである[DUNCAN 1981: 129]。

の相互認知>が成立しうるもっとも明白な基盤は、現に同一キャンプに居住していること、あるいは、ごく近い親族関係にあるということによって与えられる。しかし、たとえこのような基準を満たさなくても、日常よく出会い、濃密な transaction を続けている者どうしは、お互いが挨拶を省略しうる間柄であるという理解を共有するであろう。しかし、一方がこの合意を踏み越えて挨拶を開始するとすれば、これは明白な逸脱である。

事例14 10月25日 10:28 a.m. Camp S にて

大きな日蔭に、2人の男性居住者、6人の女性居住者、それに2人の女性訪問者 [!koeba (Camp M) と !kaoba (Camp Ns)] が集まって談笑している。ここへ老齢の女性 t//óchira (Camp M, 1982年度には Camp S の住人たちの co-resident) と中年の女性 kju: (Camp M) とが近づいてくる。kju: は居住者の女性たちの1人の1m後に坐りながら k!aoba にむかって「あなたはこんな所へ訪問してきているの。わたしはいま薪取りをしてきたのよ」と話しかける。t//óchiraの方は、通りすがりの幼女にちょっかいをかけ、幼女が反抗すると枝を拾い上げてぶつまねをする。幼女は憤激して t//óchira に唾を吐きかける。t//óchira は居住者の2人の女性間に密接して坐る。居住者のうち、老齢の2人の女性と1人の最高齢の男性とが順次、kju: に ≠kaikaho する。kju: は ≠kai を返したあとにいちいち「公式的挨拶」を行い、老齢の女性2人はそれぞれ哀れっぽい声で相槌を打つ。最高齢の男性は ≠kai の交換のあとに自ら「公式的挨拶」を行い、kju: はそれに哀れっぽく相槌を打つ。ついで kju: は居住者の中年の女性（最高齢の男性の長男の妻）と私とに ≠kaikaho し、最後に、先ほど話しかけた !kaoba に対して “≠Kai” と呼びかける。すると !kaoba はパッと立って kju: に接近し、その前に対面して坐りこむ。二人は楽しそうに笑いながら殴り合うまねをし、ついでお互いの手首を握り合いながら会話を始める（写真3）。

この事例は複雑に絡み合った様々なレベルのできごとを含んでいるが、いまはとくに、登場した訪問者 kju: とその場にすでにいた訪問者 !kaoba との間の相互行為にのみ注意を向けよう。登場した kju: がまず !kaoba に話しかけたところからみて、両者はかなり親密な間柄にあると推測される。それゆえ、年長者たちとの挨拶を済ませた kju: が、ことあらためて !kaoba に挨拶したことは、明らかな挑発あるいはからかいの意味を含んでいたのである。これと非常によく似た相互行為の進行は、成人男性どうしの間にも見られた。

事例15 11月29日 9:30 a.m. 小学校の校庭で

遠隔地開発局 (RADO) がトウモロコシ粉を配給するというので、人々が小学校の庭に集まっている。私と Chu:≠uma, ≠Nuekukjue は並んで校舎の壁によりかかって坐っている。ここへ G!ama (Camp O) が来て、私に挨拶したあと Chu:≠uma の傍らに坐り、Chu:≠uma, N≠uekukjue にも挨拶する。そこへ Habubane (Camp Hb) がやってきて、立ったまま Chu:≠uma, N≠uekukjue に挨拶し、ついで私に対して大きな調子で挨拶する。すると、私のよこ1.5mで壁に背をもたれさせて坐っていた G!ama が Habubane を見上げて “≠Kai”



写真3 「ことさらにする挨拶」の後に起こった身体接触を伴う会話。右の kju: が左の !kaoba にわざとらしい挨拶をし、!kaoba が kju: に近づいた。a は「殴り合いのまね」(//gaikari-ku)の直後、b は手首を握り合っの談笑が始まったところ。

と言う。Habubane はあきれたように口を開けて G!ama を見つめる。G!ama は、「おれはあんたに挨拶してるんだよ」(*Kie kwa tsa #kaikaho*)と言う。Habubane は G!ama に近づき、G!ama は立ちあがり、Habubane と手を握み合って笑いながらふざけ合う。そのあと笑いまじりの会話へ移行する。

以上に記述した2つのタイプの逸脱に共通しているのは、挨拶することが不適切であると相互に認知されている間柄において<ことさらに>挨拶がなされると、それは身体接触を伴う冗談的な相互行為の口火を切るということである。つまり、挨拶という相互行為への適切な参加者のタイプを規定する慣習的プログラムを侵犯することは、深刻な混乱をもたらすわけではなく、むしろ出会いを活性化し、心楽しい交流を生み

出す契機とさえなるのである。このことは、サンたちがいっぽうでは、挨拶を、できることならしないで済ませたい煩わしい<義務>としてとらえていることを暗示している。つまりそれは生真面目な儀礼であるがゆえに、しなくても済むような文脈で過剰に演じることが、かえってその儀礼自体を茶化す効果を発揮するのである。

だが、相互行為の構造それ自体を破壊することは深刻な結果を招きかねない。挨拶という相互行為を価値あるものたらしめているもっとも本質的な構造とは、問いと答えとの reciprocal な交換なのである。「元気か？」と問われても何も答えなかったり、あるいは「元気じゃない」と答えたりすることは、相互行為のそれ以上の進行を拒絶することにはほかならない。私自身は、時たま、ひどく憔悴していたり、不機嫌であったりするサンに無神経に挨拶して、このような拒否に出くわしたことがある。サンどうしの間ではこの種の逸脱がめったにみられないのは、かれらがその破壊的な効果をよく知っているためだと思われる。

b) 遅延

継起的構造の分析から明らかになったように、多くの挨拶は出会いの冒頭に行われる。つまり、登場者の場への侵入はいったんは無視されるが、そのあとに挨拶が交換され、しかるのちに通常の会話が始まるのであった。つまり、挨拶とは、登場者と既存者とが「焦点の定まった相互行為」(focused interaction) [ゴッフマン 1980: 27]に入るために通過せねばならない不可欠のステップであるかのようにみえる。しかし一方では、すでに実質的な会話が始まっているのにもかかわらず、改めて挨拶が開始されるという事例がときとしてみられる。

事例16 10月11日 7:58 a.m. Camp P にて

Hxara: と !Honasi (青年) とが Camp S からロバで来る。Chu:≠uma と Kena:masi は Chu:≠uma の hut 前で立ち話しをしていたが、Kena:masi は Hxara: の方へ行く。Chu:≠uma も私に「あっちで立つよ」と言っただけでかれらの方へ行く。Hxara: は木の上に吊るしたハーティビーストの肉を見ながらべらべら喋っている。「肉を皮で包め」などと叫んでいる。4分後、突然 Kena:masi が “≠Kai” と声をかけ、Hxara: それに答える。ついで Chu:≠uma が Hxara: に ≠kaikaho する。

このように挨拶の遂行が遅延する事例は、挨拶の奇妙な性格を如実に表わしている。それは焦点の定まった相互行為を始めるために必ずしも不可欠の事柄ではないのにもかかわらず、その相互行為が続くかぎり、いつかは果たされねばならないものなのである。言いかえれば、実質的に会話が始まっているということは、挨拶の必要性を何ら減じるわけではないのである。

遅延の第二のタイプは、既存者のある者が別の者に向かって声高に喋りつづけてい

るときに見られる。以下はその典型的な例である。

事例17 12月4日 7:34 a.m. Camp Sで

Piri はまっすぐ K!aek//ae のいる所へゆき、0.3 m 斜め前にしゃがむ。K!aek//ae は、ヤギの取り扱いはに関して娘の n!ôko (推定11歳) を叱りつけている。Piri は大げさに「アッ、エッ」と疲れを表わす嘆声を発するが、K!aek//ae は Piri の方を見向きもせず、激しい叱責の言葉を n!ôko に浴びせかけ、n!ôko はうなだれている。Piri が「休んでるかい」(*kxoi/a*) と呟くと、K!aek//ae はちらりと Piri を振り返って、「もう少し喋るから」(*!are:ha kxoi*) と言い、n!ôko に説教をし続ける。1分後にやっと K!aek//ae は Piri を振り返り “≠Kai” と言う。Piri も答え、ついで公式的挨拶を始める。

この事例もまた、挨拶の二律背反をよく示している。つまり、挨拶はいま既存者が携わっている会話活動を中断してまで行うほどの重大事ではない。しかし一方では、いま行っているこの「喋り」を完全に済ませ、しかるのちに挨拶を始めれば、既存者と登場者とはそのあと何ものにも煩わされずにスムーズに相互関与に移行できるとも考えられる。

遅延の第三のタイプは、故意のものではなく、言わば不可抗力によって生じるものである。大勢の既存者が集まっている場に登場者が現われ一対一の挨拶が順次始めると、既存者のある者はその急速な展開に乗り遅れて挨拶をしそびれることがある。すぐに賑やかな会話が始まると、しそびれた既存者が挨拶する機会は当分の間、棚上げにされる。かなり長い時間が経って会話が一区切りついたときに、思いがけなくも “≠Kai” という言葉が発せられ観察者を驚かせるのである。

一見したところ、遅延の現象は、相互行為の流れの中で挨拶が後回しにされ、その価値が軽んじられているという印象を与えかねないものである。しかし、まったく逆の解釈の方が正当であろう。すなわち、この現象ほどサンたちの「挨拶を行うこと」への執拗なこだわりを見事に示しているものはないのである。ここにおいてこそ ≠*kaikaho* が厳密に一対一のものであることの本質的な重要性が露わになる。つまりその場に参集している者すべてを巻きこむ談笑が始まったからといって、それはけっして登場者と既存者が一対一の人間として認め合ったことを意味しないのである。言うなれば、≠*kaikaho* することによって、人と人とは真に「出会う」のである。

c) 偶発的混乱への対処

故意になされる逸脱によってではなく、さまざまな偶発的要因によって相互行為の円滑な進行が妨げられることがある。混乱の第一の型は、挨拶されたことに気づかないという場合である。たとえば、ヴァイオリン (*hxankure*) を弾きながらやってきたある男性訪問者は、男性居住者に “≠Kai” と言われても、自分の弾く楽器の音に

打ち消されてこれが聞こえなかった。無視された居住者はもう一度声を大きくして“≠Kai”と呼びかけ、やっと応答を得ることに成功した。この居住者は、訪問者に「耳の穴がないのかね」と苦情を言った。

このように、自ら発した挨拶を相手が気づかなかった場合、サンは断固としており、あくまでも気づくことを要求する。いったん企てられた挨拶は相手からの返答を得て完成されるべきものであり、それを要求することは当然の権利なのである。

これとはまったく逆に、場で大勢の人がいあわせるとき、自分に向けられたのではない挨拶を、自分のものへと錯覚して応答してしまうことがある。誤解が生じたことに誰も気づかなかったかのように相互行為が進行することもあるが、正当な受け手と誤解した受け手とが同時に応答を發すれば齟齬が生じたことはあからさまになる。だが、誤解した受け手が改めて ≠kaikaho をやり直せば状況はただちに修復されるのである。

以上のような偶発的の混乱の事例が示しているのは、サンたち自身にとっても挨拶を円滑に進行させ、完結させることは、かなりデリケートな「仕事」だということである。とくにそれが厳密に一对一のものであるがゆえに、大勢の人間が参集していればいるほど、この「仕事」は厄介なものになるのである。

(6) 儀礼としての挨拶

サンたちは明らかに挨拶に特別な「こだわり」を抱いている。つまりかれらは、それを遂行する（しない）ことの妥当性や、その円滑な進行に関して鋭敏な感覚を發達させているのである。挨拶をすることは、義務であるかのように、また別のときには権利であるかのように扱われる。これらの特徴は、われわれがふつう<儀礼>と呼ぶものの特徴と一致する。

Goffman は儀礼 (ritual) を次のように定義している。

儀礼とは、形式的で慣習化された行為であり、それを通して個人は究極的な価値をもった何らかの対象に対するおのれの敬意と関心を、その究極的な価値対象自体に向けて、あるいはその代用物に向けて描き出すのである [GOFFMAN 1971: 62]。

挨拶が Goffman のいう「相互行為儀礼」(interaction ritual) のひとつなのだとしたら、挨拶する人はどのような「究極的価値をもった対象」に向けて、おのれの敬意と関心を表明しているのであろうか。言うまでもなく、それはいま挨拶している当の相手——すなわち対面しているこの一人の他者に向けてである。サンは挨拶の「一対一」性を執拗に追求することによって、お互いの特定の価値を承認しようという「相互行為儀礼」の機能を十全に活用しているのである。

だが、サンの挨拶は、その「一対一」性という本質的な特徴以外にも、いくつかのきわだった特徴をもっていた。以下では、動物行動学の成果に基づいて動物と人間の挨拶行動について論じた Hilary Callan の論述を手がかりにして、サンの挨拶が、一般に挨拶と呼ばれる相互行為の特徴とどの程度合致しているかを検討しよう [Callan 1980: 166-196]。

Callan は、挨拶を日常の他の相互行為儀礼と区別する基準として、何らかの意味での「出会い」に伴って起こり [1980: 171]、焦点のない相互行為から焦点の定まったそれへの移行を容易にする、といった点 [1980: 182] をあげている。

また Callan は、チンパンジーの挨拶とは、「ふつう集団内の相互行為ではみられないある形態の行動」であるという Goodall の指摘に注意を向けている [Goodall 1965: 175]¹⁷⁾。

サンの挨拶の大部分は以上のような基準を満たしている。しかし前節で論じたような行動選択肢の多様性のために、サンの挨拶の変奏のすべてを包含するような挨拶行動の定義を導き出すのは、非常に難しくなっている。Callan が最終的に提起している「社会的時間と空間の構造化」というモデルは、すこぶる多義的なものであるが、サンの挨拶のさまざまな特徴を網羅的に体系化するのには有益である。

a) 社会的空間の構造化

挨拶は主に居住者と訪問者の間で交されることによって居住集団の内部と外部の区別を表示する。またそれは、「外部」の者がキャンプという micro-territory に侵入するという、すぐれて空間的なできごとに伴って起こる。さらに挨拶は、ある程度以上の社会的距離によって隔てられた個体間で起こるのであるから、この相互行為自体が、個体間の関係性の距離を表示し、関係空間を構造化していると考えることができる。

b) 社会的時間の構造化

サンの挨拶行動の諸型式を、二者の別離の時間の長さに対応して配列することができる。まず、しょっちゅうキャンプに現われる「常連」訪問者と居住者との間では挨拶は省略される。時々会う者の間では、一対一の挨拶が交換される。ただし、一対一

17) 集団の内部で起こるかどうかという問題ととくに関連が深いのは、家庭の内部で行われる挨拶である。たとえば、アングロサクソン系の家庭における親子の挨拶は、日本の家庭で一般的な「ただいま」-「おかえり」という慣習化したやりとりよりもはるかに入念なものである。この意味では、社会的距離の近い者どうしの間では挨拶を省略するというサンの慣行は、われわれにとってなじみ深いものといえる。家庭内の挨拶にみられる欧米と日本との差異については小川了も関心を寄せている [小川 1984: 142]。

の挨拶は原則的には1日に1回行えばよいのであり、朝ある場で出会い、夕刻また別の場で出会ったとすれば、夕刻の出会いでは「開始の挨拶」(*kjua:nkaho*)だけが投げかけられ、一対一の挨拶は省略されるのである。

さらに、定住化以前の遊動生活の中でときたま起こっていた、遠く離れたキャンプ間の訪問に際しては、必ず感情のこもった「公式的挨拶」が交され、お互いが長期間の「別れ」を経て今また出会ったことが確認されていたのである。

そして最後に、ごく近い親族や配偶者と非常に長い別離の果てに再会したときに行われる「相互行為儀礼」がある。実際の観察例はないが、たとえば男が遠く離れた地に行き、何カ月も（ときには何年も）家を留守にしたあとふらりと帰ってくると、男の妻や両親は水に手を浸し、それを男の体に“ふりかける”(*≠nao*)のだという。妻は夫を“切実に欲している”(*kirihā kene*)ので、水をふりかけて“治す”(*sha:kaho*)前に、夫が妻の作った食事を食べると夫は病気になると信じられている。このように極端に長い不在は、人の体にある種の汚れを沈着させる。しかも、その汚れの源は、不在の人を希求する者たちの欲望なのである。

3. 訪問者と居住者の戦略

訪問者に固有の問題は、おのれの存在を居住者によって承認してもらうということである。これに対して居住者の側の問題はそれほど鮮明ではないようにみえる。なぜなら、訪問者がその場に「いる」という状態は、訪問者が主体的に選びとったことであるがゆえに、その状態の背後には何らかの意図あるいは目的が潜在しているとみなされても仕方がないのに対して、居住者が「いる」という状態は何ら意図を詮索される必要がないからである。すなわち、居住者が「いる」ことは当然のこととして扱われる。

だがこの区別は実はそれほど厳密ではない。サンは同一のキャンプの内部においてさえ、他人のhutの前へ行きそこにいすわることを、「訪問する」(*gira*)という同じ言葉で呼ぶのである。別の居住者を「訪問する」居住者の置かれる立場は、キャンプ外からの訪問者の立場からそれほどかけ離れたものではない。

このことをよく表わすのは、居住者がときたまみせる、場に参加することを躊躇する行動である。たとえば、私のテントの前には、夕刻になるときまって青年たちがたむろする。夕刻に私の焚火のそばにいるということは、私が作る夕食の分け前にあずかることを意味する。このような青年たちの集まりの後方にやってきた年長の男性が、坐ろうか坐るまいかと明らかに迷っていることがある。彼は、憂わしげな顔で何か呟

きながら、伸びあがって遠くを見やったりする¹⁸⁾。あるいは、彼は手近にいた幼児をからかい、幼児が向かってくと笑いながら相手になってやる。こういった一連の「行動的弁解」を経て彼は腰をおろす¹⁹⁾。あたかも、「私がおまえたち青年と一緒にここに坐るのはサガワラの夕食の分配を期待してのことではない。ただなんとなく立ち寄っただけなのだ」と「言って」いるかのようである。

これと類似の例は、訪問者の行動の中にもしばしばみられる。それゆえ以下に訪問者の戦略として記述する行動は、けっして訪問者にのみ特異的であるとはかぎらない。要は、人がある場にいることの目的や意図を忖度される可能性があるとき、人が行う様々の「小さな行動」(small behavior) [GOFFMAN 1971: xiv] は、おのれの存在に対する承認を得ようとする戦略とみなしうることである [cf. CALLAN *et al.* 1973: 31]。

訪問者のなす「小さな行動」のうちでもっともよく見られるのは、子供——とくによちよち歩きの幼児に対して接触を求めることである。訪問者がその場に接近するやいなや、幼児をからかった典型的な例は、前節の事例14に見られる。訪問者がかつての co-resident であったり、親族関係の非常に近い常連である場合には、接触を求められた子供は喜んでこれに応じることがある。しかし、多くの場合、訪問者の唐突な働きかけは、事例14のように、子供の激しい抵抗を呼び起こしたり、子供を怯えさせたりするのである。

訪問者はまた、登場の瞬間ばかりではなく、滞在中にもしばしば手近にいる子供をからかう。男性訪問者によくみられるのは、ステッキの先で子供をつついたり、その柄で子供の手足を引っ掛けたりする行動である。このようなからかいのときには、必ずと言ってよいほど「おまえを殴っちゃうぞ」(*tsa chu:kaho*) といった類の冗談的な罵りの言葉が笑みと共に発せられるのである。

冗談めかした接触行動以外にも、子供に対する関心や気遣いが訪問者によって公然と表明されることがある。たとえば、ある G//anakwe の訪問者は、Camp P の5人の男性居住者たちと共に木蔭に横たわりながら、20分間にわたり、数分おきに、周囲で遊んでいる2人の幼児に向かって「バーバー足が焼けちゃうよ」(*ba: ngere dao*) と呼びかけ続けた。このフレーズの繰り返しは20回以上に及んだ。この訪問者は、一種、

18) たとえば、ある初老の男性は数100メートル離れたブッシュの中に聳えた大木の枝に皮紐をぶらさげてそれを毎日振ってやわらかくするという作業を行っていたが、青年たちの集まりに参与する前に、その作業場の方を伸びあがって見て異常がないかどうか確かめる風であった。

19) 「行動的弁解」という用語は私自身の作ったものであるが、Charles Goodwin は、VTR資料に基づいた会話分析の著作の中で、この概念にぴったりあてはまる見事な例を記載している [GOODWIN 1981: 144-147]。

尊大で自己顕示的なパフォーマンスを行う性癖があり、Camp P の男性たちとの間に気の置けない親和的な関係が確立されているとは到底考えられぬ人物であった。この事例でも、子供たちに呼びかけるときの猫撫で声と、沈黙して横たわっているときの気難しげな表情とのコントラストは異様でさえあった。

確かにサンは子供をよくかわいがる人々であるし [KONNER 1976: 220; DRAPER 1976: 205-206, 1978: 37-38], 「子供の愛らしさ」はおとなたちにとって大きな慰めであると信じることができる。だが、上記の事例が典型的に示しているのは、訪問者が子供に対して表わす関心は、単に内発的感情にのみ根ざした「かわいらしさ反応」(cute response) [ジョリー 1982: 279-281] などではなく、彼が場にいつづけることを正当化する一つの方策なのだということである。サンにとって「子供の愛らしさ」は根源的な価値であるがゆえに、子供と接触しようとするいっさいの試みもまた、ア・プリオリに肯定されやすいのである。このことは、いくぶんかはわれわれ自身の文化にもあてはまることである。

‘inspecting’ もまた、訪問者がしばしばみせる行動である。手近にある様々な物品が inspecting の対象になる。とくに会話の格好の主題となるのは、‘finger piano’ (dengu:) や“ヴァイオリン” (hxankure) といった楽器の音色である。居住者が現に行っている作業も inspect と批評の対象になる。ある女性訪問者は、生皮を缶でこすっている男性居住者に近づきながら、「こんなふうをやってるのね」と言って、缶でこする動作をまねてみせた。

さらに、会話の中で言及されたある事柄もただちに inspect される。Camp Ts を訪ねた Piri は、男性ホストと話している最中に、垣根の外で行われている女たちの会話を聞きとがめて、パッと立って、前の晩にイヌが忍びこんで肉を盗んだという現場を inspect しに行った。また彼は、Camp S を訪問したときには、会話の中で畑のことが言及された後に、キャンプの裏手に行き、そこにある畑を指さしたり何か呟いたりしながら inspect してまわった。

最後に、何らかの手作業の材料を持参して、訪問先でもそれを続けるという場合がある。これはむしろ、キャンプの内部で、公の日蔭や、他人の hut の前の集まりに参加する居住者に頻繁にみられる行動である。

前の章で私は、何らかの確固とした「用事」があるかぎり、訪問者は確信をもって場にいつづける権利を主張できると論じた。様々の「小さな行動」に携わろうとする訪問者の戦略もこのことと無縁ではなからう。もちろん、もっとも手っとり早く、自然な「用事」は会話することである。しかし、さまざまな理由から、訪問者と居住者

との間に活発な会話が成立せず、長い「手持ち無沙汰の時間」を過ごさねばならないことがある。「小さな行動」に携わる訪問者が、おのれのくいる>ことに対する承認を得るために意識的に努力していると言い切ることはできない。だが少なくとも、それが何ほどかの「暇潰し」の用を果たしているかぎりにおいて、訪問者の滞在はより<自然な>ものとなりうるのである。

それでは居住者の側には、訪問者の行動戦略に対応するような何らかの戦略が見てとれるであろうか。そのもっとも基本的なものとして、「見ない」ということについて論じよう。挨拶行動の継起的構造を分析する際に指摘したことであるが、居住者はあたかも訪問者の登場に気づかないかのようにふるまう。もっと具体的に言えば、かれらはまったく訪問者の方に目を向けないのである。接近する訪問者をじろじろ眺めるのは、不注意な観察者である私ぐらいのものである。

出会いにおける相互 gaze の回避は、部分的には、interaction ethology 一般の普遍的な論点と関連している。たとえば Kendon と Ferber は、アメリカ人の挨拶行動の微視分析の中で、“close salutation”を行うために近づく2人の参加者は、接近行動の間じゅう、相手の顔から目を逸らす傾向のあることを明らかにしている [KENDON & FERBER 1973: 628-634]。このような視線の回避が Kendon らの論じているように、「情報遮断」(cut-off) というエソロジカルな機構 [CHANCE 1962; MORRIS 1978: 164-165] に基づいているかどうかには疑問の余地がある。下位の機構を仮定せずに、相互行為のレベルで、「視線回避」の現象を理解することは十分に可能だからである。

相互 gaze とは、近接して焦点の定まった相互行為を行う参加者にのみふさわしいものである²⁰⁾。接近しつつある瞬間とは、焦点の定まった相互行為が実現されつつある、曖昧な中間状態である。このような状態で視線を合わせても、参加者たちはまだ他に何ひとつすることができないので困惑に追いやられるしかない。しかもサンの社会においては、遮蔽物がなく平坦で見通しがよいという環境の特性によって、接近しつつある状態が認知されうる時間が著しく長いものになっている。この長い接近の時

20) しかも相互 gaze は、dyadic とはいわぬまでも、非匿名的な相互関与にのみふさわしい。たとえば、教師が学生に講義をしている状況は明らかに焦点の定まった相互行為であるが、それは通常の対面相互行為よりも大きな距離によって隔てられており、しかも一対多のコミュニケーションであるがゆえに、学生たちはある程度匿名的に存在している。教師がまったく学生の顔を見ずに講義を進めることは、かれらを完全な匿名性に追いやることになり、「焦点の定まった相互行為」という講義の本質を瓦解させることになりかねないが、逆に、教師が講義の間じゅう一人の特定の学生を凝視しつづけるとしたら、これもまた状況の定義にふさわしくない過度の近接性を導き入れるものである。それゆえ有能な教師はすべての学生とまんべんなく eye contact を続けるように努めるのである [cf. SARLES 1975: 33]。

間が非常に居心地の悪いものであることは、同僚のキャンプを訪問する際に私自身が繰り返し痛感したことである。互いに気づかないかのようにふるまうことに慣れていない私たち日本人は、まだ何10メートルも離れているのに、手を振るといった、お互いを認め合う合図を送ってしまう。こうして、いったん相互認知が確立されたあとには、それに続く長い接近の間じゅう、目のやり場に困るのである。

接近する訪問者を「見ない」という居住者の慣行は、それゆえ、中間状態での困惑を避けるという、人間の出会いにおける普遍的問題を解決する一方策とみなされうるであろう。だが、サンにおいては、「見ない」ことは、相互行為するヒトの本性に根ざした、困惑を回避するための工夫以上の意味をもっていると信ずべき根拠がある。

事例18 10月12日 7:23 a.m. Camp P にて

Piriが私のテントから自分のhutの方へ帰ろうと歩いていると、Ako:sa (Camp Kg)が接近してくる。Ako:saはイヌに吠えつかれ、Piriはイヌに棒を投げつけて追い払うが、Ako:saのほうは見向きもせずにその前を通りすぎる。Piriは自分のhutの前で杖を取り上げ外出の仕度を始める。Ako:saは「あんたたち(私とPiri)は訪問に行くのか」と言いながら近づいてきて、しゃがみこんだPiriの前1mに対面してしゃがむ。Piriは“≠Kai”とAko:saに挨拶し、Ako:saもこれに応える。このあと2分間両者の間で簡略な会話が交されたあと、Ako:saは「私はあっちへ行く」と言う。Piriが「Habubaneの所か」と問うと、Ako:saは「Ayakomの所だ」と答える。Ako:saが歩き出すと、Piriはその背に向けて何か喋りかけるが、Ako:saは答えずに去ってゆく。

訪問者に吠えついたイヌにむかって棒を投げつけたからには、居住者は明らかに、訪問者の存在を認知していることを表明しているものであり、しかも、かれらは焦点の定まった相互行為にただちに入りうる近さにいたのである。しかもなお訪問者を見向きもせずに自分のhutに戻るという居住者の行動の背後には、訪問者の方が相互関与の意志を明確に表すまではかれを「いない」かのように扱うべきであるという判断が働いていると思われる。

また、この事例は、ある明確な輪郭をもったセッティングの中に参与者たちが配置されたのちに相互関与は開始されるべきであるという暗黙の規則をも暗示している。つまり、単にすれちがう者どうしはお互いを認め合う必要はないし、もし認め合うのだとすれば、「すれちがう」という流動的な状況をいったんは中止し、より安定した場面枠を打ち立てねばならないのである。

「見ない」という居住者の行動特質は、じつはかれらがキャンプの外界を絶えず鋭敏にモニタリングしているという事実と表裏一体のものである。居住者たちは、はるか遠くを通りすぎる人影や、キャンプに近づきつつある人影を一瞥すると、会話を中断して声をひそめ「誰某だ」と、その名を呟くのである。この瞬間からすでに、訪問

者を「見ない」というかれらのパフォーマンスは準備され始めているのである。さらには、このような準備態勢をとりながら、訪問者が行うのによく似た「行動的弁解」を居住者が始めることさえある。たとえば、!Koi!kom の中心に近い Camp O で見られた事例であるが、ある男性居住者は、近づいてくる5、6人の男たちの姿をはるか遠くに認め、妻とひそひそとかれらすべての名を呟き合ってから、やおら立ちあがり、柵にかけてあったなめしかけの皮を取り、坐りこんでそれを揉み始めたのである。訪問者たちが彼の hut の前に立つと、彼は作業の手を休めずにかれらに挨拶を始めた。

この最後の例は、さまざまな研究者が報告してきた、平等主義社会に特有な行動パターンを連想させるものである【市川 1982: 93, 196】。その行動パターンが含んでいるメッセージとは単純化して言えば、「私はあなたが思っているほど幸福ではない」ということであり、さらには「だから私には何も期待しないでくれ」ということなのである²¹⁾。

翻って、本章で明らかにした、居住者一訪問者間の対面相互行為の諸特質もまた、いわゆる平等主義的な社会布置の中にサンの訪問活動を位置づけることによって初めて、十全に理解することができるのである。最終章では、このような問題を討議することしよう。

VI. 討 論

本論文では、社会関係、社会的・経済的 transaction、そして対面相互行為という3つのレベルで、定住地におけるサンの訪問活動の様態を分析してきた。これら3つのレベルでの分析は、それぞれ次のような問いに対応している。第一に、サンはなにゆえに訪問を行うのか。第二に、サンは誰のキャンプを訪問することを選ぶのか。そして第三に、訪問者および居住者は対面的状況においていかにふるまうべきなのか。本章では、これらの設問に答えながら、序章で予告したより根本的な問題——すなわち社会構造の変容と集団帰属性という問題について考えてみよう。そして最後に、訪問活動における対面相互行為の規則が、「平等主義」と呼ばれるサンの根源的な社会規範といかなる関わりをもっているかを論じよう。

21) これと似た行動パターンは、狩りに出かけようとしている男の言動からも見てとれる。私はしばしば、出かけようとしている Chu:≠uma に「狩りに行くのか」と問いかけたが、彼の答えはきまって、「いやちがう、採集に行くんだ」というものであった。たとえ彼が前日の夕刻、矢に新しい毒を塗っていたとしても、現に彼がいま弓矢と槍で完全武装していようと、彼はけっして「狩りに行く」とは言わないのである。

1. なぜ訪問するのか——transaction のレベル——

まず伝統的な遊動生活においては、訪問活動がどのような意義をもっていたかを振り返ってみよう。田中は、訪問の第一の機能がキャンプ間の情報交換にあることを認めたとうえで、その主要な目的を、1) 親戚や友人に会うため、2) 必要物資の調達、3) 配偶者を探すための3つに分類している [田中 1971: 172-173]。Lorna J. Marshall はさらに仔細に訪問の目的を数え上げているが、それらは「儀式への参加」という項目を除けば²²⁾、基本的には田中のまとめた3つの目的または機能に包含される [MARSHALL 1976: 180-181]。

定住地での訪問は、伝統的な生活の中でのそれとは比較にならぬくらい、容易でしかもありふれた活動である。それはもはや、長い別離の後の邂逅がもたらす喜びなどとはほとんど無縁の営みになってしまった。同時に、訪問者のもたらす情報にも、もはやあまり新奇な価値はない。要するに、定住地の訪問という営みからは、かつてのサンの社会生活の中でそれを特徴づけていたドラマトゥルギーの大部分が失われてしまっているのである。

日常茶飯事としての現在の訪問活動のもっとも主要な目的は、田中の挙げた2番目の項目——すなわち「必要物資の調達」であると言ってよい。だが、獲得した物資を訪問者がおのれのキャンプに持ち帰ることはめったになく、多くの場合、訪問者に供される少量の食物、酒、タバコなどはその場でただちに消費されるのである。それゆえ、微々たる物資を「乞うために」という、しばしばサン自身によって言明される訪問の表向き目標は、人を訪問へと向かわせる真の動機づけのごく一部にすぎないと考えられる。

IV章で私は、直接的な経済的実利性を伴わない、訪問者と居住者の交流の諸側面を記述した。すなわち、冗談行動、親和的身体接触、自己の置かれている境遇の喧伝、タバコのまわしのみ「儀式」といったものがそれにあたる。たとえ、ありふれたで

22) 儀式への参加は、定住地の訪問活動にとっても重要な目的のひとつである。初潮を迎えた少女を祝福する“エランドの踊り”(gyá)がCamp Pで行われたときには、このキャンプと関係の深い5つのキャンプからのべ11人の女たちが参集した。この例はVisitor diaryのデータには含まれているが、男性が“エランドの踊り”に立ち会うことは女性たちの激しい非難を招くので、私は詳しい観察を行わなかった。また、時たま深夜から明け方にかけて行われる“ゲムスボックの踊り”(hlo:)には、近隣のキャンプから数10人の男女が参集することがあるが、私は深夜にはシステムティックな観察を行わなかったので、“ゲムスボックの踊り”に伴う訪問はいっさいデータに含めなかった。サンにとって、踊りはこのうえない娯楽であるとともに、宗教的な陶酔にかれらが没入する稀有な機会でもある [TANAKA 1980: 113-115] が、体系的な分析は今後の課題である。なお!Kung Sanの超越的経験については、すでにRichard Katzの秀れた論考がある [KATZ 1976, 1982]。

きごとへと頽落しているとしても、今なお、訪問に付随するこれらいっさいが、この営みの根源的価値であると同時に、人を他のキャンプへと向かわせる根源的な動機づけを形作っていると考えらるべきであろう。

むしろ、訪問の「無償の歓び」をより率直に体現しているのは、女性のほうであろう。女性たちは、「目標追求的な」訪問を男性ほど頻繁には行わないようにみえる。彼女たちの訪問は、水汲み、採集行、薪取りといった生業活動のついでに、他キャンプへ立ち寄るといった形をとることが多い。しかも、そこにはしばしば、姉妹、おば、姪といった同性の血縁親族がいるのである。これらのいわば「気のおけない」者どうしは、密集し、虱取りをしあいながら飽かず談笑に耽るのである。

他者との出会いそれ自体に内在する歓びが、自然発生的に活性化される女性の casual な訪問と対照的なのは、<労働>を第一義的な目的とする男性の訪問である。後者のような訪問の形態こそは、定住化がもたらした社会的=経済的関係の変容をもっとも如実に反映するものである。もちろん、伝統的な分散生活の中でも、キャンプ間の相互扶助や協同は珍らしいことではなかったであろう。たとえば、獲物の追跡、解体、持ち帰りといった作業を行って hunter を助ける近隣キャンプの男たちは、何がしかの肉の分け前にあずかることによって、その<労働>の代価を得たであろう。しかし、このような hunter と helper との関係は、<労働>とそれに対する<代価の支払い>によって完結したわけではなく、ある将来には、二者の立場が逆転するという潜在可能性によって永続的な未来に向かって開かれていたのである。

これに対して、サンに柵造りや皮なめしを委託するカラハリ族と、何がしかの報酬を期待してカラハリ族のキャンプに出向くサンとの関係の中には、<立場の逆転>という潜在可能性は含まれていないのである。それは相互扶助というよりも、むしろ雇用関係に近いものであり、たとえ労働の代価が少量の酒や粥にすぎないとしても、賃労働の萌芽的な形態がそこにはみられるのである。

実際、多くのサンが、すでに政府の施策による道路工事などの労役に雇われ、賃労働に関与している [田中 1986: 324]。また Mathias G. Guenther は、農場への寄生的生活もまた、サンの“band society”の多面的な表現型の一環とみなすべきであると論じている [GUENTHER 1985: 2-9]。それゆえ、サンが従来の相互扶助的な近隣関係とは異質な社会的=経済的関係を、カラハリ族の移入者との間に速やかに打ち立て始めているのは驚くにはあたらない。

Sahlins は“inter-tribal”な物々交換や交易を「否定的互酬性」(negative reciprocity)の原理によって特質づけるいっぽう、“tribe”の双方にとってその交換が真

に critical なものであるならば「値切り」(haggling) は抑制され, “intertribal symbiosis” が発生するであろうと論じている [SAHLINS 1974: 196-204]。寺嶋秀明は, Mbuti Pygmy とバンツ―農耕民との経済的交換システムを安定した共生関係としてとらえ, それによって「Mbuti と農耕民の双方が利益を得ている」と結論している [TERASHIMA 1986: 401]。

もしもカラハリ族が, その誘惑にサンが抗しがたい, 酒のような嗜好品を報酬として, サンの労働を「値切って」利用しつづけるのであれば, カラハリ族とセントラル・カラハリ・サンという2つの民族集団の関係は, 明らかに「否定的互酬性」の様相を呈するであろう。サンとカラハリ族の間にしばしばみられる反感やコンフリクトも, この懸念を裏づけている。かれらのそれぞれがおのれの生業と文化の独自性を保持しながら, お互いの中に安定した共生関係を発展させてゆくかどうかについては, 今後の長期にわたる調査に委ねなければならない。

2. 誰を訪問するのか——社会関係のレベル——

訪問者の構成を分析して明らかになったもっとも注目すべき事実は, 他のキャンプに居住する成人のサンの30~40パーセントは, まったく対象集団を訪問してこないということであった。しかも, このような「疎遠な他者」のカテゴリーは, 長期にわたって, いわばネガティブな安定性を帯びていることがわかった。すなわち, サンの社会関係には著しい不連続性が見出されるのである。この不連続性はサンの社会構造の根幹に関わる意味をもっている。

人があるキャンプを訪問しようとするとき, かれは transaction のレベルで何らかの目標ないしは用事を設定するいっぽう, 対面相互行為のレベルでは, 様々の「小さな行動」によって場への滞在を不断に補強するであろう。このような訪問者の戦略の根底にあるのは, 2つのレベルの双方において, 自己の行動に<自然な外観>(natural appearance) を与えることだと考えられる [cf. GOFFMAN 1971: 239]。

Transaction のレベルで, 訪問に<自然な外観>が典型的に付与されるのは, 物品の授受が「当然のこと」としてなされる場合である。当然のこととして進行する物資のやりとりに関与している特定の dyad には, 均衡的互酬性の関係が成立していると推測される。逆に, 対象集団の人々と「疎遠な他者」との間には, もともとこのような互酬的關係が成立していないので, 互いを訪問すること<自然な外観>が付与されえないのである。

ところで, 「誰を訪問するのか」という点に関わる decision-making は, 「誰と共に

住むか」に関するそれと密接な関係をもっている。ある人々が、他の別の人々と同一のキャンプに暮らそうと決意するという事は、均衡的互酬性の原理を踏み越えて、その別の人々との間に一般的互酬性に基づいた権利＝義務関係を打ち立てることを意味している [田中 1971: 141-148; LEE 1979: 460]。このような選択が双方の合意に基づいて成就しうるのは、2つのパーティが共住するというそのことが、やはり<自然な外観>を備えているからにはほかならない。そしてこのようなく自然さとは、それまで2つのパーティの間で持続していた互酬的關係が両者の互いに対する親愛と信頼とを高めていたからこそ成立しうるのである。言うまでもなく、そのような互酬的關係とは、日常的な訪問活動を通じての社会的・物質的な transaction によるのみ維持され補強されるのである。

それゆえ、互いを訪問しうる間柄であるということは、共住しうることの十分条件ではないが必要条件ではある。すなわち、訪問關係がまったくみられない「疎遠な他者」とは、おそらくよほど極端な生態的・社会的環境圧がないかぎり、共住することはけっしてない人々であると考えられる。

事実、田中〔私信〕によれば、私の対象集団の人々の伝統的な遊動域が !Koi!kom から 50 km 以上も南の Kxaochwe Pan 付近であったのに対して、「疎遠な他者」たちは、主に !Koi!kom の北側を遊動していた。それゆえこの人々が出会う機会はもともとあまり多くなかったし、田中の知るかぎりでは、同一のキャンプに共住したこともない。

定住地の訪問活動から引き出された、サンの社会關係の不連続性は、われわれを“band”という概念の再考へと向かわせる。サンの社会構造に関する従来の研究には、band および territoriality の概念をめぐる顕著な不一致が認められる。多くの研究者が「目に見える実在」 [MARSHALL 1976: 179] としての band の概念に何ら疑いをさしはさんでいない [HEINZ 1972: 407-408; SILBERBAUER 1981: 138-140] のに対して、Richard B. Lee および田中は、サンの流動的な社会編成に band の概念をあてはめることは不適切であるとし、居住集団に camp という名称を与えた [LEE 1979: 61-67; TANAKA 1980: 94]。Wilmsen は、流動性を強調する一方で永続的な集団の土地に対する所有権 [LEE 1979: 334-340] や、親族距離に基づいて空間的に構造化された地域集団 [TANAKA 1980: 134] について論じる Lee と田中の立論は自己矛盾をきたしていると批判している [WILMSEN 1983: 13-14]。また、Alan Barnard は、サンにみられる多様な居住パターンを、カラハリ砂漠の環境的多様性、とくに水資源の量と安定性によって説明しようとしたが [BARNARD

1979], Guenther は生態学的パラメーターのみに依拠した説明の限界を指摘し、社会構造とイデオロギーの領域をも統合して、サンの“band society”を新たに定義しなおすべきであると提唱している [GUENTHER 1985: 11, 20-24]。

以上みてきたような、サンにおける band 概念の混乱は、目にみえる空間的実在としての居住集団のレベルと、集団への主観的な帰属性のレベルとを混同するところから生じていると考えられる。たえず構成を変化させる実際の居住集団のいかなるフェーズも、band という社会的実体を表わしていると考えられないというかぎりにおいて、Lee と田中の主張は正しい²³⁾。しかしそのいっぽうで、田中は、著しく複雑かつ多様な離合集散のプロセスにもかかわらず、サンの家族の共住可能性と地理的分布とは、明瞭な階層的クラスター構造が認められることを明言しているのである [TANAKA 1980: 132]。それゆえ、もっとも本質的な問題は、人々の帰属意識のレベルにこのようなクラスター構造がどのように刻みつけられているかを知ることである²⁴⁾。

上で論じたように、訪問しあうことが妥当であるとみなされる他者の範囲は、共住することが<自然>であるとみなしうる他者の範囲を含んでいると考えられる。それゆえ、訪問活動によって維持されている社会関係に顕著な不連続性が認められるという事実は、共住可能性に関するサンの他者認知もまた不連続なものであることを示唆しているのである。田中の提起した同心円構造のシエマ [TANAKA 1980: 132-134] においては、あるいくつかの“cluster of families”が単一の円によって括られ、別の“cluster of families”の集合を括る円と区別されている。この図式が意味しているのは、他の cluster との共住可能性が、単に各 cluster の egocentric な視点からみた親族距離に従って連続的勾配を形作っているというだけではなく、そこに明瞭な

23) この点に関するかぎり、“patrilocal band model”を田中が否定したことに対して Wilmsen が投げかけた批判 [WILMSEN 1983: 13] は的はずれである。なぜなら、キャンプが基本的には一次親族結合に基づいて成立することは疑いえないが、この親族結合が完全に双系的なものであることは議論の余地がなく立証されているからである [TANAKA 1980: 127-132; TANAKA *et al.* n.d.: 30-34]。また、定住地でのキャンプのそれぞれを離合集散生活の中では潜在していた band という単位集団の顕在化したものとみなすことも早計であろう。確かに、これらのキャンプは定住以前と比べるとかなり安定した構成を示してはいるが、第II章で明らかにしたように、長期的にみれば大きく変動しているからである [SUGAWARA 1984: 6-7]。

24) いわゆる“cluster analysis”の方法は、霊長類の離合集散的なグルーピングの構造を表現するうえで大きな威力を発揮する [MORGAN *et al.* 1976; SUGAWARA 1979: 26-29]。cluster analysis で使用される「類似度」(similarity)とはまさに「共にいる可能性」を示す定量的指標である。band を目にみえる社会的実在にあてはめようと腐心する人々は、狩猟採集民の離合集散的グルーピングから定量的に抽出しようとする clusterこそが band に対応すると主張するかもしれない。しかし、cluster とはあくまでも相対的な概念であり、それを相互に区分することの信頼性は、グルーピングのプロセスが実際に観察された時間幅に依存していることを忘れてはならない。

gap が認められるということにほかならない。言いかえれば、複数のエゴ（この場合は cluster of families）の視点が一致して、「われわれ」はある状況下では同一キャンプに共住しうるが、「かれら」とは共住しえないと判断することを許すような社会的境界が存在し、しかもその境界は通常の居住空間の地理的な遠近と対応しているのである。つけ加えるならば、このような社会的境界は、G/wi と G//ana という言語集団の境界とはまったく一致しない。なぜなら、G/wi と G//ana が共住するキャンプはごくふつうに見られるし、そのいっぽうでは対象集団 (G/wikwe) にとっての「疎遠な他者」たちの集合は、G//anakwe とともに多くの G/wikwe をも含んでいるからである。すなわち、言語集団への帰属性と共住可能性とはまったく別のレベルに属する問題なのである。

band および territoriality という概念をきわめて広義に解するならば、帰属意識のレベルでそれを定義しなおすことは不可能ではない。すなわち band とは特定の目にみえる居住集団を指しているのではなく、複数のエゴの視点からみた、他者との共存可能性の範囲の積集合として定義される。言いかえれば、band とは客観的な実在の範疇にではなく、居住に関する間主観的なコンセンサスの領域に属しているのである。“band society” の名のもとにサンの社会構造を語ろうとするのであれば、以上の点を銘記することは、無用な議論の混乱を回避するうえで重要であろう。

伝統的な狩猟採集生活においても、セントラル・カラハリ・サンの集団編成はけっして無定形なものではなく、そこには明瞭な cluster 構造と、cluster 相互間の不連続性とが認められたということを再確認するならば、定住地における社会関係の不連続性もたやすく理解しうるのである。このように考えるならば、サンの伝統的な社会構造の基本的な特徴は、定住化・集住化を経てもなお存続しているばかりか、著しい凝集化によってより誇張された形で現われていると結論できるのである [田中 1986: 331-335]。

3. いかにもふるまうべきか——対面相互行為のレベル——

ここでは、居住者と訪問者の間で交される対面相互行為の中から、とくに挨拶行動だけを取り出し、それを司る慣習のプログラムの「主題」が、サンの社会構造とどのように関わり合っているかを論じよう。

挨拶行動のプログラムのもっとも基本的な「主題」は次の3点に要約される。1) 社会的距離の近い者どうしは挨拶を行わない。2) 挨拶が始まるまで、訪問者の存在は無視される。3) 挨拶を開始する権限は、居住者の方に優先的に割り当てられてい

る。

社会的距離の近さとは、出会いの参加者によって相互的に認知されなければならない。この相互認知に、故意にであれ、非意図的にであれ、不一致の生じる可能性はつねにある。しかし、ここに、誤解の余地のない絶対的基準がある。それは、現に同一キャンプに共住しているか否かということである。少なくともキャンプの内部においては居住者相互間で挨拶が交されることがけっしてないという事実は、この相互行為が基本的には、サンの集団帰属性の根幹をなす、〈内部〉と〈外部〉との区分を表示する働きをもっていることを示している。

同一キャンプでの共住は、あるパーティが他所へふらりと“移住” (*kjue:*) してしまえばたちどころに解消される。キャンプ内で何らかのトラブルが起ると、その当事者たちは、それぞれ対立の相手がいない所で、「かれらはわれわれを“疲れさせる” (*taukaho*) から“移動” (*kjue:*) しよう」と私に囁きかけるのを常としていた。サンにとって *kjue:* とは、相互扶助的な社会関係の切断をもっとも端的に表わす決定的な行為なのである。*kjue:* という言葉が、コンフリクトの潜在している文脈で非難や威嚇の意味をこめて頻繁に用いられるということこそは、「現に共住している」という事態がいかにクリティカルなものであるかをネガティブな形で照射している。サンたちは誰もこのキャンプが一時的なものであることを知っている。それにもかかわらず、かれらは「この今」を第一義的な基準として「われわれ」と「かれら」とを類別するのである。このような、〈現在〉に焦点を定めた他者類別の方法こそ、本来流動的なサンの社会編成にもっともふさわしいのである。

次に第二の「主題」が担っている社会的メッセージについて考えてみよう。訪問者が、実際上その場にすわってから挨拶は交されるのであるから、挨拶それ自体には、*micro-territory* に侵入することの許可を求めたり、それを与えたりする機能はないと言えよう。言い換えれば、居住者には訪問者の接近を拒む手だては何ひとつない。すなわち、訪問者の侵入が居住者によって無視ないしは黙認されるという慣行が表わしている第一義的な社会的メッセージとは、キャンプという *micro-territory* の〈開放性〉である。

だがこの第二の主題は、一対一の挨拶のイニシアティブを居住者の側が握っているという第三の主題の前提ともなっている。この第三の主題には、もし望むならば居住者は訪問者を長時間「不可視の人」の立場に宙吊りにしておくことができるという潜在可能性が内包されている。そこに表明されている社会的メッセージとは、居住者の側の〈優位性〉にほかならない。

transaction のレベルでの分析から、訪問とは基本的には、居住者から訪問者へという一方的な物資の流れが優先的に起こる社会的できごとであることがわかった。それゆえ、訪問の真の動機づけが何であれ、訪問者はつねに居住者から何らかのもてなしを受けることを期待しうるし、またそのような期待を抱いているとみなされざるをえないのである。

Lee は、サンの社会生活の中には「与える者」の傲慢を打ち砕くさまざまな工夫が埋めこまれていると論じている [LEE 1979: 244-246, 458]。だが贈与者の謙遜と、受け取る者の嘲罵といった態度の特質を、傲慢さを抑制する社会規範へのみ還元することは一面的であろう。居住者と訪問者の双方が互いの前で演じてみせる「行動的弁解」やさまざまな「小さい行動」を検討すれば、サンは平等主義的規範に則って躊躇なく適切な態度をとりうるというのではなく、与える者=受け取る者という本来的に優位性と結びつかざるをえない関係性に直面したとき、それなりに当惑しながらも、多分に ad hoc な戦略によって対面相互行為を進行させていることがわかる。

確かに、与える側には控え目な態度が顕著に見てとれる。しかし、それは傲慢であるという非難を怖れての謙遜というよりも、むしろ、与えることがつねに不承不承の行為であることを表明する憂い顔なのだともみなすほうが、より自然な、そしてリアルな解釈であろう。

この解釈は、居住者の側の「見ない」という基本的な行動戦略を理解するうえでもっとも有効なものである。サンはけっして訪問者を拒むことはできない。だが、訪問者の存在を認知することを可能なかぎり遅らせるということは、かれが本来「招かれざる客」なのだというサンの社会生活の根底にある原則を繰り返し確認する、有効な手段なのである。そしてこのことは、その後訪問者と居住者の間に交される相互行為が実際には出会いの歓びに満ち溢れたものかもしれないという可能性とは、何ら矛盾しないのである。一対一の挨拶のイニシアティブを確保するという一見些細な特権を行使することによって、居住者がじつに微妙な形でおのれの優位性を発露する一方で、その場に坐りこんで居住者の側からの働きかけを辛抱よく待ち続ける訪問者は、劣位場の立場を進んで引き受けているのである。

いわゆる伝統社会の中で、挨拶行動のような微視的な対面相互行為の構造と戦略とを、社会構造と関わらせながら論じた研究はけっして多くはない。ここでは、サンの「平等社会」とはまったく対照的な、西アフリカの農耕民 Wolof のカースト社会における挨拶行動との比較を簡単に試みてみよう [IRVINE 1974]。

Wolof の挨拶は純粋に dyadic な相互行為であり、また出会いの開始に必須のもの

であるという点でサンの挨拶と類似しているが、他の多くの点で明らかな対照をみせている。第一に、それはサンの一対一の挨拶のように質問者と応答者が交替するのではなく、2つの役割が最後まで分化しているという意味で、完全に相補的なパターンをもっている。第二に、Wolof の挨拶はサンのそれに比べてはるかに入念な型式を備えているばかりではなく、遂行の義務もまたはるかに厳格である。すなわち、サンにおいては、年齢、性、社会的距離といった変数に応じて、多くの社会的出会いにおいて挨拶が省略されるのに対して、Wolof では挨拶は「原則としてお互いに見える範囲にいるすべての二者の間で起こらねばならない」[IRVINE 1974: 168]。そして最後に、これがもっとも重大な相違点であるが、サンでは接近してきた他者を迎える者が開始者となることが多いのに対して、Wolof では自ら相手に接近する者が開始者となり、しかも開始者＝質問者であることは、社会的劣位性と結びついているのである。もしも相対的な優劣についての合意がただちに得られない場合は、Wolof は“self-lowering”または“self-elevating”という二通りの戦略のどちらかを選択することによって、二者間の関係を操作し定義づけようとする。低い地位の役割をとった者は、相手に対する援助や贈与の義務から免れるので、“self-lowering”という戦略のほうが頻繁に用いられるという [IRVINE 1974: 175-179]。

おそらく、注意深い定義を携えれば、地球上のほとんどあらゆる民族において「挨拶」と呼びうる相互行為を同定することは可能であろう。サンと Wolof の挨拶にみられるこれほどきわだった対照が如実に示しているのは、ヒトにとって普遍的とみなしうるような対面相互行為の規則と、その「規則を manipulate する」[IRVINE 1974: 167] ための戦略とが、いかに当該社会の全体的構造と深く関わっているかということである。言い換えれば、Wolof という厳格な階層構造を備えた社会との対照において、サンの平等主義といわれるものの本質が対面相互行為の構造の中に明白に浮かびあがってくるのである。

そのような本質的特徴をひとくちにく関係相称性 > (relational symmetry) と呼ぶことにしよう。それは、相互行為におけるどのような相補的役割であれ、その役割が逆転されうるという保障が、慣習的プログラムの主題の中に組みこまれていることを意味している²⁵⁾。たとえば、サンの「公式的挨拶」はおそらく Wolof の挨拶に匹敵するほど入念なものであろうし、近況を報告する話し手と、フレーズごとに相槌を打

25) 私は前に、男はけって女の虱取りをしないという特徴を役割の逆転が不可能であることを強調し男女の差異をきわだたせるという慣習的プログラムの表われと解釈した [菅原 1986a: 144]。この解釈が正当なものならば、少なくとも社会行動のレベルではサンの男女は「平等」ではないことになる [cf. LEE 1982]。

つ聞き手とが明確に分化しているという意味で、相補的な役割分化をもった相互行為である。だが一方の「報告」が終われば、他方が「報告者」となることによって、両者の役割は逆転し、相称性が実現されるのである。

このような視点から、挨拶の開始者になるという役割と、参加者の優劣関係との間の関わりについて、改めて論じてみよう。訪問者がその場にとどまっているかぎり、居住者は遅かれ早かれ訪問者の存在を認め、一対一の挨拶を開始せねばならない。すなわち、挨拶のイニシアティブを握っているということは特権であると同時に、いつかは必ずそれを行使せねばならないという義務をも居住者に負わせるのである。逆に訪問者は、相互行為を開始する責務を居住者に委ね、自分は受身の立場に退くことによって、居住者が能動的にふるまうように仕向けている。

北村光二はサンの平等主義を支える行動的基盤のひとつとして、相手の側からの自発的な働きかけをひき出そうとする配慮を挙げている。このような配慮は、どのような相互行為であれ、それを始めた責任は相手の側にあるのだという印象を周囲の人々に与える *tactics* とも解釈されうるものである [KITAMURA 1986: 24]。北村のこの論述に従うならば、相手を「能動性」へと追いやる *tactics* を成功裡に実行しているのは訪問者の側だということになる。

じつはこのような合わせ鏡のような関係は、「主人は奴隷の奴隷である」というヘーゲル的テーゼに代表されるような、自己＝他者の弁証法的関係に関わる思弁の中ではおなじみのものである。それでは、このような弁証法的関係に優劣関係という概念をあてはめること自体が誤っているのだろうか。私はそうは思わない。本論文では、訪問者に特有な空間的位置どりや、場にとどまることへの承認を狙う様々の戦略を明らかにしてきた。これらはすべて、居住者の権利を尊重し、それに敬意を払うという訪問者の根本的に「控え目な」(*reserved*) 態度を表明していると考えられる。そしてこのことこそが、*micro-territory* という概念のもっとも実質的な意味なのである。すなわち、*territory* とは、その内部では占有者が侵入者に対してア・プリオリに優位にふるまう空間のことなのである。

すなわち、問題の本質は優劣関係という概念の当否にあるのではなく、サンにおける訪問という社会的できごとの構造そのものの中にあるのである。訪問こそは、サンの社会生活の中で、関係相称性がもっとも顕著に発揮されるできごとである。前に、キャンプ間の互酬的な相互扶助関係を考察する際に、その本質が立場の逆転可能性にあると述べたが、このような均衡的互酬性の関係と訪問活動の関係相称性との間には明確な相違がある。すなわち、人はたとえ望んでも *hunter* から *helper* へ、あるいは

はその逆方向へと役割を変化させることができるとはかぎらないのに対して、訪問者—居住者というすぐれた相補的な役割は、個々人の自発的な決意によって別の機会にはたやすく逆転されうるものなのである。

それゆえ、訪問者を前にしたとき居住者が担う優位性とは、〈状況的優位性〉(situational dominance) と呼びうるものである。Wolof では、社会的優位性が先験的的属性として個々人に貼りつけられているからこそ、実際の対面相互行為において一方の参加者は劣位者というにせよ役割を身にまとうことによって贈与者の義務から免れることができる。それに対してサンにおいては、優位性は状況的にしか定まっていないからこそ、その状況の中に配置された人は、自発的に贈与者の役割を引き受けざるをえないのである。そしてこのことこそが、居住者は訪問者を拒むことができないということ——すなわち micro-territory の開放性の真の意味なのである。

近年、挨拶と社会的優劣関係との関わりについて二つの重要な論考が発表されている。小川了は挨拶には「お互いが同一集団に属することを確認させる」融和の機能があることを認める一方で、それは「必然的に上下の差を背景にしており、さらには上下の秩序を(再)確認させる機能を果すものではないか」という考えを提起している。さらに小川は前述した Irvine の報告を引きながら、挨拶とは必ずしも下位者から上位者へ向かって行われるとは限らないが、下から上へという方向にはかなりの普遍性があるのではないかと論じている [小川 1984: 137-139]。

これに対して染谷臣道は、ジャワの都市社会においては「いきなり上位者から下位者に向かって挨拶語が発された事例」がけっして珍らしくないことを強調し、挨拶の機能を下位者からの宥和にのみ求める見解に疑義を呈している。染谷は上位者からの挨拶を「思いやり」または「同一感」に裏打ちされたものとみなし、挨拶行為の基本的機能として、一体感の醸成、あるいは「言葉による共感」(phatic communion) を重視している [染谷 1986: 227-228]。

小川も染谷も、優位者から劣位者への挨拶の機能を表わす用語をとくに区別してはいないが、私はチンパンジー研究者が使用する“reassurance”(慰撫)という言葉がもっとも適切ではないかと考える [NISHIDA 1970: 74]。挨拶の社会的機能を考究しようとするとき、それぞれの研究者が取り扱う民族集団や社会的場の特性に従って、〈融和〉、〈宥和〉そして〈慰撫〉のどれかがとくにクローズアップされることは予想に難くない。しかし、どの機能を重視するにせよ、それらは基本的には相互行為の中での参加者の心理的欲求の充足を前提としている点で共通している。

挨拶の開始者の役割と社会的劣位性(あるいは優位性)との間にどの程度普遍的な

結びつきが見出されるのかという問題に現時点で結論を下すことはできない。しかしこの種の論議を進めるためには、それが何を達成するのかという機能的観点からの分析だけでは不十分であろう。本稿で特に強調したかったのは、第一には、対面相互行為は階層的に構造化されたプログラムに司られているという観点であった。サンにおいて「挨拶を開始すること」が特権でありうるのは、訪問者と居住者が互いを「見ない」というステージを経てそれが起こるからにほかならない。

第二に、慣習的プログラムはつねに「主題」とその「変奏」を内包しているのであるから、対面相互行為のある役割と参加者の社会的属性との結びつきは、つねに確率的なものである。それゆえ、両者の間に100パーセントの相関を仮定して社会的機能を推測することは、個々の参加者の主体的な戦略を軽視する結果を生むであろう。

しかし、最後に、慣習的プログラムの「主題」は、社会の深層構造と密接な関わりをもっていることは、繰り返し強調しておかねばならない。おそらくもっとも容易な議論の方向は、サンの社会は「平等社会」なのだから、かれらの挨拶も＜融和＞の機能によって解釈すべきであるというものであろう。これに対して、私はあえて状況的優位性という概念を導入した。それは小川が「上位者と下位者の両方ともがいさつの中でお互いの位置を感知する」[小川 1984: 138]と述べるときの「上下関係」とはかなり異質なものかもしれない。しかし状況的優位性もまた、究極的には、ヒトおよびヒト以外の霊長類において普遍的な社会的規矩とされている＜優位性＞という概念に根ざしていることは確かなのである。

伊谷純一郎は、その雄渾な論考の中で、霊長類から人間への社会進化を、原初的平等から先験的不平等へ、そして先験的不平等から条件的平等へという枠組を用いて跡づけている [伊谷 1986]。伊谷のこのシェマに従うならば、条件的平等が先験的不平等を前提にしているのと度々パラレルに、状況的優位性——すなわち伊谷の用語法によれば条件的不平等——は先験的平等を前提にしているのである。なぜなら、それぞれの micro-territory を占有する異なる居住集団に属する人々は、互いに完全に対等だからである。伊谷は、条件的平等を支える社会的な約束の根源に「社会的不平等性への畏懼」を見る点で、Lee と軌を一にしている。だが、このような観点は、同一集団内の社会的交渉のよって立つ規矩を理解するうえでは有効性が高いとしても、異なる集団間の関係を理解するうえでは不十分なものである。理論的には、異なる集団は、それぞれ完全な閉鎖系をなして互いに拮抗しているとき、完全に平等である。もしもその成員どうしが完全に平等な相互行為をもちうるとしたら、それは両集団の境界にある“no man's land” [HEINZ 1972: 408] に両者が出向いて何らかの交渉を

行うときだけであろう。

Heinz の報告した !Ko ブッシュマンの例を除けば、上述のような集団間関係は多くのサンの流動的な社会編成の対極をなすモデルである。サンの社会が原初のあるときに流動性＝開放性という本質的な特徴を刻印されたのと軌を一にして、居住集団どうしの平等性を前提としながらも、異なる集団に属する成員間の出会いに「条件的不平等」を導入する訪問というできごとの基本的な構造も確立したと考えられる。しかしこのような思弁を精密化することは、別の機会に譲ることにしよう。

謝 辞

本研究は昭和59年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）「乾燥帯アフリカにおけるヒトの行動と適応の研究」の交付を得て行われた。上記研究代表者田中二郎教授（京都大学アフリカ地域研究センター）には懇切な御指導を賜った。研究分担者である北村光二助教授（弘前大学）からは調査中に多くの御助力を得た。本研究は国立民族学博物館共同研究「集団の編成と統合」（研究代表者 福井勝義助教授）ならびに「文化としての身体の民族学的研究」（研究代表者 野村雅一助教授）における討論から多大の示唆を得ている。北海道大学文学部行動科学科のスタッフの皆様方には、長期にわたる海外出張のために御迷惑をおかけした。とくに岡田宏明教授からは終始暖かい激励を賜った。この場を借りて以上の方々々に心より感謝の意を表したい。最後に私の無様なふるまいをいつも笑って見過ごして下さったサンの友人たちに深く御礼申し上げる。

文 献

ANDERSON, J. W.

1972 Attachment Behaviour out of Doors. In Nicolas Blurton Jones (ed.), *Ethological Studies of Child Behaviour*, London: Cambridge University Press, pp. 199-215.

BARNARD, Alan

1979 Kalahari Bushman Settlement Patterns. In P. C. Burnham & R. F. Ellen (eds.), *Social and Ecological Systems*, London and New York: Academic Press, pp. 131-144.

カラン, H.

1980 『動物の行動と人間の社会——社会行動への構造的アプローチ——』 寺嶋秀明訳 海鳴社。

CALLAN, H. M. W., M. R. A. CHANCE & T. K. PITCAIRN

1973 Attention and Advergence in Human Groups. *Social Science Information* 12(2): 27-41.

CASHDAN, E.

1983 Territoriality among Human Foragers: Ecological Models and an Application to Four Bushman Groups. *Current Anthropology* 24: 47-66.

CHANCE, M. R. A.

1962 An Interpretation of Some Agonistic Postures: The Role of "Cut-Off" Acts and Postures. In *Evolutionary Aspects of Animal Communication, Symposia of the Zoological Society of London* 8, London and New York: Academic Press, pp. 71-89.

DRAPER, Patricia

1976 Social and Economic Constraints on Child Life among the !Kung. In Richard B.

- Lee & Irven DeVore (eds.), *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 199-217.
- 1978 The Learning Environment for Aggression and Anti-Social Behavior among the !Kung. In Ashley Montagu (ed.), *Learning Non-Aggression: The Experience of Non-Literate Societies*, London: Oxford University Press, pp. 31-53.
- DUNCAN, Starkey D., Jr.
 1981 Some Notes on Analyzing Data on Face-to-Face Interaction. In Mary R. Key (ed.), *The Relationship of Verbal and Nonverbal Communication*, The Hague: Mouton, pp. 127-138.
- EIBL-EIBESFELDT Irenäus
 1972 Similarities and Differences between Cultures in Expressive Movements. In Robert A. Hinde (ed.), *Non-Verbal Communication*, Cambridge University Press, pp. 297-314.
 1974 The Myth of the Aggression-Free Hunter and Gatherer Society. In Ralph L. Holloway (ed.), *Primate Aggression, Territoriality and Xenophobia: A Comparative Perspective*, London and New York: Academic Press, pp. 435-457.
- EKMAN, P. & W. V. FRIESEN
 1969 The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage and Coding. *Semiotica* 1: 49-98.
- GOFFMAN, Erving
 1971 *Relations in Public*. New York: Harper & Row.
- ゴッフマン, E.
 1974 『行為と演技——日常生活における自己呈示——』石黒毅訳 誠信書房。
 1980 『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて——』丸木恵祐・本名信行訳 誠信書房。
 1985 『出合い——相互行為の社会学——』佐藤毅・折橋徹彦訳 誠信書房。
- GOODALL, Jane
 1965 Chimpanzees of the Gombe Stream Reserve. In Irven DeVore (ed.), *Primate Behaviour*, New York: Holt, Rinehart & Winston, pp. 425-473.
- GOODWIN, Charles
 1981 *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. Academic Press.
- GUENTHER, M.
 1981 Bushman and Hunter-Gatherer Territoriality. *Zeitschrift für Ethnologie* 106: 109-120.
 1985 From Foragers to Miners and Bands to Bandits: On the Flexibility and Adaptation of Bushman Band Societies. Paper Presented at the International Symposium: African Hunter-Gatherers, University of Cologne, Germany (January 3-5, 1985).
- HEINZ, H. J.
 1972 Territoriality among the Bushmen in General and the !Ko in Particular. *Anthropos* 67: 405-416.
- 市川光雄
 1982 『森の狩猟民——ムブティ・ピグミーの生活——』人文書院。
- IRVINE, Judith T.
 1974 Strategies of Status Manipulation in the Wolof Greeting. In Richard Bauman & Joel Sherzer (eds.), *Explorations in the Ethnography of Speaking*, London: Cambridge University Press, pp. 167-191.
- 伊谷純一郎
 1986 「人間平等起源論」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学——アフリカに生きる——』アカデミア出版会, pp. 349-389.
- ジョリー, A.
 1982 『ヒトの行動の起源——霊長類の行動進化学——』矢野喜夫・菅原和孝訳 ミネルヴァ書房。
- KATZ, Richard
 1976 Education for Transcendence: !Kia-Healing with the Kalahari !Kung. In Richard B. Lee & Irven DeVore (eds.), *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and*

- Their Neighbors*, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 281-301.
- 1982 *Boiling Energy: Community Healing among the Kalahari Kung*. Massachusetts: Harvard University Press.
- KENDON, Adam
- 1982 The Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction: Observations on the Development of Methodology. In Klaus R. Scherer & Paul Ekman (eds.), *Handbook of Methods in Nonverbal Behavior Research*, Cambridge University Press, pp. 440-505.
- KENDON, A, & A. FERBER
- 1973 A Description of Some Human Greetings. In Richard P. Michael & John H. Crook (eds.), *Comparative Ecology and Behaviour of Primates*, London and New York: Academic Press, pp. 591-668.
- KITAMURA, Koji
- 1986 Behavioral Bases of Egalitarianism in the San Society. In Jiro Tanaka (ed.), *A Study on Human Behavior and Adaptation in Arid Area of Africa 1986*, Hirosaki: Hirosaki University, pp. 23-28.
- KONNER, Melvin J.
- 1976 Maternal Care, Infant Behavior and Development among the !Kung. In Richard B. Lee & Irven DeVore (eds.), *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 218-245.
- LEE, Richard B.
- 1979 *The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*. London: Cambridge University Press.
- 1982 Politics, Sexual and Non-Sexual, in an Egalitarian Society. In Eleanor Leacock & Richard Lee (eds.), *Politics and History in Band Societies*, London: Cambridge University Press, pp. 37-59.
- MALMBERG, Torsten
- 1980 *Human Territoriality: Survey of Behavioral Territories in Man with Preliminary Analysis and Discussion of Meaning*. The Hague: Mouton.
- MARSHALL, Lorna J.
- 1976 *The !Kung of Nyae Nyae*. Massachusetts: Harvard University Press.
- MORGAN, B. J. T., M. J. A. SIMPSON, J. P. HANBY & J. HALL-CRAGGS
- 1976 Visualizing Interaction and Sequential Data in Animal Behavior: Theory and Application of Cluster-Analysis Methods. *Behaviour* 59: 1-43.
- MORRIS, Desmond
- 1978 *Manwatching: A Field Guide to Human Behaviour*. St. Albans: Triad Panther.
- NISHIDA, T.
- 1970 Social Behavior and Relationship among Wild Chimpanzees of the Mahali Mountains. *Primates* 11: 47-87.
- 小川 了
- 1984 「物の贈答・言葉の贈答——その対応と差異——」伊藤幹治・栗田靖之編『日本人の贈答』ミネルヴァ書房, pp. 126-152。
- オルテガ・イ・ガセット, J.
- 1969 『個人と社会——《人と人びと》について——』(オルテガ著作集5) アンセルモ・マタイス, 佐々木孝訳 白水社。
- OSAKI, M.
- 1984 The Social Influence of Change in Hunting Technique among the Central Kalahari San. *African Study Monographs* 5: 49-62.
- PETERSON, Nicolas
- 1979 Territorial Adaptation among Desert Hunter-Gatherers: The !Kung and Australians Compared. In P. C. Burnham & R. F. Ellen (eds.), *Social and Ecological Systems*, London and New York: Academic Press, pp. 111-129.

- SAHLINS, Marshall
 1974 *Stone Age Economics*. London: Tavistock.
- SARLES, Harvey B.
 1975 A Human Ethological Approach to Communication: Ideas in Transit Around the Cartesian Impasse. In Adam Kendon, Richard M. Harris, & Mary R. Key (eds.), *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, The Hague: Mouton, pp. 19-45.
- SCHEFLEN, Albert E.
 1975 Micro-Territories in Human Interaction. In Adam Kendon, Richard M. Harris, & Mary R. Key (eds.), *Organization of Behavior in Face-to-Face Interaction*, The Hague: Mouton, pp. 159-173.
- SILBERBAUER, George B.
 1972 The G/wi Bushmen. In M. G. Bicchieri (ed.), *Hunters and Gatherers Today*, New York: Holt, Rinehart and Winston, pp. 271-325.
 1981 *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*. London: Cambridge University Press.
 1982 Political Process in G/wi Band. In Eleanor Leacock & Richard Lee (eds.), *Politics and History in Band Societies*, London: Cambridge University Press, pp. 23-35.
- 染谷臣道
 1986 「あいさつ語の社会的機能に関する文化人類学的考察——中部ジャワ都市社会の事例をめぐって——」『社会学討究』90: 217-244。
- 菅原和孝
 1984 「狩猟採集民社会における 個体間の近接と身体接触——セントラル・カラハリ・サンの事例より——」『季刊人類学』15(2): 78-139。
 1986a 「ブッシュマンの日常行動と集団構造」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学——アフリカに生きる——』アカデミア出版会, pp. 111-145。
 1986b 「ブッシュマンのおとなと子供の社会的相互作用」『日本民族学会第24回研究大会抄録』 広島大学総合科学部, pp. 138-139。
- SUGAWARA, K.
 1979 Sociological Study of a Wild Group of Hybrid Baboons between *Papio anubis* and *P. hamadryas* in the Awash Valley, Ethiopia. *Primates* 20(1): 21-56.
 1984 Spatial Proximity and Bodily Contact among the Central Kalahari San. *African Study Monographs Supplementary Issue* 3: 1-43.
- 田中二郎
 1971 『ブッシュマン——生態人類学的研究——』 思索社。
 1978 『砂漠の狩人——人類始源の姿を求めて——』 中央公論社。
 1986 「集住化・定住化にともなう変化の過程——セントラル・ブッシュマンの事例から——」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学——アフリカに生きる——』 アカデミア出版会, pp. 313-348。
- TANAKA, Jiro
 1976 Subsistence Ecology of Central Kalahari San. In Richard B. Lee & Irven DeVore (eds.), *Kalahari Hunter-Gatherers: Studies of the !Kung San and Their Neighbors*, Massachusetts: Harvard University Press, pp. 98-119.
 1978 *A San Vocabulary of the Central Kalahari: G//ana and G/wi Dialects*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA).
 1980 *The San, Hunter-Gatherers of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- TANAKA, J., K. SUGAWARA & M. OSAKI
 n.d. *Report of the San Investigation Carried Out during 1982-1983* (Report to the Government of Republic of Botswana).
- TERASHIMA, H.
 1986 Economic Exchange and the Symbiotic Relationship between the Mbuti (Efe) Pygmies and the Neighbouring Farmers. *Sprache und Geschichte in Afrika* 7(1): 391-405.

菅原 セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面相互行為

WILMSEN, E. N.

1973 Interaction, Spacing Behavior, and the Organization of Hunting Bands. *Journal of Anthropological Research* 29(1): 1-31.

1983 The Ecology of Illusion: Anthropological Foraging in the Kalahari. *Reviews in Anthropology* 10(1): 9-20.